

ISSN 1344-9710

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信

望

愛

2015 年度



第 21 号

宮城学院資料室

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信

望

愛

2015 年度



第 21 号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言	宮城学院学院長 嶋田 順好	3
□資料紹介		5
	『合衆国改革派外国伝道局50年略史』	
	宮城学院元理事長 出村 彰	
◆監訳		
◆『略史』あとがき		
◆解題		
□資料紹介		50
	『おむらさん』 アンナ・M・シュネーダー 著	
	宮城学院中高元校長・理事 田中 弘志	
◆監訳		
◇読後感想		
	「ともに生きる」—おむらさんを読んで、私と宮城学院のあゆみ—	
	同窓会理事 小川 愛子	
□彙報		88
	2015（平成27）年度彙報	
	宮城学院資料室	
□資料紹介		92
	晩翠、『橄欖』の巻頭詩	
◆解題	宮城学院女子大学 日本文学科教授 九里 順子	
◆巻頭詩	橄欖一号～八号晩翠の詩	

[表紙] 宮城学院礼拝堂のステンドグラス「降誕」より



巻頭言

宮城学院学院長 嶋田 順好

『資料室年報 21 号』をここに発行することができますことを宮城学院のまことの創立者であり、導き手である父・子・聖霊なる三位一体の神に感謝するとともに、執筆者、編集者並びに資料室運営委員として多くの労を担ってくださった皆様に心からの謝意と敬意を表します。

今年、宮城学院は創立 130 周年を迎えます。しかし、宮城学院を取り巻く状況は楽観を許しません。少子化の波が押し寄せ、大学も中高も入学者の減少という課題に直面しているからです。まさに今宮城学院は、嵐に遭遇していると言って過言ではありません。マタイによる福音書 14 章 22 節以下には、ガリラヤ湖に漕ぎ出した弟子たちが嵐に遭遇した時、主イエスが、湖の上を歩いて弟子たちに近づき「安心なさい、わたしだ、恐れることはない」と語りかけてくださった出来事が記されています。その言葉にペトロは「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」と応答するのです。カール・バルトがこのペトロの振舞いについて「イエス・キリストの教会には単に待つことだけがあるのではない。それを取り囲む、様々な危険があるにしても、そのように召された一人一人の人間が、急ぐということがあり、目覚めるということがあり、立ち上がるということがある」と述べています。宮城学院に連なる私たちがまた、創立者の押川方義牧師、ウィリアム・E・ホーイ宣教師、エリザベス・R・プールボー宣教師がそうであったように、急ぎ、目覚め、立ち上がるのが求められているとの思いを強くさせられることです。

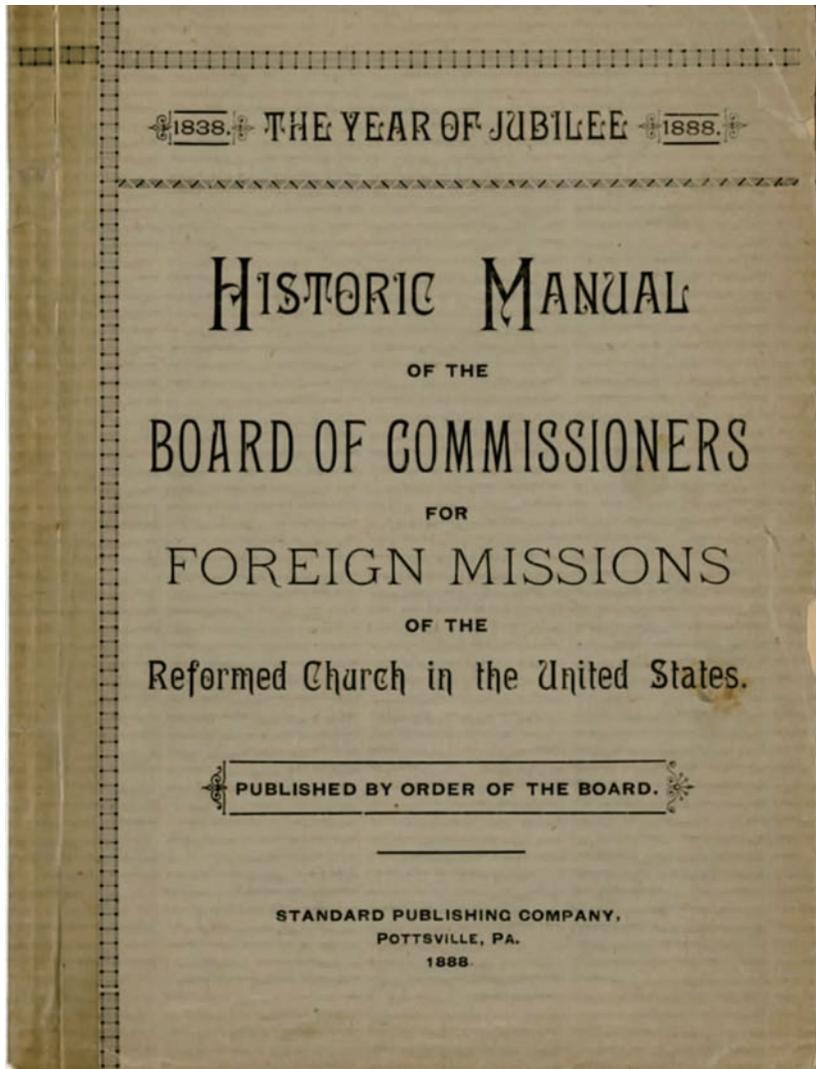
しかし、ここで心に留めなければならないことは、「来なさい」との主イエスの招きに応じて湖の上を歩きだしたペトロが、一心不乱に主イエスを見つめている時には水の上を歩けたのに、「強い風に気がついて怖く」なった瞬間、溺れてしまったということです。主イエスが共にいて、招いてくださることよりも、彼は風や波や嵐の力が勝ると思ったのです。このことは何を意味しているのでしょうか。私たちが嵐の中で急ぎ、目覚め、立ち上がるにしても、その歩むべき方向、目指すべき対象を見誤ったら溺れてしまうということではないのでしょうか。したがって宮城学院の改革も、根源的には「御言葉によって常に改革される」こととつながっていなければならないということを抜きには成り立たないということです。

今回の年報は、創立 130 周年を迎えた年に出されるのにふさわしい内容となりました。なによりも意義深いのは『合衆国改革派教会外国伝道局理事会略史』を出村彰元理事長が

監訳の労をお取りくださることで、ここに掲載することができたことです。この小冊子は、合衆国改革派教会外国伝道局の1838年-1888年に至る50年間の歩みを記しています。ことに宮城学院、東北学院の創立と草創期に関わった宣教師たちが取り上げられていることにおいて、宮城学院に連なる者たちには必読の書と言えるでしょう。また、この『略史』の歴史的・神学的背景を詳らかにする含蓄と示唆に富んだ『解題』を出村先生が寄稿してくださったことにより、学問的にもまことに価値ある出版となりました。

また、様々な試練や苦しみに遭遇しながらも、宮城女学校に学び、草創期の宣教師たちに導かれてキリスト者とされ、牧師夫人として篤き信仰と祈りと伝道の志をもって30年の短い人生を全うした『おむらさん』についてシュネーダー夫人が、深い愛情をこめて書き上げた小伝を田中弘志元校長が監訳して掲載することができたことも喜びです。『略史』は宣教師に焦点を当てて書かれています、その宣教師たちの働きの実りが『おむらさん』ですから、両様相俟って、当時の状況を生き生きと私たちが知らされることになりました。また同窓会理事の小川愛子氏が、『おむらさん』の読後感想と共に、ご自身の宮城学院における歩みを回顧したエッセーをお寄せくださったことにより、宮城学院の宮城学院らしさとは何かを、同窓生の眼差しを通して確認することができることとなりました。更に、宮城学院女学校文学会の機関紙『橄欖』の第1号～第8号の巻頭に掲げられた土井晚翠の詩を、日本文学科学科長の九里順子教授の解説を付して掲載することができました。晚翠と宮城学院の深いつながりを偲ぶと共に、晚翠の詩作を研究する上でも貴重な作品の発掘となったことと喜びに存じます。

以上、130周年を迎えた宮城学院にとって、いずれもなくてはならない貴重な資料と解題とエッセーをここにおさめることができましたことを改めて神に感謝すると共に、心を注いでご協力くださった出村彰元理事長、田中弘志元校長、九里順子教授、小川愛子理事、また資料の下訳と編集の労を取ってくださった西川淑さんと資料室運営委員の皆様から御礼を申し上げます。



東北学院史資料センター所蔵

50周年記念 1838-1888

合衆国改革派
外国伝道局50年略史

理事会出版

スタンダード出版社
ペンシルヴェニア州 ポッツヴィル
1888年

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。」

(ヘブライ人への手紙 11 章 13 節)

理事会メンバー

1838 年

ディートリク・ウィラーズ師
エライアス・ハイナー師
バーナード・C・ウルフ師
ジョン・ケアーズ師
サミュエル・ガテリウス師
ジョセフ・F・バーグ師
サミュエル・R・フィッシャー師
ジョン・J・メイヤー長老
マシュー・ショー長老
ダニエル・バッケイ長老
ジョン・B・サイデンストリッカー長老
バーチャート・メイヤー長老

主の命令

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

(マルコによる福音書 16 章 15 節)

合衆国改革派
外国伝道局
理事会略史



「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、
あなたがたにあるように。アーメン」

(コリントの信徒への手紙一、1章3節)

親愛なる牧師がたと教会員の皆様へ

外国伝道局は、過去の貴重な記憶をよみがえらせる助けとするために、現在のこの良い機会を活用することを心から願って、50周年記念の年にこの小冊子を発刊することにした。わたしたちは、われわれの教会の外国伝道活動の起源と発展に関する二、三の事実が、われわれの心に伝道に対する愛の聖なる炎を、さらに燃え立たせることと信じている。

11月に開催される(50周年)記念礼拝において、真理の使者をして、トランペットの調べをもって、異教徒の間におけるわれわれの働きの原因と進展とを宣べ伝えせしめよ。主はわれわれの喜びとする「偉大な御業を成し遂げられた」(ヨエル書2章21節)。10年前まで、われわれは外国の地における独自の伝道活動を誇ることはできなかったが、もっともそれ以前にも、他の教派の伝道団体に人材と資金を提供することによって、伝道の任務を続けてはきたのである。

改革派教会は常に伝道の精神を鼓舞され、そして主の權威ある命令に忠実に応えて、世界伝道のために絶えず主の聖餐台に献金を捧げてきた。すべての宣教努力は、まず本国の人々の心の中から始まらなければならない。もしも本国で始まらないとすれば、世界を回心させるようなことはできないだろう。もしもわれわれの教会が、遠い地の異教徒たちに福音を宣べ伝えようとするならば、まずは本国において、信者たちの欠けを補わなければならないはずである。教会は自分の綱を長くする前に、自分の杭を強くしなければならない(イザヤ書54章2節)。全世界に「父なる神の教会」を建てようにも、われわれの教会には、少数の牧師たちと資力の乏しい教会員しかいなかったことを、われわれはいつまでも心に留めて置かなければならない。そしてここにこそ、外国伝道局が100周年ではなく、50周年を祝うことの真意がある。



神学博士ディートリク・ウィラーズ師
(最初の理事長)

外国伝道局理事会の組織化

1838年9月29日に国内伝道局理事会は、ペンシルヴェニア州ランカスターで開かれていた全国総会会期中に、その年次理事会を開いた。そのとき、外国伝道局理事会を組織するという提案が、国内伝道局理事会から出されたということは、とくに注目すべきである。大会議員たちからも反対意見は何も出なかった。伝道の神が、大会議員たちの魂の中に働いておられたからである。外国伝道局理事会を直ちに立ち上げるため、5人の牧師が立ち上がり、異教徒の地における十字架の宣教師を支えようという決意を表明した。これらの神の僕らの名前と、捧げられた額は以下のとおりである。

エライアス・ハイナー師	メアリランド州 ボルティモア	120.00 ドル
ジョセフ・F・バーグ師	ペンシルヴェニア州 フィラデルフィア	120.00 ドル
バーナード・C・ウルフ師	ペンシルヴェニア州 イーストン	120.00 ドル
ダニエル・ザカライアス師	メアリランド州 フレデリック	120.00 ドル
ダニエル・ジューグラー師	ペンシルヴェニア州 ヨーク	120.00 ドル

これらの父祖たちはイエスにあって眠りについてしまったが、彼らの働きは引き継がれている。われらの主なる神が、われらの父祖たちと共におられたように、われわれと共にいますように。そして、「あの人は建て始めたが、完成することはできなかった」(ルカによる福音書 14 章 29 節)と言われて、われわれの恥となることのないように、われわれが大きな業を続けていくことをお助けください。

最初の憲章

憲章から以下の事柄を要約する。

1. 外国伝道局理事会の目的は、異教徒の間にキリストの福音を広めることにある。
それは福音の説教、学校教育、出版物の刊行による。
2. 理事会は 12 人の理事で構成され、牧師と教会の長老とから成る。
3. 1 度に 50 ドルを献げた場合、寄附者は理事会の終身名誉会員となる。

1838 年時の理事会メンバー

ディートリク・ウィラーズ師
エライアス・ハイナー師
バーナード・C・ウルフ師
ジョン・ケアーズ師
サミュエル・ガテリウス師
ジョセフ・F・バーグ師
サミュエル・R・フィッシャー師
ジョン・J・メイヤー長老
マシュー・ショー長老
ダニエル・バッケイ長老
ジョン・B・サイデンストリッカー長老
バーチャート・メイヤー長老

良き第一歩

大会は良き第一歩を踏み出した。大会の代議員たちは外国伝道局理事会設置に賛同しただけでなく、その新しい目標に対して 945 ドルを献げた。

何ゆえに大会は、あの時・あの場で、外国伝道局を組織することを決めたのだろうか。答えは簡単である。「時が満ちていた」（ガラテヤの信徒への手紙 4 章 4 節）のだ。教会ではその機が熟していた。だが、われわれは小アジアのブローサにおけるベンジャミン・シュナイダー師の素晴らしい働きが、強大な影響を及ぼしたのが原因であると理解する。異教徒をイエスに導く彼の努力でもって、彼はわれわれの教会へと異教徒を導いたのである。では、彼の生涯の歩みを正確に記録しよう。それは誠実きわまりない苦労と、優れた成功に満ちたものであった。

ベンジャミン・シュナイダー師の生涯と働き

シュナイダー師は1807年1月18日、ペンシルヴェニア州モンゴメリー郡ニューハノーヴァーに生まれた。父は長年彼の生まれた土地近くのラングシュワム改革派教会で、信心深い長老であった。

16歳で、ノリスタウンの高等学校で勉強を始めるため、家を離れた。彼はそこではジェームズ・C・ハウ師の世話になり、知恵だけでなく神の恵みと信仰においても成長した。彼は長老派教会の会員になった。

アマースト大学とアンドーヴァー神学校で定められた課程を終えて後、彼は将来のライフワークとなるニューカッスル中会によって、「和解の務め」へと厳かに立てられた。

彼が学び始めた初期の段階では、国内の父祖伝来の教会で働くことを考えていた。しかし、アンドーヴァーで暮らしている間に、彼は「来て、わたしたちを助けてください」（使徒言行録16章9節）という叫びを聞いたのだ。彼はこう答えた「わたしはここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ書6章8節）。彼は教授への最初の手紙でこう書いている、「かくも大きな仕事に対して、自分が不適任なことはたいへんよく分かっています。しかし、もしわたしの奉仕で役に立つことがあるとすれば、この崇高で光栄な目的に身を献げることを幸せに思います」。

1833年9月15日、ベンジャミン・シュナイダー師は、マサチューセッツ州フレイミングムのミス・エリザ・C・アボットと結婚した。彼女は信心深く、知的で活動的な女性であった。同じ年の12月12日、彼らはアメリカン・ボード（A.B.C.F.M）理事会の援助を受けて、キリスト教伝道の働きを始めるため、ボストンからトルコへと出航した。彼の最初の任地は小アジアのブローサだった。そこで彼はおよそ15年を過ごした。

1849年、彼はアインタブに派遣された。そこで彼は教会を設立し、またキリスト教聖職者になろうとする多くの若者を訓練し、こうして、福音を多くの人に宣べ伝えることに大きな成果をあげた。

アメリカ訪問中の1856年、シュナイダー師は、アインタブにいる妻の死という悲報を受け取ったが、アメリカン・ボードの意向に従って、1858年まで帰国しなかった。この間に、彼は最初の妻の姉妹のミス・スーザン・M・アボットと再婚した。彼女はあらゆる点で、彼の困難な仕事に対する真の協力者としてふさわしい女性だった。



神学博士ベンジャミン・シュナイダー師
（42年間、外国宣教師として献身）

1875年、シュナイダー博士はトルコのマーソヴァンにある神学校で責任を負うために遣わされた。その町に到着するまでの間、彼は何千もの餓えに苦しむ人々を見た。ペンシルヴェニアより大きくないこの地区では、老若を問わず、15万もの人々が饑餓によって亡くなっていたのである。彼が健康を害したのは、この悲惨な光景の真中においてだった。彼は脳軟化症にかかってしまっていたのである。

1876年の終わりに、夫の健康を回復させるために献身的な妻の勧めで、彼はスイスに赴いた。しかし、スイスの医者は、彼を急いでアメリカに連れ帰るよう彼女に勧めた。2～3週の間、ルドルフ・F・ケルカー長老が自宅で彼の世話を見て、温かくもてなしてくれた。ケルカーの家は、ペンシルヴェニア州ハリスバーグにあったのだが、そこからボストンへ彼を連れていった。そこで彼は1877年9月14日、70歳7ヶ月23日の生涯を終えた。

シュナイダー博士は真の宣教師であった。彼と接した人はだれでも、彼の魂が伝道の使命の炎で、燃え立つように輝いているのを見いだすのだった。40年以上もの間、彼は伝道・奉仕のほとんどすべての種類の働きに従事した。彼が常に喜びとしていた説教においても、また翻訳に従事する時にも、そして彼ら自身の国で聖職者になるように、若者を育成する任務にも従事したのである。彼は力ある祈りの人であった。彼は祈りのために特定の時間を決めており、その時間は聖別されていた。彼の祈りの特色は彼の説教に表われている。実のところ、ここにこそ説教における彼の成功の秘訣があった。彼の生涯は祈りの毎日だった。彼は言語修得においても、素晴らしい才能を持っていた。英語、ドイツ語、ギリシア語、およびトルコ語を、まるでそれぞれが自分の母国語であるかのように、容易に、そして流暢に話した。彼は偉業を成し遂げたが、同時に幼な子のような心の持ち主だった。

彼は人から名誉を求めるのではなく、神から与えられる名誉を求め、彼自身の良心の満足を求めた。事実、義務を果たすことにおいて、彼のもっとも重要な働きは隠されていた。しかしその成果が、終末の日に明らかにされる時、現在知られているよりさらに多くのことが分かるだろう。彼の生涯は見栄のないまじめさ、口では言い表わされない労苦、不平をこぼさない持続力が発揮される人生だった（ヨハネによる福音書5章41節参照）。

母教会に戻る

この神の人は、われわれの教会の心の中に生まれたが、教会籍の上ではしばらくの間、われわれから離れていた。ではどのようにして、いつ、彼がわれわれの教会に戻ったのかを確かめよう。

外国伝道局の組織化の後、外国の地で働く宣教師を獲得する努力がなされたが、容易には成功しなかった。そこで問いが起こった、どんな特定の伝道がわれわれの教会の援助を受けるべきか、と。この質問に対する答えはただ一つだけだった。シュナイダー師、すな

わち「われわれの肉の肉、われわれの骨の骨」(創世記2章23節)が、長老教会からわれわれの教会へ会員籍を移すならば、ブローサでの任務のためにわれわれの資金を用いることが可能となるだろう、と。

1840年、この提案がニューカッスル中会で出されたが、議員たちは、彼らの忠実な宣教師を手放すことをよしとしなかったし、シュナイダー宣教師もまた、長老教会の中会から分かれることをよしとしなかった。「しかし」、すべての問題点を十分に、そして信仰深く熟慮した末に、長老教会中会は「もし、キリストの御国の益となるならば、そして、外国伝道の推進が、ドイツ改革派教会の役に立つのなら、われわれはそのように取り計らうことに異議はない」と通告した。転籍は1845年のことだった。それから1864年まで、われわれは中部トルコ宣教師団のためにアメリカン・ボードへ定期的に献金してきたが、それ以降は、「海外伝道」の主題は、教会の人々の心にいっそう深く根づき、それまでは眠りに陥っていた多くの教会員にとって、測り知れない喜びと祝福になっていたのである。

シュヴェンクフェルト派からの献金

嬉しいことに、1845年には、ペンシルヴェニア州モンゴメリーに居住するシュヴェンクフェルト派の人々が、ブローサでの宣教活動を支援するために、273ドルを献金してくれた。それは疑いもなく、シュナイダー宣教師への敬愛と信頼のしるしであった。

シュナイダー博士のアメリカ訪問

1852年、上記中会はベンジャミン・シュナイダー師が教会の費用で、アメリカ国内の改革派教会を巡訪するように依頼することを決議した。1856年、23年間の不在の後、シュナイダー博士は彼の故国に、そして父親の教会のふところに帰ってきた。アメリカ滞在の間、彼は1万5千マイル以上も旅を重ね、300回もの伝道推進のための会合で語りかけた。彼の尊敬に値する巡訪と、燃え立つような語りかけは、教会員の寄附に喜ばしい影響を及ぼした。人々はブローサでの伝道活動に対し、より多くの関心を持つようになったからである。

ブローサとアインタブでの伝道事業に対するわれわれの支援

われわれ自身は、中部トルコ伝道の拠点を持っていなかったが、改革派教会はアメリカン・ボードに寄附を送り続けた。それは、シュナイダー師を援助するためのものであった。1840年10月13日から、1865年10月9日までちょうど25年間の実績は以下のとおりで

ある。

トルコでの伝道活動の支援	25,703.38 ドル
アインタブで最初のプロテスタント教会の建設費用	1,324.25 ドル
アインタブで二つ目のプロテスタント教会の建設費用	697.97 ドル
最初の教会の現地人牧師のための図書館	50.00 ドル
苦しんでいるシリア人のために	<u>71.00</u> ドル
	計 27,846.60 ドル
シュナイダー師のアメリカ滞在中、改革派教会訪問の旅費	140.39 ドル
合計	27,986.99 ドル

トルコでの偉大な宣教活動の基盤は、その大部分をわが改革派教会が生んだすぐれた宣教師、ベンジャミン・シュナイダー師が築き上げたものだった。アメリカン・ボードは、われわれの教会がそのように傑出した宣教師を、中部トルコに派遣したこと、さらには、25年もの間、トルコ中部の宣教のために定期的に寄附を続けてきたという事実に対して、明白な謝意を表してこなかったかもしれない。われわれが、この事柄を格別誇り顔にしたと言うのではない。しかしながら、われわれの教会員たちがこの過去の事実を知るために、これを記録には留めて置くべきだろう。これまでなされてきた事柄すべては、ひとえに愛する贖い主キリストと、さもなければ滅びるほかがない魂の救いのためだったからである。主が最後の精算を求められる日には（マタイによる福音書 25 章 14 節以下、ほか）、「過ぎ去った時を、現状に照らして明らかにする」だろうし、すべての者がそろって神をほめたたえることであろう。

改革派教会、アメリカン・ボードへの支援を断絶する

1860 年になると、われわれの教会の全国総会は、異教徒に福音を宣べ伝えるこれまでの方策に不満を感じるようになる。ペンシルヴェニア州レバノンで開催された全国総会の取り決めは、アインタブでの伝道の使命をすべて、われわれ改革派教会の外国伝道局に移管するというものだった。しかし、アメリカン・ボードは無論のこと、シュナイダー宣教師自身さえも、これを不適切と考えた。

永年にわたってわれわれの伝道局の財務担当理事だった、R・F・ケルカー議員と、アメリカン・ボードの交信担当幹事のルーフス・アンダーソン師との間での手紙の遣り取りは、1864 年の全国総会議事録にも明らかである。アインタブ宣教事業を「われわれ自身のもの」と呼びたいという、わが改革派教会の兄弟たちの熱望を証示するため、以下で議事録から数行だけでも引用することとしよう。「もし皆さんが、1859 年の議事録を目にするならば」とケルカー長老は記している、「アインタブがわれわれ自身の手完全に移管

されることを強く願っていたことが分かるであろう。もっとも、それ以後は、全国総会においてもアインタブ宣教地域に関しては特別な措置が取られることなく、ただ教会員たちの自発的献金のみに委ねられてきたのも事実である。わたし自身としては、この関係がいつまで続くのかを推論したり、いわんや憶測したりするつもりはない」。1865年には、全国総会はわれわれ自身の宣教師団を樹立し、アメリカン・ボードに献金を送ることを止めるに至った。最後の支払いは1865年10月9日付けである。アメリカン・ボードはシュナイダー宣教師を手放すのを拒否したし、彼自身はその死去の日まで、メアリランド中会の一員であることも止めなかった。

外国伝道史における暗黒時代

1865年から1878年までの期間、われわれの外国宣教活動はいわば砂漠の中にあった。特別な関心はどこにも見られず、異教徒に福音を宣べ伝えるための献金も僅かではなかった。この実態は三つの観点から説明できるかもしれない。

1. われわれは、自分自身の外国伝道局を持っていなかった。
2. わが国では、国内伝道活動が拡張されていた。
3. われわれは不幸な神学論争によって、自分の精力を使い果たしてしまっていた。

まことに、神の御業であろうとも、たがいに争い合う時には弱体化してしまうものなのである。

しかし、この時期においてさえも、貴重な結実がまったくなかったということではない。それは、喜びの朝が来る前には、必ず涙の夜があるかのごとくであった。外国伝道局が全国総会に送った報告からも、教会が別個の宣教活動を始めるとか、あるいはわれわれ独自の宣教師を支えるための献金といった考えが、まったくなかったことは明白である。1872年の全国総会は、外国伝道局の財務担当理事に対して、彼の手中にある預金の金利、同様に諸教会からの献金を、以後は合衆国ドイツ福音派教会〔後にドイツ改革派教会と合同して、E. & R. 教会となった（1934）〕の外国伝道局に寄託するように指示した。この措置は、1875年に至って教会総会が、ドイツ改革派自身の独自の外国伝道局を創設することを議決するまで継続された。

東部インドの宣教活動へのわれわれの援助

結果的には、合衆国ドイツ福音派教会の外国伝道局に献げられた献金の総額は、979ドル81セントに留まった。この額はすべて、改革派教会のニューヨーク中会に属するオスカー・ローア師と、その同労者でシェボイガン中会に属するヤコブ・ハウザー師を支えるために用いられた。

オスカー・ローア師はインドのビスランポーア宣教団の創始者で、われわれの教会は新しい活動分野の展開に際して、人材と方途において貢献できたことを喜びとする。それ以後の歴史では、この分野がもっとも希望に溢れ、勇気づけるに足る将来を有していたからである。

インディアン（先住民）の間での伝道活動

北西中会のシェボイガン地区会は、ウィスコンシン州ウィネバゴ・インディアン族の間で、賞賛に値する伝道活動を開始した。現在の宣教師は、ジェイコブ・スタッキ師である。宣教師団はフォールズ川沿いに然るべき土地を入手し、目下の課題は当然ながら礼拝堂と宣教師館の建設である。

外国伝道局は、シェボイガン地区会に対して、この伝道活動を援助するために以下のような資金を提供した。

1878年12月13日付けで、宣教師住宅のために、200ドル

1881年5月4日～1886年3月12日まで、宣教師団の今後の活動のために、1,300ドル

総計 1,500ドル

外国伝道局の再編成

1873年に、外国伝道局の再組織のための会議がペンシルヴェニア州ハリスバーグにあるケルカー議員宅で開催された。そこに出席していたのは、神学博士トマス・S・ジョンストン師、神学博士ジョン・H・A・ボンバーガー師、神学博士W・K・ジーバー師、ジェイコブ・ダールマン・ジュニア師、およびウィリアム・D・グロス長老、ウィリアム・H・サイバート長老、ならびにルドルフ・F・ケルカー議員であった。

欠席したのは、ハーマン・ラスト師、神学博士デイヴィッド・ウィンター師、G・S・グリフィリス長老で、神学博士ダニエル・ザカライアス師は会議の数週間前に逝去していた。

顧問として出席したのは、小アジアのアイントブの宣教師、神学博士ベンジャミン・シュナイダー師、アメリカ〔オランダ〕改革派教会外国宣教師団の交信幹事、神学博士J・M・フェリス師、B・S・シュネック師、およびW・H・H・スナイダー師であった。

これはきわめて重要な会議となった。なぜならば、それはわれわれの外国伝道団の歴史において、新しい時代を象徴する結果となったからである。現在、日本で活況を呈している外国伝道の基盤を据える結果をもたらしたのも、この会議であった。

和解運動が、われわれの外国伝道局にもたらした効果

1878 年に至って、和解の精神がペンシルヴェニア州ランカスターで開催された全国総会において、もっとも歓迎すべき偉業を成し遂げるに至った。その他の多数の歓迎すべき成果と並んで、わが外国伝道局の働きに新しい起動力をもたらしたからである。それが、外国伝道局が最初に組織化されたと同じ教会を場としてなされたことは、まことに好ましい偶然の一致であり、やがては宣教の神から新しい生命を与えられる結果となった。

1878 年 5 月 22 日、全国総会の会期中に、伝道局の特別な会議が開催された。全国総会の指示に忠実に従って、伝道局理事長の神学博士デイヴィド・ヴァン・ホーン師には、中国か日本において、まったく新しい伝道拠点を築くために必要な情報を集める権限が与えられた。ここに至って無駄に費やす時間はもはやなくなっていた。9 月 30 日には、アンブローズ・D・グリーング師が最初の日本派遣宣教師として選ばれた。この日こそは、わが伝道局が開いた会議の中でも、もっとも記憶に値する重要な会議となった。宣教師が選定された日からは、増加する一方の献金が財務担当理事のもとへと流入し始めるようになったからである。財務担当理事は、1888 年 8 月 31 日に終わる財務年度の献金総額を約 2 万ドルと報告することができた。

日本でのわれわれの任務

この 10 年の間に外国伝道局は、4 人の男性、3 人の女性の宣教師を送り出すという、大いなる喜びを持った。彼らの名前と任職の日、出発の日と横浜到着の日付は以下のとおりである。

	任職日	出発日	到着日
アンブローズ・D・グリーング師と妻	1878 年 9 月 30 日	1879 年 5 月	1879 年 6 月 1 日
ジャイラス・P・モール師と妻	1883 年 3 月 13 日	1883 年 9 月	1883 年 9 月 23 日
ウィリアム・E・ホーイ師	1885 年 4 月 21 日	1885 年 11 月	1885 年 12 月 1 日
ミス・リズィ・R・プールボー	1885 年 4 月 21 日	1886 年 6 月	1886 年 7 月 1 日
ミス・メアリ・B・オールド	1885 年 4 月 21 日	1886 年 6 月	1886 年 7 月 1 日
デイヴィド・B・シュネーダー師と妻	1887 年 7 月 7 日	1887 年 11 月	1887 年 12 月 21 日
ミス・エマ・F・プールボー	1888 年 1 月 31 日	1888 年 6 月	1888 年 7 月 9 日

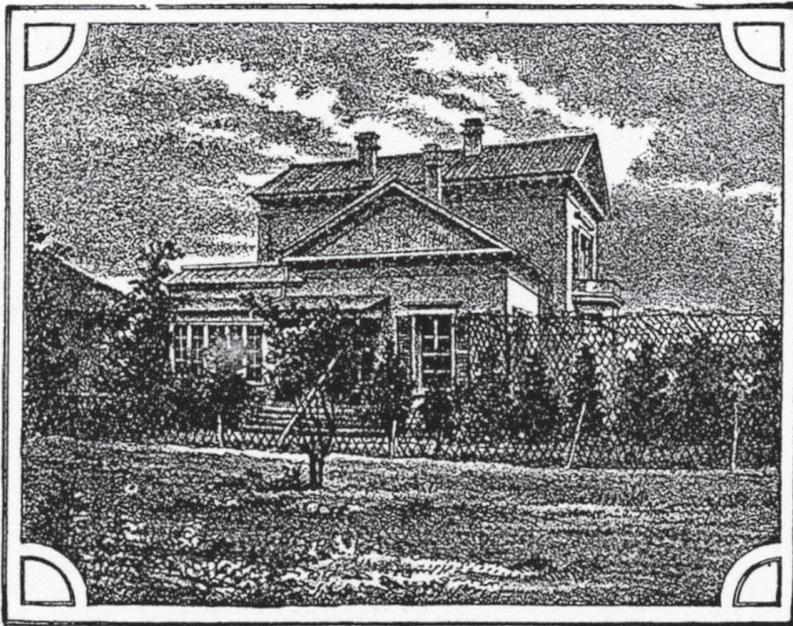
宣教師たちの寸描

グリングは1849年12月8日に生まれた。父親のダニエル・グリング師はわれわれの教派の牧師だった。グリングは若いころから宣教師になりたいという強い願望を抱いていた。そのための準備をする時期から、彼は生涯の展望を持ち続けていたのである。彼はペンシルヴェニア州ランカスターにあるフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを卒業し、さらにイエール神学校を卒業した。

外国伝道局による外国宣教師募集の呼びかけに、他にも、信仰深く有能な三人の若い男性が応募したが、何時間もの真剣で祈り深い熟慮の末に、グリング師がわれわれの教会の外国伝道の草分けとして、東京に派遣されることが決議された。

グリング宣教師とその妻は、日本での最初の一年を横浜で過ごし、そこで現地の教師の助けを借りて、難解な日本語の学習を始めた。この間にも、宣教活動の拠点を、この興味溢れる国日本の首都である東京に移すことが最善であるという結論に到達した。

1880年4月26日、外国伝道局はしかるべき土地とグリング夫妻の住居とを購入することになった。それが東京で「築地28番地」という呼び方で知られるようになる地所で、



築地28番地の建物



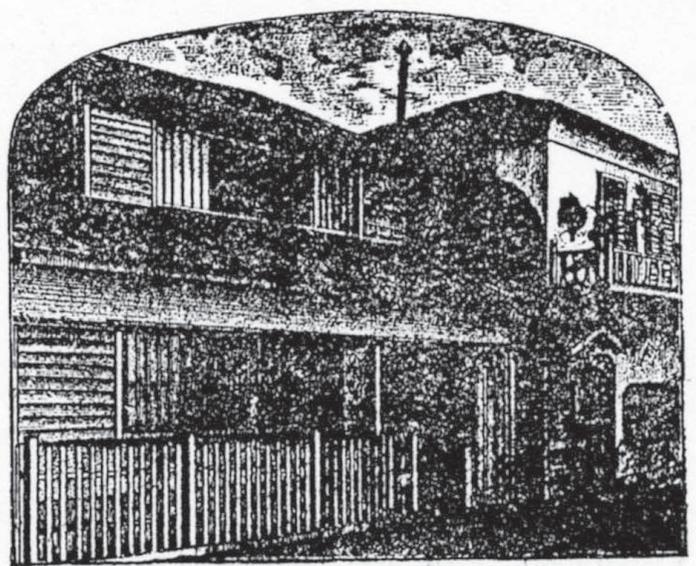
アンブローズ・D・グリング師

代価は3,955ドル55セントであった。いくつかの必要な修理を施した後、グリング夫妻は同じ年の6月に、この地に居を構えることとなった。

当然のことながら、印刷されたグリーン夫妻の肖像画、ならびに宣教師館の木版画は、母教会の日曜学校で大いに歓迎され、結果的には外国伝道局に丸々 3,372 ドルの収入をもたらしたが、この金額は実にこの住居の購入費用の 6 分の 5 にも達したのである。

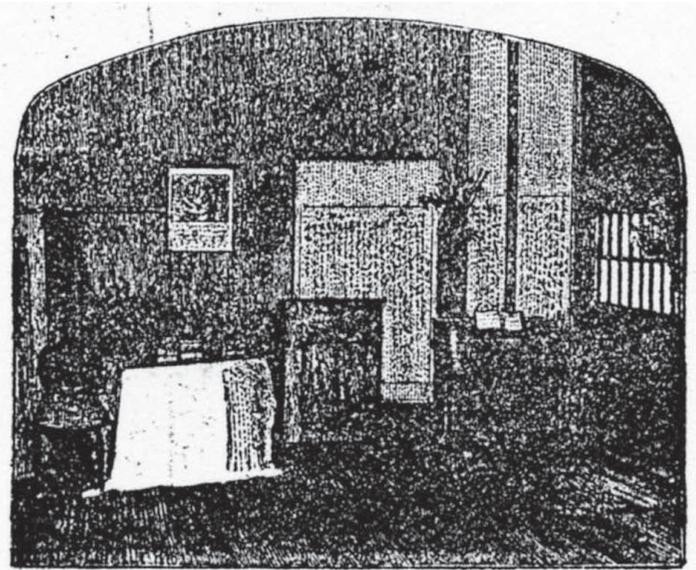
グリーン宣教師は日本語に熟達するにつれて『対訳漢英和字書』の刊行準備と、『ハイデルベルグ信仰問答書』の口語訳に多くの時間を割くことになる。『字書』は、グリーン師自身が出版経費を負担したが、『信仰問答書』は外国伝道局が経費を引き受けた。それが将来の伝道活動の展開に、きわめて有益となろうという希望が大きかったからである。

1884 年 5 月 11 日には、グリーン師は日本橋に、わが改革派教会の枝分けとして、ミッション・スクールの建物の中に第一教会を設立した。経費は、オハイオ州デイトンのベンジャミン・クーンズ長老の寄贈と、アメリカ国内の多くの家庭に飾られている画像の販売とで賄われた。実に、1500 ドル以上もの金額が、絵画の販売によって得られたのである。



EXTERIOR.

日本橋のミッション・スクール外観



INTERIOR.

室内の様子、日本橋のミッション・スクール



ミセス・ハティ・L・グリング

第5年目の年次報告（1884年）において、グリング宣教師は次のように記している。「われわれの活動はきわめて順調に伸展している。われわれは初級クラスの学童たちのために、学校の建物に二階を建て増した。われわれはまた、高齢者たちのために漢字のクラスを設けている。わたしは毎週の日曜日朝にはここで日曜学校を開き、夕刻には説教を行っている。週日には、ミセス・グリングが、若い女性たちのために手芸教室を開き、授業を終わる前には聖書箇所朗読を欠かさない。

このようにささやかな始まりではあったが、信徒たちは遠からず自給自立できるだろうと約束してくれているし、他にも四ヶ所の出張伝道所を持っている

る」。

グリング宣教師夫妻の長引く不健康の故と、母国へ戻りたいという彼らの願いを外国伝道局は聞き入れて賜暇休暇を許した。彼らはそれを受け入れ、1887年5月にサンフランシスコに到着した。グリング宣教師は現在もまだ祖国に留まり、日本におけるわれわれの宣教事業拡張のために、各地の教会を歴訪している。われわれも、わが教会員たちの心からの歓迎の意を彼らにお伝えしたい。それは、われわれがグリング夫妻の努力は必ず報いられる、と確信しているからである。

道が開けるとすぐに、外国伝道局はもう一人の宣教師を派遣する段取りをし、1883年3月13日、ジャイラス・P・モール師が、グリング師と同じ土地で活動するために選ばれた。モール師はペンシルヴェニア州バックス郡で1847年11月27日に生まれた。彼は、ペンシルヴェニア州ランカスターのフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを経て、オハイオ州ティッフィンにあるハイデルバーグ神学校を卒業した。彼は6年間の教師としての経験を持ち、また、5年間牧師としても忙しく働いた。日本に到着するやいなや、彼は日本語の学習に対して強い関心を持った。そして現在、彼はこの難しい言葉で、福音をきわめて巧みに述べ伝える伝道者となっている。



ジャイラス・P・モール師

番町教会は神に仕えるモール夫妻の熱意の成果である。それは彼らの住まいである築地4番地での、日曜夕方の祈祷会から始まった。そして彼らが市内に引っ越した時、祈祷会

も彼らと一緒に移動した。それから1年間、会合の唯一の場所は番町のモール師の家の食堂だった。この教会はその後、すばらしい教会堂を建設した。そしてその会員には、何人かの著名な家族も含まれていた。この教会は近い将来、自給自足できることだろう。

そこで、モール師に仙台転任の指示が来たとき、彼は魅力溢れる人々との聖なる交わりを失うことに気が進まなかった。会衆の中の役員たちも、自分らの誠実な牧師に奉仕を続けてもらえるよう熱望し、外国伝道局に懇願書を送ったが、外国伝道局は彼らの要望に賛同しなかったため、それまでの神の業は日本人牧師によって続けられることになった。

キリストの聖なる僕として、モール師は外国伝道局の意向に従って仙台に転任した。もともと、仙台にはほとんど落ち着く暇もないままに、1年後には神の摂理が山形に行くように命じたので、モール師は僅か1年以内に2度も住まいを変えたことになる。現在モール師は、山形の盛況を呈する英和男子学校で欠くべからざる校長として奉仕している。彼の教師としての以前の経験は、福音伝道の仕事においても大いに役立つことになるだろう。モール師はすでに、新しい会堂を持つ大きな教会の基礎を据えたことになる。彼の願いは、かつての番町教会での輝かしい活動をこの地で再現することにある。



ミセス・アニー・モール

モール夫人は、かけがえのない助力者である。彼女は貧しい人々や、困窮の中にいる人々に善き業を施すことに、決して疲れた素振りなど見せたことがない。彼女は入院している病者や、自宅にいても虚弱な人々に対して、慈悲深い天使であることを実証している。

1884年、外国伝道局はもう一人の宣教師を求める呼びかけを発した。ウィリアム・E・ホーイ師はまだ神学生だったが、魂の震えるような手紙を書いて応募した。彼はすでに1882年10月にシカゴで開催された全米神学校協議会に参加して、国外伝道への献身を決心していた。その志願書の中で、ホーイ師は以下のような心を振るわせるような言葉を記している。「この2年間というもの、かのマケドニア人の幻（使徒言行録16章6節以下）が、静かで聖なる靈感として、いつもわたしの前にありました『主の業のために備えをせよ』、と。異教徒の間でキリストのために労することが、わたしの義務であることは明らかです。わたしは地の果てにまでも遣わされる心備えを十分にしております。わたしにとって、故国にあっては心の平安を得られないことは明らかです。なぜならば、神御自身がわたしにいっそう前進するように指示しておられるからです」。

ホーイ師は1858年6月4日、ペンシルヴェニア州ユニオン郡のミフリンバーグの近くで生まれた。フランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを卒業したホーイ師は、ペンシ

ルヴェニア州ランカスターの神学校で学んだ。最終学年に学んでいるところ、彼は二人の日本人学生にキリスト教の真理を教え込んだことがある。ホーイ師は1885年の秋、外国伝道局によって送り出された。ちょうどこの頃、外国伝道局に顕著な摂理による要望が仙台から届いていた。そして、すでに日本に在住している宣教師たちの助言もあって、ホーイ師はこの町仙台に落ち着くこととなる。ホーイ師は異常なほどの情熱をもって日本語の修得に打ち込み、在任1年目の終わるころ、日本着任の満一周年記念の日には、最初の日本語説教をすることができるほどになっていた。



ウィリアム・エドウィン・ホーイ師

北日本での伝道活動には、日本人伝道者が不可欠であることは明らかだったので、神学校がなくてはならないと思われた。ホーイ師は敬虔で能力のある日本の若者たちに神学を教え込む活動を、彼らしい謙遜さをもって開始したのである。仙台に牧師養成学校（神学校）が設立されるに至ったのは、このような事情からであった。仙台の学校は日本でのわれわれの活動でもっとも重要な領域の一つである。ホーイ師はこの預言者たちの学校で、旧約聖書の預言者エリヤのような存在である。

われわれの女性宣教師

ミス・リズィー・R・プールボー、ミス・メアリ・B・オールト、ミス・エマ・F・プールボー

1884年、ミセス・ハティ・L・グリング（われわれ最初の派遣宣教師の妻）は、2人の女性教師を日本に派遣することについて、非常に強い訴えを外国伝道局に書き送った。この訴えは、教会新聞（『メッセンジャー』）を通して公表され、数人の女性が応募した。しかし、男性の宣教師を先に送り出す必要のため、この問題は慎重考慮ということとなり、保留されていた。もしも摂理がよしとするならば、必ずや道は開かれるであろうという希望を抱きながらであった。1885年4月21日、外国伝道局は2人の女性宣教師を選定した。ミス・リズィー・R・プールボーとミス・メアリ・B・オールトである。しかし、財務担当理事の手許には、十分な資金がなかったため、彼女たちは1886年6月まで日本に向けて出航できなかった。



ミス・リズィー・R・プールボー



ミセス・メアリ・B・ホーイ

ミス・リズィー・R・プールボーは、ペンシルヴェニア州バーリンの信心深い両親のもと、1854年12月27日に生まれた。彼女の父親は、教会の卓越した長老であった。ペンシルヴェニア州ヨーク高校を卒業後、公立学校のすぐれた教員になった。

ミス・メアリ・B・オールドはペンシルヴェニア州メキャクスバーグで、1863年9月10日に生まれた。彼女の父親は故ジョン・オールド師で、われわれの教派で教会担任牧師であった。彼女はペンシルヴェニア州クツタウンのキーストン師範学校を卒業した。7歳の時に父親に連れられて、メキャクスバーグの教会で、海外伝道から帰国した宣教師の話聞いたところから、長じて海外伝道宣教師になることを考えるようになった。

これらの二人の婦人は仙台において女子学校の創立者として関わる榮譽を与えられることとなり、非常な成功を収め、あらゆる点で海外伝道局の期待に答えている。



ミス・エマ・F・プールボー

ミス・オールドは1887年12月27日にはW・E・ホーイ師と結婚したので、別の宣教師を選任することが必要になった。運命の手は、リズィーの妹のミス・エマ・F・プールボーを選んだ。彼女は1856年11月3日に、ペンシルヴェニア州バーリンで生まれた。そして姉と同じく優れた教育を受けた。彼女は1888年1月31日に選出され、6月には母国を出帆し、仙台で優れた働きをしている姉と合流することとなった。外国伝道局はこの姉妹の共同の働きの成果に、全幅の信頼を寄せている。

モール師の山形への移転、およびグリング師のアメリカ帰国により、四人目の男性宣教師の選任が必要となった。1887年7月6日に開かれた外国伝道局の会議を経て、デイヴィッド・B・シュネーダー師が任命され、彼は直ちにその厳粛な指名を受け入れた。

シュネーダー師はペンシルヴェニア州ランカスター郡ボウマンズヴィルで、1857年3月23日に生まれた。彼はフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを卒業後、ランカスター神学校に学んだ。彼は宣教師として任命される前から、長らく有能



デイヴィッド・B・シュネーダー師



ミセス・アンナ・M・シュネーダー

な牧師であった。彼の卓越した学識と牧師職の経験が、彼の新しい仕事において大きな助けになった。彼は言語の習得においても急速に上達し、W・E・ホーイ師の補佐役として、仙台神学校で良い影響を及ぼしている。

ミセス・シュネーダーは、すでに仙台の女性の霊的向上に大きな関心を示している。

日本における成果

1888年6月1日で終わる本会計年度におけるわが外国伝道局の統計表は、以下に示すごとくであるが、それはわれわれの忠誠な働き人たちの一団によって果たされた事業の鳥瞰図となっている。事実、収穫の神は、人々の魂を救うための彼らの働きに微笑んでおられることであろう。実は、これまでその努力の半分ほども語られてはこなかったのである。これらの客観的で冷静な数字の背後には、感謝に満たされている老若男女の心臓の高鳴りが聞き取られるが、それは主イエスが彼らのただ中におられることへの感謝にほかならない。それは「栄光への希望」そのものなのである。

かの美しい国、日本におけるわれらの親愛なる兄弟・姉妹たちの働きの実りである輝かしい成功は、われわれの心を絶えず新鮮で新たな勇気で満たしてくれる。これらの偉大な事業の進展のため、外国伝道局は教会員すべての篤い祈り、暖かい共感の念、そしてすべての教会の惜しみない支援を懇願してやまない。今こそこの国日本の興味深く、また輝かしい将来を持つ人々を、闇と死の支配から救い出して、イエス・キリストにある光と命へと連れ戻す絶好の機会が到来しているのである。われらが親愛なるシオンの民の祈りと献身とが、この「ヨベルの年」にこそ「主の御前での記念」として、いや増すように。

願わくは、日本がキリスト教国となる日の到来を、神御自身が速めてくださいますように。

	組織化された教会	自立した教会	講義所	成人受洗者	小児洗礼受領者	連絡の取れる会員	脱会者	死亡	現在の会員数				男子校	男子学校の生徒数	女子校	女子学校の生徒数	日曜学校	日曜学校の生徒数	神学校	神学校の生徒数	日本人牧師	未按手説教者	キリスト教書頒布者	バイブルウーマン	全ての目的に対する献金 (ドル)
									男性	女性	子ども	合計													
<東京地区>																									
日本橋	1			9			5	1	25	16	9	50				1	58			1					44.63
王子				2	1		10		17	17	4	38				1	22								17.60
岩槻	1			6	2	17			53	21	7	81				1	45					1			20.98
松林・野田				1	3		14		18	9	8	35				1	38								7.20
番町	1			48		39			78	44	2	124				1	95			1	1	1			405.00
<仙台地区>																									
仙台																									
福島																									
中村	1			207				5	346	143		489			1	161			1	3	2	2		1	768.27
保原																									
岩沼	1			61					73	25		98	1	78								1		1	155.81
石巻	1			31			1		42	16		58										1			67.55
登米																									
古川				8		2			24	12		36													35.00
函館	1			20			26		42	25		67												1	178.50
紋別																									
胆振	1			77	2				67	34	2	103													210.00
室蘭																									
山形				12					16	7		23	1	83								1			40.00
合計	8			482	8	58	56	6	801	369	32	1,202	2	161	1	48	719		1	9	7	7	2	2	1,950.54

外国伝道局の役員

1838 — 1888

議員

神学博士ディートリック・ウィラーズ師
サミュエル・ガテリアス師
アンドリュー・P・フリーズ師
神学博士ジョン・H・A・ボンバーガー師
神学博士トマス・G・アップル師
神学博士クレメント・Z・ウアイザー師

副議員

神学博士エライアス・ハイナー師
神学博士バーナード・C・ウルフ師
神学博士トマス・S・ジョンストン師
神学博士チャールズ・H・ラインバック師
神学博士デイヴィッド・ヴァン・ホーン師
神学博士ニコラス・ゲール師

交信幹事

神学博士バーナード・C・ウルフ師
神学博士ベンジャミン・ボースマン師
神学博士ニコラス・ゲール師
神学博士クレメント・Z・ウアイザー師

記録幹事

ジョン・ケアーズ師
ダニエル・ジューグラー師
神学博士フランクリン・W・クレーマー師
神学博士トマス・S・ジョンストン師

幹事

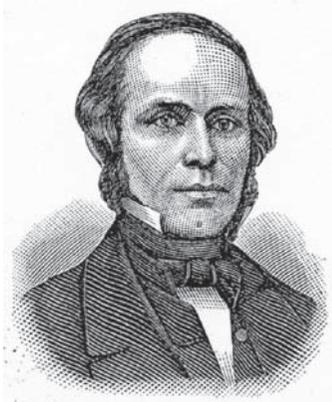
神学博士トマス・S・ジョンストン師
アレン・R・バーソロミュー師

財務担当者

ジョン・J・メイヤー長老
ジェイコブ・ベゾーア長老
神学博士エライアス・ハイナー師
ルドルフ・F・ケルカー長老
トマス・J・クレイグ長老

メアリランド州ボルティモアの神学博士エライアス・ハイナー師は、1838年に外国伝道局が発足して以後、1863年の死去に至るまで、実に25年の長きにわたって理事の職にあった。ハイナー師はわれわれの教会の中で、外国伝道事業を組織化するために、もっと

も積極的な牧師の一人だった。彼は20年の長きにわたって、伝道局の運営のほとんどすべてを引き受け、理事長および財務担当理事の職務を担ったのである。彼が執筆の任に当たった最後の文章は、分かるかぎり、彼が纏め上げた年次報告である。それは彼の死去のわずか数日後の1863年10月に、ペンシルヴェニア州カーライルで開催中の全国総会で読み上げられた。彼はこの職務に深く傾倒し、それを支えるための祈りを欠かさず、その死の直前まで、あらゆる努力を傾注したのであった。



神学博士エライアス・ハイナー師
(25年間外国伝道局理事)



ルドルフ・F・ケルカー議員
(現財務担当幹事)

ルドルフ・F・ケルカー長老は、外国伝道局の尊敬すべき財務幹事であるが、彼こそは過去と現在を結合する唯一の絆である。1863年10月に、神学博士エライアス・ハイナー師の後任となり、22年間（1875年、76、77年の3年間を除く）財務幹事として教会を守ってきた。海外伝道への愛情に溢れた尊い働きについて、彼の熱意と忠誠心とは、諸教会にも良く知られている。ハイナー師が〔シュナイダー宣教師のアイントゥブ在任時代に〕担っていたと同様に、ケルカー長老は日本に対する責務を忠実に果たすために、生涯を捧げている。外国伝道への真情溢れる心に発する貴い働きにおいて彼の熱意と忠誠心は、諸教会によく知られている。

外国伝道局の多くの働き手の中で、その善き業が認められ賞賛されてきたが、現在では聖徒として崇められている外国伝道局総幹事、神学博士トマス・S・ジョンストン師ほど輝かしい冠に値する者はいないだろう。彼は実のところ、執務中の職場で天に召されたのである。彼が作成した議事録は正確極まりなく、各地で伝道に当たっている宣教師たちへの手紙は共感に満ち、単に宣教の職務上というのではなく、宣教師たちに対して父親のような心遣いに溢れている。彼の洞察力は冴え渡っており、彼の仕事には秩序があり、彼の態度には、ぐらつかない力強さがあり、しかも優しく温和であった。

彼の死に際しての祝福は、彼がまとってきた衣鉢を受け継ぎ、彼が据えた土台の上に職務を引き継ぐために、外国伝道局によって選ばれた人材が与えられたことだった。しかも



神学博士トマス・S・ジョンストン師
(故総幹事)

このような祝福を受けた兄弟は、この時点では伝道局理事会の一員でさえなかったのである。彼が選ばれたのは空席を埋めるためだったし、上述のような事情にも疎かったのである。ジョンストン博士は、15年にわたって伝道局理事会の一員だった。彼が急逝したのは1887年6月11日、ペンシルヴェニア州レバノンの自宅においてだった。

神学博士デイヴィド・ヴァン・ホーン師は、彼自身の榮譽ともなり教会の利益のためにもなったのだが、10年間外国伝道局を統括した後、オハイオ州ティフィンにある改革派教会神学校の校長に選出された。そこで、理事長および外国伝道局の構成員を辞任する必要があると感じたが、これは大いに惜しまれた。彼の奉仕は、熱意と能力を示した性格に発し、外国伝道局と宣教師たちにたいへん慕われていた。

追記

最初の献金は1838年10月23日、教会の外国伝道局に届けられた。それは「日曜学校の教育と外国伝道団」のために、ニュージャージー州トレントンにあるドイツ改革派教会の牧師、ジョン・H・シュモルツ師による4ドルと、ペンシルヴェニア州ランカスターにあるエフラタ改革派教会に属するD・ハーツ師による7ドル31セント25ミルの献金であった。

われわれの教会からアメリカン・ボードに支払われた最初の献金1,000ドルは、1840年10月13日に交信幹事の一人であるアームストロング師に対して支払われた。われわれの教会がアメリカン・ボードに支払った最後の献金は、1865年10月9日付けで送られたものである。

外国伝道局は東京の宣教師館や日本橋の礼拝堂、そして仙台の女学校の優雅な石版印刷写真の他に、多数のパンフレットや小冊子や記事を刊行してきた。

外国伝道局が十分に納得できる理由によって、1888年7月14日に、(メキシコ通貨)3,000ドルで築地28番地の土地と建物が売却された。番町教会と日本橋教会は、これまで外国伝道局の配慮のもとに置かれてきたが、彼らの最後の報告では、今年を最後にして、財政援助を必要としなくなる見通し、とのことである。東京の宣教師館売却から得ら

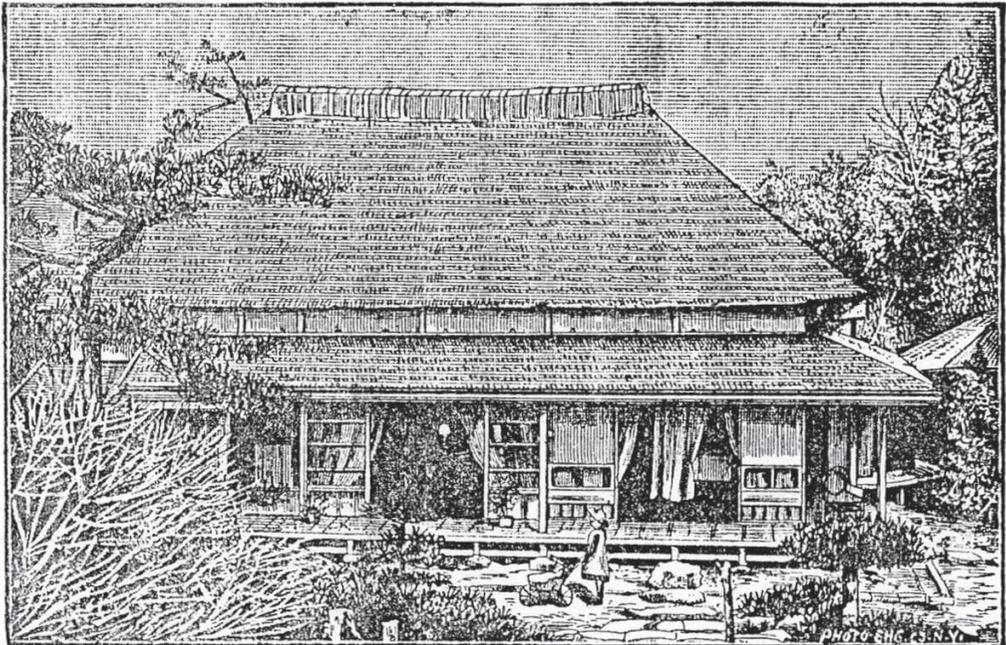
れる資金は、仙台の建物の建設に使われることになるだろう。

仙台の新しい校舎

女学校の校舎は、建設の途上にある。教師たちは次のクリスマスまで、そのことで頭が一杯だと思われる。

外国伝道局は二つの住宅をも建設中である。一つは女性教師たちのためで、もう一つはホーイ宣教師のためである。これらの建物すべては仙台の中心部にあり、2エーカーと4分の1エーカーの敷地は、1,213ドル17セントで入手できた。これは神学博士J・I・スワオンダー師と、その素晴らしい妻（オハイオ州フリーモント在住）による総計1,100ドルもの献金によるものである。

これらの建築工事は、総額およそ12,000ドルを必要とするが、仙台にとっては誇らしい飾りとなり、改革派教会にとっても荣誉となることだろう。オハイオ州デイトンのベンジャミン・クーンズ長老は、神学博士スワオンダー師の寄附金を補うために、自分自身で送料706ドルを負担して、最新式できわめて美しい設計による椅子と机とを、学校のために送り届けることになっている。



A FORMER RESIDENCE OF THE LADY MISSIONARIES AT SENDAI.

以前の女性宣教師宅 仙台

在校生のための援助

外国伝道局は神学校にせよ、女学校にせよ、在学する生徒を援助するために、各地の海外伝道協会や日曜学校、あるいは教会員個人に対して献金を呼びかけている。そのためには総計 60 ドルを毎年献金する必要があるが、前もって半年ごとに 30 ドルを前払いすることも可能である。関係者はあらゆる必要な情報を、外国伝道局幹事のアレン・R・パーソロミュー師（ペンシルヴェニア州ポッツヴィル）から入手できる。

宣教師たちの現在の住所

アンブローズ・D・グリング師	ペンシルヴェニア州ランカスター、マリエッタ通り No. 725
J・P・モール師	山形市 モトコウエンチ〔現 旅籠町か〕 日本
W・E・ホーイ師	仙台市 東三番丁 日本
D・B・シュネーダー師	仙台市 南町通り 16 日本
ミス・リズィー・R・プールボー	仙台市 東四番丁 35 日本
ミス・エマ・F・プールボー	仙台市 東四番丁 35 日本

外国伝道局の法人組織化

神学博士デイヴィド・ヴァン・ホーン師、神学博士チャールズ・H・ラインバック師、神学博士トマス・S・ジョンストン師、ルドルフ・F・ケルカー長老、ウィリアム・H・サイバート長老が提出した 1881 年 4 月 4 日付けの請願書（これは外国伝道局の以前からの指示を遂行するために作られた）は、ペンシルヴェニア州ドーフィン郡の民事訴訟裁判所に提出された。1881 年 4 月 25 日、裁判所の判決によって「合衆国改革派教会外国伝道局」は法人組織として認められた。法人化された時の伝道局の役員の名前は以下のとおりである。

神学博士デイヴィド・ヴァン・ホーン師	ペンシルヴェニア州フィラデルフィア
神学博士チャールズ・H・ラインバック師	ペンシルヴェニア州マイヤースタウン近郊
神学博士トマス・S・ジョンストン師	ペンシルヴェニア州レバノン
神学博士クレメント・Z・ワイザー師	ペンシルヴェニア州イーストグリーンヴィル
神学博士ベンジャミン・ボースマン師	ペンシルヴェニア州レディング
神学博士ジョン・H・A・ボンバーガー師	ペンシルヴェニア州カレッジヴィル
神学博士ニコラス・ゲーア師	ペンシルヴェニア州フィラデルフィア
神学博士 J・W・サンティ師	メアリランド州ケーヴタウン

ルドルフ・F・ケルカー長老
ウィリアム・H・サイバート長老
ゴールズボロー・S・グリフィス長老
ジョージ・ゲルバック長老

ペンシルヴェニア州ハリスバーグ
ペンシルヴェニア州ハリスバーグ
メアリランド州ボルティモア
ペンシルヴェニア州フィラデルフィア

外国伝道局構成員 1888年現在

神学博士クレメント・Z・ワイザー師
アレン・R・バーソロミュー師
神学博士サミュエル・G・ワグナー師
神学博士ジェイコブ・ダールマン師
ルドルフ・F・ケルカー長老
ゴールズボロー・S・グリフィス長老

神学博士ニコラス・ゲーア師
神学博士ベンジャミン・ボースマン師
A・カール・ウィットマー師
ジョン・H・プルー師
ウィリアム・H・サイバート長老
ベンジャミン・クーンズ長老

現在の外国伝道局事務局

理事長 神学博士C・Z・ワイザー師 ペンシルヴェニア州モンゴメリー郡イースト
グリーンヴィル
総幹事 アレン・R・バーソロミュー師 ペンシルヴェニア州ポッツヴィル
財務幹事 ルドルフ・F・ケルカー議員 ペンシルヴェニア州ハリスバーグ

遺贈

外国伝道局に役立てることを意図するすべての遺贈は、以下のような書式で残さなければならぬ。

「わたしは、合衆国改革派教会外国伝道局に 総額 ドルを遺贈します。」

押川師

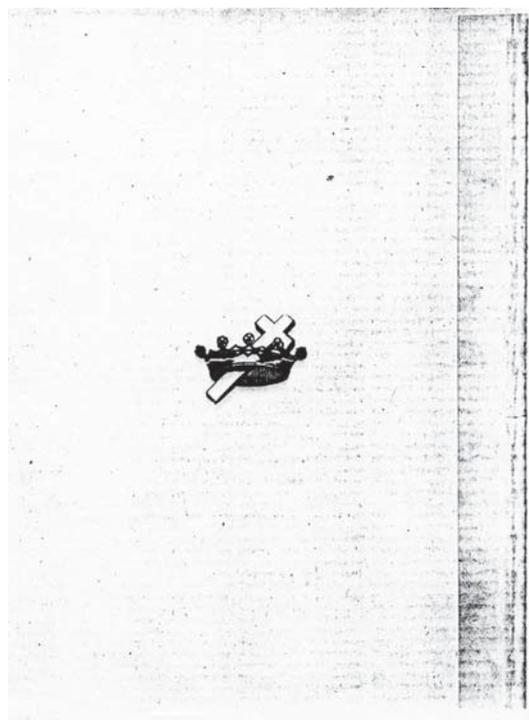
東京における、また東北地方におけるわれわれの伝道活動の成功は、日本の現地の牧師たちや伝道者たちの能力と熱意によるところが大きい。中でも、押川方義師は特筆に値する存在である。

押川師は、われわれの学校教育においても、伝道活動においても、すべての点で最高指

令官である。説教者としても経営者としても、この日本帝国において彼に優る人材は見当たらないだろう。われわれの宣教師たちはいずれも、押川師のかけがえのない助力に深い感謝の念を抱いている。

感謝の祈り

願わくは、「あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守」られますように祈ります(フィリピの信徒への手紙4章7節)。神と、われらの主なる御子イエス・キリストの愛と知識とが、確かにされますように祈ります。父・子・聖霊なる全能の神の祝福が、あなたがたの内で豊かにあり、常にあなたがたと共にありますように。アーメン



合衆国改革派外国伝道局50年略史
裏表紙

『略史』 あとがき

本小冊子は、最初の数ページにあるとおり、ドイツ改革派教会が外国伝道局を設置（1838年）して50年目を祝い、教会員の関心を高め、そこからこの目的のためにいっそうの献金を促す意図もあって、1888年に刊行されたものである。一読して明らかなように、その道のりは決して平坦ではなかった。最初期における教会員ほとんどの無関心、国内伝道（ヨーロッパからの移民や、先住民も含めて）のほうに優先するという主張、さらには同じ教派内における「神学論争」から起こる葛藤と分争など、克服すべき困難は数かぎりなかった。『解題』でも詳しく述べられているとおりである。

その意味では、ドイツ改革派は他の教派一例えば、メソヂスト派、バプテスト派、長老派など一と比べれば、後塵を拝したことになる。ようやく刊行の年のわずか数年前に日本伝道を開始するが、東京を中心とする関東や、大阪・神戸を中心とする地域は、これらの諸教派によってすでに「占拠され」（“occupied”）ていたもので、いわば未占拠地域（“unoccupied area”）である東北へと主たる力点を向けることになる。もっとも、最初期の宣教師たちがどこまでこのような事情に通じていたのかは定かでない。彼らがようやくのことで東京とその近郊に宣教拠点を設けたばかりのところ、日本の事情に必ずしも通曉していたとはとても思えない外国伝道局の指令一つで、未知の「みちのく」—仙台を拠点に、山形、福島、盛岡など—へ伝道と教育の業を伸張させて行ったのである。もっとも、それは本小冊子がカバーする時期よりも、はるか後の物語である。

学校法人宮城学院2010年度の事業報告書によれば、資料室が責任を負うべき収集保存資料として、東北学院資料室におけるミッション関係資料の調査および資料収集、同志社大学図書館所蔵『鄙語海徳山問答』（明治17年 A・D・グリーング氏蔵版）のデータ化等々を挙げているが、その成果は本訳書、および『解題』にも反映されていると言えるだろう。

この略史の日本語訳については、資料室嘱託職員の西川 淑が長い労苦の末に「下訳」を書き上げ、それに上記報告書の時点でたまたま理事長の責めを負っていた出村 彰が「監訳」の形で推敲・改訂の手を加えた。1888年と言えば、宮城学院・東北学院両学校がいわば呱呱の声をあげてわずか2年足らず、前途の困難や栄光などは予測もつかない時期である。この略史の実際の執筆者が誰であったかは想像さえ困難であるが、伝道局内部の事情に精通した人物だったことは想像に難くない。もしかすると、仙台の両学校への図書寄贈などで氏名が覚えられている財務担当幹事ケルカーだったかもしれないし、あるいは実務担当幹事として、しばしば宣教師たちの年次報告書などが宛てられているパーソロミューだったかもしれない。執筆者が海外伝道局の過去と現在に精通していたことには疑いが存しない。いわば、臨場感に満ちていると言っても差し支えないだろう。

いずれにしても、やっと刊行にまで辿り着けたことは両訳者としても感謝の至りである。

2016年3月

出村 彰 西川 淑



解題

合衆国改革派外国伝道局 50 年略史

宮城学院元理事長 出村 彰

合衆国〔ドイツ〕改革派外国伝道局の結成から日本伝道まで

Historic Manual of the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States. Published by Order of the Board (Standard Publishing Company: Pottsville, PA., 1888)

「外国伝道局 50 年略史」とでも題すべきこのパンフレットは、1838（天保 4）年に「外国伝道局」が設立されながら、実際「国外に宣教師を派遣する」までには、さらに約半世紀の歳月が必要だった事情を縷々記述し、僅かな年数のうちに、見るべき成果が日本で挙げられるに至ったことを慶祝するために刊行されたものである。実は、日本以外にも、しばしば組合（会衆派）教会を主とする The Board of Commissioners for Foreign Missions との緊密な協力のもとに、トルコを主とする中近東でも、さらには、後には合同するに至るドイツ福音教会（German Evangelical Church）との協力の形で、東インド諸島でも、伝道が展開されていた事実も紹介されている。僅か 30 数ページの小冊子ではあるが、折から大陸の西岸まで及ぼうとしていた西漸運動（Westward Expansion）の熱気、それに呼応するかのような、第三次信仰復興運動の脈動が、これらの行文からいきいきと伝わってくる感想を抱かされるのは筆者だけだろうか。

なお、ついでながら 1888（明治 21）年と言えば、東北学院（仙台神学校）と宮城学院（宮城女学校）の設立からはわずか 2 年後のことである。両校ともに、以下のような実情から今日の確固たる発展に至ったことを、感謝の念をこめて想起したい。

I - 1. 新大陸における宗教と政治

やがては「アメリカ」と総称されるようになる未知の大陸へ、ヨーロッパからの移住が始まるのは、言うまでもなく 17 世紀前半のことである。もっとも、教会統治形態において会衆主義を基本とする移民が集中したのは、アメリカ北東部ニューイングランドであった。確かに、信教の自由を求めて新大陸に移住してきたはずの、いわゆるピルグリムズ父祖たちではあったが、事実は会衆主義を基幹とする政教一致体制は、19 世紀初頭まで堅持された。自覚的回心体験を経ない住民は、政治的決定にも参与することができなかったのである。実際問題として、彼らには参政権（具体的には地区議会での投票権）が与

えられていなかったからである。アメリカ新大陸全部を、信教の自由、平等な投票権、権利なくしては宗主国であるイングランド王国への納税義務なし、と理解するときは、はなはだしい誤解である。たとえば、コネティカット州で、少なくとも男性住民すべてに参政権が与えられるのは、19世紀も半ばに近づいたころのことであり、女性への参政権は20世紀に入ってからである。

実際問題として、移住民たと先住民たとを問わず、このような自覚的回心体験を引き起こそうとする「内国伝道」(Home Missions)こそは、17世紀前半の第一次信仰復興運動、あるいは「大覚醒運動」の大波にほかならない。他方、祖国では王政を支持した移民たちが建てたヴァージニアやメアリランドなどの中部諸州では、教会制度も英国国教会がそのまま受け入れられていた。

I - 2. ペンシルヴェニア州の独自性

ニューイングランドと上記の南部諸州に挟まれていたのがペンシルヴェニア州である。この呼び名の元になったのは、同州を英国国王から買い取ったウィリアム・ペンであるが、自らが、母国イングランドでは迫害のもとにあったクエーカー教徒のペンは、広く信教の自由をもってこの州（ここでは現在でも、stateではなくcommonwealthの呼び方が用いられている）の存立の基本原則としたため、旧大陸では少数派の分派、もっと言えば異端として排除された諸宗派が続々と流入した。メノー派（メノナイト）、シュヴェンクフェルト派、ハテライト（フッター派）、クエーカー派などが僅かな実例である。

英語以外を母語とする（例えば、ドイツ語、オランダ語、さらにはスウェーデン語など）移民たちが続々と続いたのも自然だった。旧大陸では、カトリック教会はもとより、プロテスタントが主流となった、例えばスイス、ドイツ、オランダなどでも、依然としていわゆる宗教改革以前と同様に、政教一致、すなわち「その領域の政治的支配者の信仰が、その領域住民の信仰である」という原則が、さらに数世紀にもわたって持続されたからである。本冊子の刊行元、言うまでもなく宮城学院、東北学院両校を長く人的にも財政的にも支え続けた、いわゆる「ドイツ改革派」教会の始源も、この時代と地域（ペンシルヴェニア州）を主たる背景として持っていることは、改めて言うまでもない。

最近、次期大統領選挙との関連で、アメリカ全図をテレビなどで目にすることが多い。ペンシルヴェニア州は東海岸に接して、あたかも日本の郡、精々が県程度の大きさにしか映らないかもしれないが、実際に居住して見れば、その大きさを実感できるだろう。フィラデルフィア、ピッツバーグなどの大都市もないではないが、大部分は広々とした農地と森林である。ペンシルヴェニアという州名の語源は、「ペンの森」という意味である。



ウィリアム・ホーイ

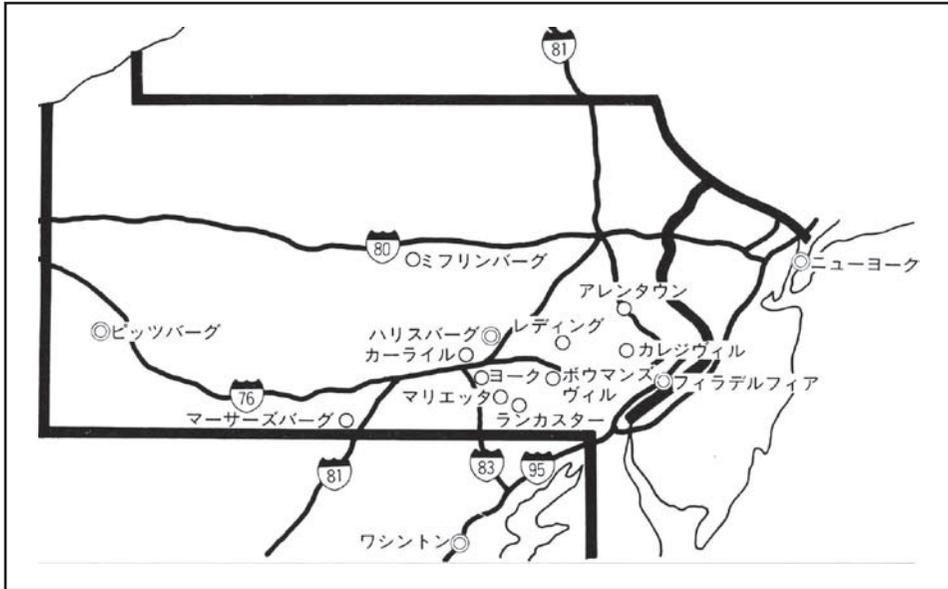


ホーイ生家

具体例として、両校の創立者の一人、ウィリアム・ホーイの生家を挙げよう。筆者は数回そこを訪ねる機会を持ったが、そこを住まいとして、両校の創立者ウィリアム・ホーイ直系の子孫たちが、今でも広いファームで農業を営んでいる。地名さえ定かでないほどのこの^{へんび}辺鄙な^{しょうゆう}小邑で、ほとんど隣家が目に入らないほど大きなファームに驚かされた記憶がある。1858年生まれのホーイが、幼少のころから、「長じては、海外宣教師になる」と思い定めていたと聞けば、答えは「それこそがあの時代だった」と言うほかないだろう。

同じことは、デイヴィッド・シュネーダーについても言えるだろう。生家は今ではメノナイト一家の所有となっているが、周囲は日本なら戦前の農村を彷彿とさせる原風景で、家族が揃って、飼育する家畜の糞尿を裸足で処理していたのを鮮明に記憶している。メノナイト派は写真さえも、「偶像礼拝」に連なりかねないとの理由から撮影を拒絶するので、残念ながら撮影できなかった。

その室内には、もしかすると移住の際に持参したのかもしれない、宗教改革者ルター訳のドイツ語聖書が置かれていた。筆者がたどたどしいドイツ語発音でその一節を朗唱しようとすると、「極東の日本からの来訪者が、どうしてドイツ語聖書を朗読できるのか」と驚いた様子だった。いわゆる「宗教改革」（「主流派」、あるいは「正統派」である国教会）そのものは、来年が500周年記念に当たり、すでに多種多様な企画（合同礼拝、共同研究集会、出版など）が現に進行中である。ここで500周年とは、ルターの「95箇条提題」の公開からであることは、今さら言うまでもないだろう。ペンシルヴェニア州の「広さ」に話題を戻すならば、宗教改革の時代から僅か1, 2世紀後のキリスト教事情、さらに生活スタイルはいまだ根本的には変わっていないのである。



ペンシルヴェニア州地図(『東北学院百年史』通史編より転借)

I - 3. ドイツ系移民の流入と教会形成

ここまで記せば、この広いペンシルヴェニア州にヨーロッパを後にして入居した移民たちを、教会的に組織化することがいかに困難だったかは言うまでもないだろう。小さな村落でさえも、隣家は何マイル、何十マイルも離れているかもしれないのである。ドイツ改革派教会が形成されるに至る事情を寸述するならば、以下のようなものである。

この至難事と最初に取り組んだのは、1746年、ボストンに到着したミヒャエル・シュラッター師で、改革派が国教会であるオランダ改革派教会の正式な援助を受けながらであったが、翌年フィラデルフィアで、4名の牧師と十数個の教会を代表する長老とをもって、正式に「中会」を組織した。いかにも、段階的な意思決定機構(各個教会→中会→全国総会)を特色とするこの教派の特色を暗示している。そこから、日本における伝道圏を自派の一部とみなす方向付けは、ドイツ改革派教会の日本伝道最初期においても検討されたが、主として日本側の事情から、実現することはなかった。日本においても、教会統治機構について自治・自給・自律の原理が、この教派の遺産の一部だったからである。

ペンシルヴェニアのドイツ人移民を構成員とする上記の最初の中会は、次の約50年間に、ほぼ180の各個教会におよそ1万5千名の信徒を擁するに至り、1793年には形式上はオランダ国教会の下部組織の立場を離れて、自立した教派としての「合衆国改革派教会」(しばしば、オランダ系の改革派教会〔正式には、アメリカ改革派教会〕と区別するため、「ドイツ改革派教会」という呼び方も用いられる)の成立を見るに至る。もっとも、ヨーロッパ大陸からのドイツ系移民の流入は、次の19世紀にも絶えることがなかった。時にはナポレオン戦争の全欧的争乱を避けるためもあったろうし、新大陸の経済的優位の

誘因もあったことだろう。いずれにしても、彼らを教会組織へと組み入れ、16世紀のチューリヒやジュネーヴにまでも溯りうる改革派の信仰（敬虔）と神学を保持しつつも、広漠たる新大陸でその教会組織を確立・保持する努力は並大抵でなかったはずである。

II - 1. キリスト教信仰の本質をめぐって——献身か涵養か

前述のように、折からアメリカ東部諸州各地では、信仰復興運動（リヴァイヴアル）の嵐が数次にわたって吹き荒れていた。リヴァイヴアルが提起した問いは、会衆派、長老改革派、メソヂスト派、バプテスト派など教派のいずれかを問わず、キリスト教そのものの本質、その真髄に関わるものだった。いろいろな呼称や解釈はあるにせよ、端的にそれはキリスト教の本質を、信仰者各個人の献身の念（Christian Commitment）に置くのか、それとも時間をかけた信仰と生活の涵養（Christian Nurture）に置くのか、という問いである。

前者であるならば、時間と場所までも鮮明な「回心体験」の想憶、それに基づく自発的堅信礼受領、さらに持続される信仰生活こそが、聖書に忠実なキリスト教的生き方であることとなる。そうだとすれば、自覚的信仰告白を前提としない新生児洗礼は、「洗礼」の名にはまったく値せず、再洗礼派の最初期の指導者の一人の表現を借りれば、単なる「産湯」にほかならないこととなる。人類の始祖から受け継がれた「原罪」を自覚的に認知・告白し、「通過儀礼」を受領して、初めて人はキリスト者となる。生まれつきのキリスト者などは存しえないのである。宗教改革者ルターの言葉を思い出すならば、「キリスト者になるとは、罪人になることである」（『ロマ書注解』）。

こうして、出生時に受領した「洗礼」の救済的意義は完全に否定され、自覚的願望に基づく信仰告白のみが有効となる。それこそは、聖書が繰り返し教える「悔い改め」、「生まれ変わり」の体験にほかならないからである。そうなれば「伝道」とは、このような体験を引き起こさせるための努力そのものと等置される。復活の主イエスが弟子たちに下された宣教命令、例えば、マルコによる福音書の結尾に残された「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」（16章15節）は、実はそれにほかならないのである。

本冊子の冒頭には次のような一節が明記されている。

……改革派教会は常に伝道の精神を鼓舞され、そして主の権威ある命令に忠実に応えて、世界伝道のために絶えず主の聖餐台に献金を捧げてきた。すべての宣教努力は、まず本国の人々の心の中から始まらなければならない。もしも本国で始まらないとすれば、世界を回心させるようなことはできないだろう。もしもわれわれの教会が、遠い地の異教徒たちに福音を宣べ伝えようとするならば、まずは本国において、信者たちの欠けを補わなければならないはずである。

この短い数行には、上記の「信仰者各個人の献身の念」と「信仰と生活の涵養」をいかにかして統合・調和し、極端な「あれか・これか」でも、反対に「あれも・これも」にも陥ることのない改革派神学の真髓の一端が垣間見えていると言ってもよいだろう。「献身」と「涵養」の二語は、言い換えるならば、「伝道」と「教育」、さらに宣教地においては、各地に散在する各個教会と、各種のキリスト教教育機関との不可分離的な協調関係の重視にまで連なると言えるだろう。

実際問題として、この困難極まりない関係は、ドイツ改革派の日本（主として東北）伝道においても、各個教会と、最終的には東北学院と宮城学院に集約された教育機関との間の、「あれか・これか」という、人材と資金の配分をめぐる問い掛けにまで拡張される。1930年代以降に鮮明となるこの深刻な問いは、東北伝道史に残された課題の一部であり、東北学院神学部の廃止、東北中会の分裂など、痛みをもって覚え、さらに究明が待たれている。しかし、この小冊子を取り上げる人と時代と思想とは、これよりはさらに半世紀も以前のことである。

II - 2. ドイツ改革派教会の抱えた葛藤

本題に戻るならば、それまですでに旧大陸で千数百年にもわたって保持されてきた新生児洗礼（幼児洗礼）—そこでは、親あるいは代父母の信仰が嬰兒のそれを代行すると教えられる—はどうなるのだろうか。無論その後の、例えば各種の「信仰問答」が象徴するような、時間を掛けた信仰の理解・把握に基づいて施される堅信礼（信仰告白式）を経て、初めて聖餐式にあずかる「陪餐資格」が与えられる。ヨーロッパ生まれの諸教派にせよ、新大陸で生まれた諸教派にせよ、その起源は別として、ほとんどの教派はこの問いをめぐる内部対立、引いては分裂に苦しむこととなる。

ここで詳述の余地はまったくないが、ドイツ改革派教会の最初期の日本伝道（東京とその近辺、最終的には東北地方）における最初の宣教師たち、アンブローズ・グリング(Ambrose D. Gring) とジャイラス・モール (Jairus P. Moore) との間の、一見抜き差しならない対立・葛藤は、最終的にはグリングのドイツ改革派教会離脱にまで及ぶが、『略史』が関わる事柄ではない。

もっとも母教派を離籍したグリングは、間もなく日本伝道に帰任し、英国国教会系の聖公会宣教師として顕著な功績を残す。グリングは京都に聖公会を母胎とする平安女学院を創設し、その初代院長に任じられたが、やがて京北各地の教会で直接伝道に転じ、大きな功績を残した。筆者自身、グリングの離任の事情、聖公会における働きに大きな関心を持ち続けてきたが、残念ながら資料不足（聖公会側に残された資料は未調査）から、文字どおり「涵養」と「献身」の相剋を味わいながらも、両者の矛盾・相剋を乗り越えようとしたこの最初のドイツ改革派教会派遣宣教師について、深入りすることができていない。

筆者は以前（2013年3月）、日本英学史学会から東日本支部会総会において公開講演を

依頼され、さらに学会誌にも掲載を許された（2014年）。その主旨は、グリーンとモールの別離、最終的にはグリーンとモールの教派離脱にまで至るドイツ改革派教会内部の事情、直截に言えば、教派内諸教会を揺り動かし、同教派内部でせつかく展望が開けてきた海外伝道をほとんど停滞させるに至ったほどの「神学論争」の内容を簡略に紹介するものだった。『略史』でも、長く続いた教派内での海外宣教への無関心、引いては遅滞の理由として、「不幸な神学論争」と呼ぶのがそれである。

II - 3. 日本伝道の端緒

上述のように、この『略史』は1838年の外国伝道局の組織化から50年を記念し、1888年現在、日本だけでもすでに男性宣教師4名とその妻たち3名、女性宣教師3名、併せて10名を擁するようになり、宣教拠点も東京からさらに、埼玉を経て仙台その他の東北各地に確保するようになった慶祝の意味を籠めたものであった。年表（『東北学院百年史』〔通史篇〕）によれば、1888年1月1日にシュネーダー夫妻が仙台に到着、同月5日には在日宣教師団（緩やかな意味で、「ミッション」はこの組織を指すことが多い）を組織化し、5月にはホーイ夫妻の寄附によって、寄宿舎兼教場のための土地と建物を入手、翌年2月に完工した。他方、宮城学院はその前年に旧東三番丁に校地を入手し、仙台神学校も一時はその一部に入居していたのだった。さらに同年12月に開かれた第三回宮城中会において「日本基督一致教会仙台神学校憲法」が採択され、東北学院は初めて、日本の教会機構全体の中に公的地位を獲得するに至った。極言するならば、改革派教会の日本宣教は、まさしく前途洋々と思われた。

それだけに、それ以前の伝道局の設置から長く続いた「停滞」の理由、その背景に触れないわけにはいかないだろう。なお、『略史』には、この時点で在任した10名の宣教師とその妻たちの氏名、任職の日付、日本へ向けての出発、同じく日本到着の日付も記載されているので、ここでは列挙を避けることとする。一言だけ付記するならば、配偶者（妻）はその働きのいかんを問わず、正規の宣教師に数えられていないのは、いかにもこの時代らしく思われる。「妻」たちが正規の宣教師に数えられ、然るべき給与が与えられるようになるのは、第二次世界大戦以後のことである。

ついでながら、太平洋を横断する帆走蒸気外輪船による旅には、ほぼ一ヶ月を必要とした。筆者自身の氷川丸最後の航海に乗船した体験では、1960年8月27日に横浜出港、途中で日付変更線を越えるので9月1日Aと同Bとが重なるため、9月8日シアトル着まで総計14日間の船旅だった。氷川丸は確かに第二次大戦以前の建造ではあったが、宣教師たちの太平洋横断往復にはその倍の日数を要したことになる。なお、筆者が帰路に利用した新造の貨客船は、10日足らずで太平洋を横断した。いずれにせよ、最初期の宣教師たちが味わった船旅の苦難を思いしのぶべきだろう。

以下は、上述のように日本英学史東日本支部で行った公開講演、学会誌での記述からの

抜粋である。

Ⅲ - 1. 「マーサーズバーグ論争」

1879年5月のグリング夫妻の出発に先立って、3月13日、レディングの第一リフォームド教会で開かれた送別礼拝においてグリングは、一方では故国と近親者たちを後にして「闇黒の中に住む異教徒」の中へと身を投ずる悲しみを口にすると共に、他方では、母教会の祈りと主キリストの導きを確信しつつ、外国伝道の壮図に着こうとする喜びを披瀝した。この劇的な送別礼拝において招きの言葉を述べたのが、グリングおよびモールの共通の恩師ネヴィン (John Williamson Nevin 1803.2.20 ~ 1886.6.6) だった。



J・W・ネヴィン

『略史』は、1865年から1878年までを「外国伝道史における暗黒時代」(“The Dark Period in our Foreign Mission History”)と名付け、それを砂漠になぞらえている。「特別な関心はどこにも見られず、異教徒に福音を宣べ伝えるための献金も僅かでしかなかった」からである。その主因を『略史』は以下に帰している。第一に、ドイツ改革派教会は自分たち自身が支える海外宣教師を持たないこと、第二に、むしろ内国伝道へ目が向いていたこと、第三に、われわれが自分たちの精力を上記のように、「不幸な神学論争 (an unhappy theological controversy)」に費やしてきたことがそれである。

この『略史』発刊の趣意から言えば無理もないことながら、筆者が目を向けたのは、この「不幸な神学論争」の内実そのものである。なぜならば、この論争こそは、それまでのアメリカ・キリスト教史の一種の総決算だったからである。あるいは、それを上述の「キリスト教的献身」と「キリスト教的涵養」の間の相剋、それが産み出した結末そのものだったとも考えられよう。

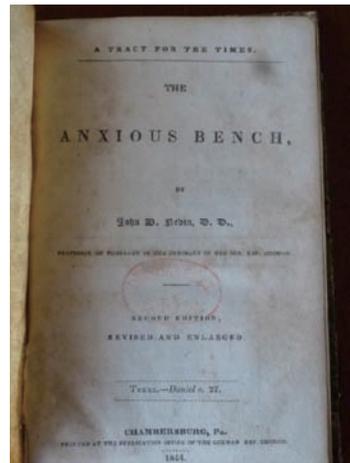
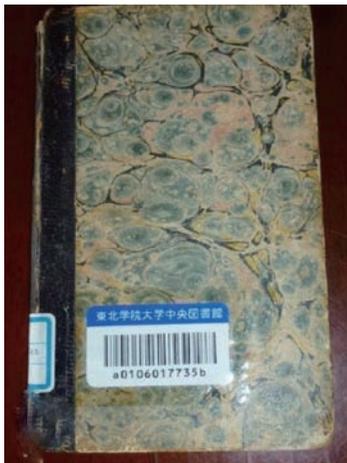
筆者の考えでは、小冊子が敢えて「不幸」な神学論争と呼ぶとしても、実はアメリカの神学史において、もっとも重要な問題提起の一つであり、21世紀の今に至るまで姿を変え、地域を異にしながらも続いていると言ってもよい、重大かつ深刻な問題提起だった。その主唱者が、教派として数的には少数であり、地域的にも限られていた教派の一神学教授だったとしても、忘れられてはならない神学論争であった。史家はこの論争を「マーサーズバーグ論争」と名付ける。ペンシルヴェニア州最南端に位置するマーサーズバーグには、1837年以降、ドイツ改革派教会の牧師養成機関が置かれていたからである。現在では神学校はランカスターに移転し(1871年)、少なからぬ数の東北学院出身の日本人牧師たちが、戦前・戦後とここで学んでいる。時期を違えながらではあるが、神学校まで進むための「学部」に相当する教育機関がマーシャル・カレッジであったが、同様にランカスターに移転し、やがて合併してフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジとなり、現に東

北学院と姉妹校の関係が続いている。

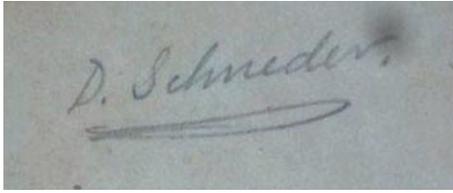
Ⅲ - 2. ジョン・ネヴィンとその神学的立場

ここで、ネヴィンに戻ることにしよう。元来、ネヴィンはドイツ改革派ではなく長老派教会に属していた。神学を修めたのも同教派立のプリンストン神学校(1828年卒)であり、長老派教会の教職として按手を受け、1830年以後は、長老派教会が創設したウェスタン神学校(現ピッツバーグ神学校)教授として招かれて、10年間に在任した。1840年、ドイツ改革派教会に教籍を移したネヴィンは、1841年にはマーシャル・カレッジ学長に挙げられて1853年まで在任、二つの大学のランカスターの地での合併以後は、新しいフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジの学長として1866年から1876年まで在任した。したがって、モール(1873年卒)やグリング(1875年卒)が同大学で学んだのは、ネヴィンの学長在任期間中だったことになる。

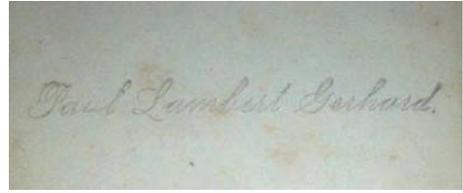
ネヴィンの名を一挙に高からしめたのは、まだ比較的若かった1843年に刊行されたその著(6章56頁) *The Anxious Bench: A Tract for the Time* (仮題『不安な長椅子。時局に向けた小冊子』Chambersburg, PA.: Office of the Reformed Church, 1843)であった。それは題目どおりに、彼の時代に支配的だったリヴァイヴァリズムの伝道法に対する手厳しい批判で、出版されるやいなや、ドイツ改革派教会内部のみならず、広く諸教派の間に激しい論議を巻き起こした。ついでながら、東北学院に着任したシュネーダーやポール・ゲルハードなどの蔵書には、それぞれ署名したこの書が含まれている。いわば、改革派宣教師たちの必携書だったとでも言えるだろうか。



東北学院中央図書館所蔵
The Anxious Bench



東北学院蔵書にみられるサイン シュネーダー



ポール・ゲルハード

そもそも書名の「不安な長椅子」とは何を意味するのだろうか。ベンチそのものが不安を感じたり、霊的憂慮に打ちひしがれたりするはずはないから、それが示唆するのは、この長椅子に座らせられる人々が懐く自分たちの信仰生活への苦悩、己れの魂の行き先への抑えようのない不安感そのものにほかならないだろう。特に手厳しい批判の対象となったのは、当時の代表的な大衆伝道者、長老派のチャールズ・フィニー (Charles G. Finney 1792 ~ 1875) がその典型的担い手であるような、第二次信仰復興運動の教会形成策だった。ネヴィンは長い時間を掛けた信仰問答教育を重視し、もっと広くは、洗礼と聖餐を中心とする礼拝と教会訓練、教会戒規の厳守を主張しようと問題を提起したのである。

もとより、フィニーの伝道法が、第一次覚醒運動におけるごとく、「地獄の冷たく燃える青い火」説教 (“hellfire and brimstone sermon” —例えば、ジョナサン・エドワーズの有名な説教、“Sinners in the Hand of Angry God” 「怒れる神の手中にある罪人たち」、1741年) に見られるような、ある意味で「脅迫的な」回心強要と同じだったと言うのではない。むしろフィニーの手法は、キリスト教信仰による社会全体の改善、例えば女子の地位向上 (礼拝における公的祈りの担当、やがては教職任命へさえも連なる)、さらには南北戦争によってさえも進まなかった人種の正義の実現など、幅広い視野に立つ運動だった。ことにフィニーが重視したのが説教の革新、具体的には説教の産み出すキリスト教的生活の日常的実践だった。それはそれで、時代の必要にも応ずる革新運動だったとさえ言えるかもしれない。

Ⅲ-3. ネヴィンの主著『不安な長椅子』

この当時、多くの教会堂には説教壇のすぐ背後、あるいは聴衆席の最前列に、“Anxious Bench” (「回心志願者席」とでも訳せばよいのだろうか) が置かれていた。「聖霊の働くまま」の説教に心を打たれ、魂を揺すぶられた聴衆は、一人また一人、おずおずと自席を立ってこのベンチに移動する。説教が終わるやいなや聴衆席からは特別な祈り、熱烈な賛美の歌声が湧き起こり、会堂は文字どおり霊の感動に満たされるのが常だった。それはそもそも、リヴァイヴァルをエネルギー源として誕生し、成長・発展したメソジストやバプテストなどの諸派のみならず、新大陸に独自に形成された各種の教派「キャンベル派、ワインブレンナー派、ユニヴァーサリスト、ミラー派からモルモン」(ネヴィン、17頁) に一般的だったのである。



そこから当然かもしれないが、このやり口が絶好の対象とするのは、判断力よりも感情を優先させ、思索よりも衝動を上にする人々である。開明的で十分な訓育を受けた会衆においては、「不安な長椅子」は決して一般的ではない。……長椅子を満席にするのは少年・少女に等しい人たちであり、会衆全体が真

の宗教心の本質に関して無知な場合である（同、16頁）。

このような手法に訴える牧師たちを、ネヴィンは「山師」(quackery) とまで呼び捨てる。

Quack (藪医者) は医師を装いながら、人体の構造を何一つ知らず、しかも何かしらの液汁、あるいは丸薬の形の万能薬をひけらかすが、それと同様に偽弁護士、偽政治家、銜学者、偽教師、偽紳士その他、あらゆる種類が溢れているからには、「藪牧師」がいるとしても、少しも驚くには当たるまい (19頁)。

彼らは伝統的な信仰問答教育によるキリスト者形成を信頼せず、彼らが「新方策」(New Measures) と称する「長椅子」とそれに付き物の狂騒状態を頼りとする (同、21頁)。

しかし、そこから生まれるものは一時的な感情の昂揚による無秩序、絶叫、手打ち等々 (同、47頁) に過ぎず、金切り声、大声、飛び跳ね、のたうち回り、一言にして、手の施しようもない熱狂主義の野火にほかならず、そこからは「聖なる哄笑」、「聖なる歯ぎしり」しか生じない (同、50頁)。これらは端的に、アウクスブルク和協信条やハイデルベルク信仰問答が代表するような、宗教改革の産み出したキリスト教的生き方と正面から対立し、改革者たちの努力を無に帰するだけである。

このような狂騒と対決する唯一の道は、牧会的配慮に満ちた薫陶・教化の努力、頻繁で忠実な家庭訪問による信仰生活の保持と活性化、信仰問答教育の忠実な実施、教会秩序と戒規の遵守、要するに牧会的わざの委細に及ぶ忍耐に満ちた堅忍の道である。「対比的に言うならば、それを信仰問答の道と名付けることができるだろう」(同、55頁)。

不安な長椅子の霊は、信仰問答の霊と交戦状態にある (“The spirit of the Anxious Bench is at war with the spirit of the Catechism.”)。……長椅子と信仰問答は常に戦いを交えている。……もしも長椅子が信仰問答を凌駕するようになることがあれば、それは惨めな選択となるだろう (同、56頁)。

ネヴィンのこの小冊子とそれに続く何冊かの著作が、19世紀前半の新開拓地をおおっ

ていた第二次信仰復興運動の激浪の中で、多くの聴く耳を持ったかどうかは疑わしい。事実はドイツ改革派教会の内側でさえも、ネヴィンの所説をめぐって数十年にわたる対立・抗争が続いたのである。いわんや、ほとんどその終結期の1870年代に、新しい方向転換を求めた教会が、視線を向け替えるためもあって展開し始めた海外宣教運動と、それを担った最初期の宣教師たち、具体的にグリーンとモールの二人を、ネヴィンの問題提起への賛否それぞれの担い手と即断する危険は言うまでもない。はるか後になるが、モールは自伝的記述において、以下のように記しているからである。

モールは信仰問答による間接的・教育的方策を、いわゆる直接的伝道方策と対比しつつ、東北地方におけるドイツ改革派教会の宣教地では、他の諸教派と比べて「脱落者」が比較的少数に留まるのは、伝統的な信仰問答訓練の成果であることを認めて、大いにこれを称揚する。もっとも、日本の牧師たちがそれに興味を示さず、有効に実施しないことから、アメリカからの宣教師たちも、好むと好まざるとにかかわらず、彼らと歩調を合わせてしまってきた（『在日四十年の思い出』、54頁）。

IV - 1. 日本伝道最初期まで

この『略史』刊行の年、1888年は、グリーン夫妻の到着（1879年6月）から10年足らず、モール夫妻にとって日本着任（1883年9月）の5年後に当たる。さらに付言するならば冒頭で述べたとおり、東北学院の前身（仙台神学校）と宮城学院の創設の僅か2年後ということになる。

しかもすでに、アメリカ本国における上記の葛藤、すなわち涵養と献身、時間の経過の中での教育的価値重視と、その時・その場における個人的決断の重視、各個教会による直接伝道か、キリスト教学校等を介する間接的伝道かの問い掛けは、伝道拠点が東京地域から仙台を中心とする東北一円にまで伸展する以前から、様々の局面で見え隠れし始めていた。この『解題』では、せつかくの外国伝道局50年の「慶祝ムード」に水を掛ける懸念から、その詳細に記述を広げることなく、僅か数年間の最初の宣教師グリーンと、2番目のモールとの間に隠微な葛藤と相剋、相互「批判」ないし「非難」の投げ合いに短く触れることとしよう。

マーサーズバーグからランカスターに移転して来て、やがてフランクリン・アンド・マール・カレッジを名乗る高等教育機関で指導的地位にあったのは、前述のジョン・ネヴィンであり、さらに彼は間もなく、これまたランカスターで再出発を遂げた神学教育機関（ランカスター神学校）の学長として、ドイツ改革派内部で大きな神学的指導力を発揮する。ちょうどこの頃、もう一人の教会指導者、ジョン・ボンバーガーを学長とするアーサイナス・カレッジが設立された（1870年）。校名の「アーサイナス」は、16世紀中葉（1563年）に公刊され、広く各地の改革派教会で信仰教育の拠り所となった、かの有名な「ハイデルベルク信仰問答」の執筆者ウルシーヌス（Z. Ursinus）の英語発音にほかならない。

アーサイナス・カレッジに結集した改革派の伝統を重んじようとする人々は、自分らをオールド・リフォームドと呼び、聖職者養成部門も併設した。この部門は後になって、大学が今も存続しているカレッジヴィルからフィラデルフィアに移り、さらに20世紀初頭には、オハイオ州ティッフィンにあった同じ改革派教会立のハイデルバーグ・カレッジの神学校と合同して、セントラル神学校となった。

繰り返すようだが、改革派の最初の日本派遣宣教師グリングは1875年に、他方、二人目のモールは1873年にフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジを卒業しているの、そこでは旧知の仲だった。ただし、モールは上記のハイデルバーグ神学校を卒業して数年間、普通の学校で教鞭を執った後に牧会職に任ぜられ、さらに数年間の牧師生活を送ってから外国伝道に献身するに至っているの、グリングよりはいくつか年長だったことになる。グリングは大学を卒業した後、理由は定かではないが、神学教育を元来は会衆派組合教会立のイエール神学校で受けている。

ほとんど同じ時期、同じネヴィン学長のもとで大学を終えた二人が、別個の神学校で教育を受けたために、日本着任後に次第に宣教路線に齟齬をきたすようになったのかどうか、ここで確言のしようがない。いずれにしても、グリングの送別礼拝には、たまたまランカスターの南郊ミラズヴィル教会に在任していたモールも参列し、大学在学時の旧師ネヴィンの送別の祈りに共に加わっている。ついでに付言すれば、現在ではフランクリン・アンド・マーシャル・カレッジも、アーサイナス・カレッジも東北学院の姉妹校であり、他方、宮城学院がハイデルバーグ・カレッジと提携しているのは、決して偶然ではないと言わなければなるまい。その意味でも、本冊子『略史』を訳出する意義は小さくないだろう。

IV - 2. グリングとモール

グリングはしばらく横浜に滞在した後、東京に移って本格的な「伝道」を開始した。彼の脳裏にある「伝道」とは、かつてのランカスター時代の恩師ネヴィンが描いた教会のあるべき姿そのままだった。その周辺に集まり始めた日本人たちに対して、現地人の援助を受けながらではあったが、自力で訳出したハイデルベルク信仰問答（『^ひ鄙語海徳山問答 全、明治17年；翌年には、『基督教海徳山問答』、ウルシヌス著；木曾五郎訳、エ・デ・グリング閱、1885年』）によりながら、キリスト教の基本的教理を学ばせ、すでに組織されていた長老会の査



同志社大学図書館所蔵

問を経た後、初めて洗礼を受けて陪餐教会員とし、厳しく戒規を執行するという、文字どおりネヴィンが目指した教会の在るべき姿の再現の努力そのものだった。

やがて伝道の手を埼玉（越ヶ谷など）にまで延ばすと、中会を組織し、結局は実現しなかったが、当座は母国のドイツ改革派教会の組織内に位置付けようとさえた。4年ほど遅れたにしても、モールが着任すると、モールもまた埼玉一円の伝道に加わったので、例えば日本基督教団大宮教会などは今に至るも、モールを教会の礎として覚えている。また、東北学院神学部卒の卒業生の多くが、埼玉一円の教会で伝道生活を始めることが稀でなかった。

グリング夫妻は後に神田教会と呼ばれるようになる教会（現、代々木中部教会）の日曜学校を基盤として、聖日だけでなく平日にも、ことに女子に教育を授けるための学校設立を夢見て鋭意努力を重ね、やがて仙台に女子学校（宮城女学校）の創設を見るに至る。こうして、キリスト教的涵養、すなわち礼拝における説教と聖餐式の厳守によって信徒らが日々養われ、信仰的成熟に至るべきとするネヴィン型の教会が、徐々に日本にも形成されつつあると思われた。

そこに、さまざまな母教会内部の事情によって遅延はしたものの、2番目の宣教師モール夫妻が着任する。上記のように、モールはかつて大学で旧知だったグリングの日本出立の送別礼拝にも列していた。そこでグリングが口にした「あなたがたとは、日本で再会しましょう」という呼びかけに、その時点では現実性を感じなかったが、外国伝道局の2番目の宣教師募集に応募して日本に向かったことで、結果的にはグリングの呼びかけに応じたこととなる。

モールもまた大学では恩師ネヴィンの薫陶を受けていたし、その出身神学校もオールド・リフォーム系ハイデルバーク神学校だったのだから、ネヴィンが手厳しく痛論してやまなかった、当時の信仰復興運動のような伝道方策をよしとしたわけでは決してない。上でも引用したように、はるか後のことではあるが、40年に及ぶ自身の日本伝道を回顧しつつ、信仰問答教育による涵養型の宣教策の欠如を慨嘆している。

しかしながら、明治中期の日本の国情や個人的な事情の差異から、必ずしも説教壇と聖餐台を中心とする教会形成を、字句どおりに実現することを可能としない場合にはどうなるだろうか。先着のグリングと後発のモールとの間に、微かな不協和音ときしみが生じ始めるきっかけとなった一つの事例を、少し物語風に挙示することにしよう。

ある日、モール夫人は受診のためにある歯科医院を訪ねたが、歯科医はキリスト教に強い関心を示す。モール夫妻はすでに開設していた自分たちの伝道所で、聖日礼拝に連なるように勧めるが、当時、開業医には日曜日も休みでなかったため、この示唆は実現不可能に近かった。そこでモール夫妻は、夜分にわざわざ足を運んで「ハイデルベルク信仰問答」に依拠しつつ、キリスト教への手引きを重ね、ついにはモールの自宅での受洗にまで導くことができた。求道者が一人でもいるならば、伝道のわざは場所や時刻に限られるはずが

ない、とモールは確信していたからである。使徒言行録8章にも、使徒フィリポは、たまたま馬車で乗り合わせたエチオピアの高官に聖書を説き聞かせ、その宣教によって回心した高官に道ばたの泉の水を用いて洗礼を施した、とあるではないか。

このような事例は当時の信仰復興運動の中で、騎乗の伝道者が開拓地を一もしかすると年に1度かぎりかもしれないが一巡回しては大伝道集会（camp meeting）を開き、その熱烈な回心説教によって悔い改めた者には、年余の時間を掛けた信仰問答教育や教会組織による信仰の査問などいっさいを抜きにして、文字どおり、その場・その時に新生の洗礼を施すのが常だった。前述、ネヴィンが厳しく論難したのもこのような伝道策だった。無論のこと、モールも大

学在学中にはネヴィンの薫陶を受けていた。しかし、神学教育を受けたハイデルバーグ神学校の所在地オハイオ州は、当時は澎湃たる西漸運動の最先端であり、おのずとモールも、上で例示したような伝道方策に無縁ではなかったのかもしれない。



新大陸開拓地でのキャンプミーティング

しかしながら、このような伝道法は先任のグリングにとっては、あってはならないものと思われた。時間をかけて信仰の熟成を待ち、教会がすでに定めている場所と時期に手続を踏んでこそ、洗礼は教会法的に有効となるはずではないのか。

グリングは外国伝道局の責任者に書簡を送っては、モールの罷免、アメリカ召喚を要求し、二人の最初期宣教師の間の乖離・疎隔は強まる一方だった。無論、モールが沈黙を守ったはずもないので、百数十年後の今日のわれわれにとっても、ほとんど個人の健康や精神状態への誹謗・中傷まで含まれるこれらの古文書を手にするのは、きわめて辛いところである。結局、グリングは在日8年、その間、東京や埼玉にいくつもの教会を設立し、仙台では東北学院や宮城学院の創立にも貢献した後、1889年に賜暇休暇が終わると、合衆国改革派教会の教籍を離れて聖公会に転じた。使徒言行録15章にも、使徒パウロがバルナバと宣教路線をめぐる対立の末に、「ついに別行動をとるようになった」（39節）と残されているとおりである。しかし1892年には、聖公会の宣教司祭として再度来日し、京都に平安女学院を創設、その初代院長をつとめた後、各地で教会創立に大きな貢献を果たした次第は前述のとおりである。

そうして見ると、皮肉なことかもしれないが結局、本冊子が挙示する計 10 名の宣教師の中で、最後まで日本に踏み留まり続けたのは、シュネーダー夫妻を別とすれば、ジャイラス・モールだけだった。プールボー姉妹は 1893 年までには日本を離れ、他方、ホーイ夫妻はさまざまな事情から、中国伝道（湖南省岳州）へと転じ、残りの生涯をそれに献げたからである。二人の長女ガートルードは、第二次世界大戦終了まで任地に留まろうと努力するが、新中国の建国によって仙台に転じ、短期間ではあったが宮城学院で教鞭を執った。

IV - 3. 「それから」

ここで訳出した小冊子は、日本伝道の開始から始まって、その僅かな成果から今後のさらなる発展・充実を確信できた幸せな時期での慶祝の文章である。歴史がいつでも人間の計画や願望そのままに展開するわけでないことは、誰でもが自分自身の経験から知っているとおりである。ドイツ改革派の日本宣教は、これまで略述したように容易なものではなかったが、やがて仙台を中核として東北一円へと伸展していく。実は、そこでも前述の涵養と献身のどうにもなりそうのない拮抗・対峙が、時が変わるにつれて姿を変えつつも引き継がれていく。特に、明治から大正、さらに昭和にかけての日本では、深まり・強まるばかりの民族主義（ナショナリズム）が、極言すれば天皇制との関わり合いで、日本の若く幼いキリスト教にとって重荷となっていくが、それはここで触れることさえ不可能なほど広範で重い課題である。

最終的には、合衆国改革派教会は東北の地に二つのキリスト教学校と、数十の伝道拠点を築き上げたが、限られた財務状況のもとでの不断の問いは、学校か教会かに絞られていた。それを支える教会員の数が限られていたからである。後に東北学院、あるいは東北地方の宣教全体に責任を負ったシュネーダーは、「もしも、改革派教会の構成員ひとりびとりが、せめて年に 1 ドルの献金を海外伝道のために献げてくれさえすれば、外国伝道局の借財を解消し、さらなる展開を望めるのだが……」と書き送る。因みに、この時点での同教会の会員数は約 20 万名で、これは現在の日本基督教団の会員数にほぼ相当する。それにもかかわらず、外国伝道局は 1941 年の日米開戦のその年まで、例えば東北学院の教職員の人件費に相当する金額の送金を続けていたのである。しかも、この中には、礼拝堂や事務棟、教室等新築の臨時の必要経費は含まれていない。

疑いもなく、そのような時代は過去でしかない。現時点では、宮城学院にも東北学院にも、古くからの伝統的な意味での宣教師は 1 名も在任していない。両校とも、適任者さえ見つければ、財政的負担にはやぶさかでないと言明し続けてさえも、現状はそうなのである。「宣教師の時代」は、本当に過去のものとなったのだろうか。そうだとすれば、この百数十年は何だったのだろうか。それとも、「全世界に行って福音を宣べ伝えよ」というあの宣教命令（マルコ 16 章 15 節）は、結局虚しかったことになるのだろうか。第二次世

界大戦後、数百数千名の新しい宣教師たちが全世界へと派遣されたが、それも今では「古き良き時代の昔物語」の感がなくはない。

本小冊子のページを繰りながら、伝道とは、宣教とは、そしてキリスト教教育とは、いったい何なのだろうかという問いを突き着けられる感懐を抱くのは、筆者だけだろうか。

なお、キリスト教学校にとって「宣教師」の必要性、ほとんど必然性について、嶋田順好学院長の論考「宣教師を招き入れることの意味」（『信・望・愛』、2014年号）、また、「宮城学院の宣教師群像」（同上、2012年号）などを参照していただきたい。

2016年3月



資料紹介

『おむらさん』 アンナ・M・シュネーダー 著

監訳 宮城学院元中高校長・理事 田中 弘志

ここに紹介する書物「おむらさん」の主人公は、宮城女学校（現 宮城学院）最初の生徒であり、最初の卒業生の一人。卒業後宮城女学校の音楽と聖書の教師をしながら、仙台教会^(注1)の吉村末吉牧師と結婚した女性、宮本（吉村）むらです。

宮城学院資料室では、1905年、ちょうど今から110年前に刊行されたオリジナル冊子の他に、おむらさんの孫にあたる吉村輝夫氏（次男清氏の長男）より1977年に寄贈された復刻版を所蔵しています。本書は、今までにも英文での紹介^(注2)や、学校礼拝の中などで紹介されたことがありましたが、プールボー校長在任7年のすべてを宮城女学校で過ごし、宣教師たちの目指したキリスト教女子教育のいわば成果の象徴とも言えるおむらさんの信仰と生涯を、一人でも多くの方々に覚えていただきたく、日本語訳で紹介することといたしました。

この作品の著者アンナ・M・シュネーダー^(注3)は、東北学院第2代院長デイヴィッド・B・シュネーダーの妻で、合衆国改革派教会派遣宣教師の夫とともに1887年に来日し、1941年にこの世を去るまで、仙台の地で神の御業にその身を捧げた女性です。

この世での歩みは短くても、多くの人々の心を動かしたクリスチャンとしてのおむらさんの生涯を、祈りをもってここにご紹介できますことをうれしく思います。なお、翻訳は資料室（西川淑）の下訳に田中が手を入れて仕上げたものです。

注(1) 現在の仙台東一番丁教会

注(2) Edited by Rui Kohiyama (2010). Japan as Seen by Western Women in Christian Mission, Series II “Japan as Seen by American Women in Christian Mission 1869-1910” Volume4 Edition Synapse

注(3) Anna M. Schneder (1868-1941)

【 宮本（吉村）むら 略歴 】

1872年4月4日		宮本六兵衛、ひさの長女として誕生
1874年	(2歳)	片方の視力を失う
1880年	(8歳)	小学校に入学
1885年	(13歳)	両親と一緒に押川方義 ^(注1) より受洗
1886年9月18日	(14歳)	宮城女学校に入学
1893年	(21歳)	宮城女学校卒業（第一回卒業生）
卒業～1895年		メアリー・C・ハロウエル ^(注2) のヘルパー
1895年	(23歳)	東京音楽学校 ^(注3) 入学
1896年		東京音楽学校退学
1896年	(24歳)	東洋英和女学校 ^(注4) 入学。なお音楽教師としても勤務
1897年ころ		仙台に戻る
1897年～	(25歳)	アンナ・M・シュネーダーのヘルパー
1899年9月～1902年9月		宮城女学校教師（聖書、音楽）
1900年9月15日	(28歳)	仙台教会副牧師 吉村末吉 ^(注5) と結婚
1901年春		牧師館完成
1901年6月24日	(29歳)	長男 信一誕生
1901年10月20日		教会堂献堂
1902年9月29日		次男 清誕生
1902年10月10日	(30歳)	逝去

注(1) 仙台教会初代牧師。1872年J・H・バラから受洗。1886年仙台神学校、宮城女学校創設。

注(2) Mary C. Hallowell (1891-1898 宮城女学校 英語、音楽担当教師)

注(3) 現在の東京芸術大学音楽学部

注(4) 現在の東洋英和女学院

注(5) 1900年仙台神学校卒業（第6回生）、仙台東一番丁教会第7代牧師。



O MURA SAN

WITH A GLIMPSE OF
THE COUNTRY IN
WHICH SHE LIVED



By

ANNA MARGARET SCHNEDER

BOARD OF FOREIGN MISSIONS
REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES
1206 ARCH ST., PHILA., PA.
1905

おむらさん

ー彼女が生きた国の簡単な紹介を兼ねてー

著者

アンナ・マーガレット・シュネーダー

合衆国改革派教会外国伝道局

1905年発行

はじめに

これから簡潔に語られる人生は、忘れ去られるには余りにも惜しいものだと筆者には思われました。単に事実を書き並べただけのようなお話ですが、これは二つの願いをもって書かれています。一つは、キリスト教国の人であっても、これを読む人々に大きな勇気を与え得るかも知れないこと。そしてもう一つは日本というすばらしい国を神の国へと導く業に、より深い関心を引き起こすきっかけになって欲しいという願いです。A. M. S

1905年8月 日本、仙台の地にて



MATSUSHIMA BAY.

松島湾

I

郷里と家柄

仙台市、それは北日本の東海岸から数マイルに位置する都市ですが、旅行者はめったに訪れません。訪れる人がいたとしても、彼らは仙台の町そのものよりは、近くの静かで小さな松島湾の方に関心があるのです。松島というのは日本という美しい国の中でも、三大景観地の一つと日本人が呼んでいる所です。ここでは、波が柔らかい黄色い岩を侵食して

何百もの奇妙な形の小さな島々ができあがりました。その島々のほとんどは松で覆われています。「まつしま」という名前は「松の木島」を意味しています。入り江の一端には、仙台の海港である塩釜の町があります。ここはかつて南から来る旅行者の大多数が仙台に入るのに通った海の玄関口です。現在では、鉄道を使って直接仙台に行けるようになりましたが、いまだにその旅行は大変時間のかかるもので、横浜から仙台までの 233 マイル^(注)に 12 時間もかかります。



SHIOGAMA.

塩釜

仙台市自体は美しく、大いに訪れる価値のある所です。ちょうど広瀬川が山々と丘の間から流れ出す所に位置していて、川はそこから大きく肥沃な仙台平野をゆったりと流れ、海まで続くのですが、ほかにあまり騒音がない時には町の通りからでも川の流れる音がはっきりと聞こえることがあります。広瀬川の背後には山側に半円形に町を取り囲む高い断崖や丘があり、そこからは仙台の町と青い太平洋に向かって広がる平野を望むことができます。断崖の一つから見おろすと、町の低い家々と狭い通りはほとんど、うっそうと茂る木々に覆われていますが、仙台はこの木々の緑で有名です。ここに 8 万 5 千人の市民の店や住まいがあります。仙台は東京以北では最大の都市なのです。

注 約 370 km



VIEW OF SENDAI—NIBANCHO CHURCH AND THEOLOGICAL SEMINARY IN THE DISTANCE.

仙台市の眺め 遠くに二番丁教会^(注1)と仙台神学校^(注2)をのぞむ

この仙台市におよそ50年前、宮本という名の家族が住んでいました。宮本家は裕福で、大町と呼ばれる大通り沿いに暮らしていました。彼らには子どもが一人しかおらず、それも女の子でした。そこで姓を守るために、彼らは養子をもらいました。一人娘の夫となるべき人です。そういう場合の習わしとして養子には小さな少年を選び、家族の一員として迎え、将来妻となるであろう娘とは、適齢期になるまで兄妹として一緒に育てられました。今日でもこのような縁組みは行なわれています。適切な時が来て、宮本夫妻の娘は両親が選んだ若者と結婚しました。しかしながらその結婚生活は短いものでした。夫は一人息子を若い未亡人に託してすぐに死んでしまいました。もし若い宮本夫人が何人かいる娘の中の一人であったなら、多くの未亡人がするように髪を根本で切って亡くなった夫のひつぎに入れ、決して再婚はしないことを夫の霊に誓い、夫の思い出として位牌を神棚に上げ、毎日その前にお供えをして手を合わせながら生涯を過ごしたことでしょう。しかし宮本夫人は一人娘でしたので、このようなことはできませんでした。彼女は家長となるべき男性と再婚しなければなりませんでした。

両親は養子になってくれる別の若者を探しました。未亡人となった娘と結婚してもらい、宮本の姓を守るのです。現在では喜んで養子になってくれる若者を見つけるのはむしろかしい時代です。養子になるということは家長にならなければならないということで、そ

注(1) 現 仙台東一番丁教会

注(2) 現 東北学院

れは家族の世話をし、助けを必要とする親類一同の面倒を見るということをも意味しています。養子はすべてを相続しますが、たいていは相続するものは多くはありません。

養子として家に入っても、富ではなく莫大な負債の相続人になることも時にはあるので、しかしながら宮本家の場合には、何ら問題などないように思われました。彼らは裕福な商人と思われていたので、すぐに別のお婿さんを見つけ出すことができました。その人は福島県の大橋という名前の人でした。

一般の結婚においては、花嫁は花婿の家に入らねばならないし、手ぶらで行くことはできませんでした。花嫁は着物がいっぱい入ったタンスを持っていかなければなりません。結婚の翌日、少なくとも5回から6回は着替えることができますようにです。さらに花嫁は寝具と調理道具を持っていくことになっています。要するに家事をするのに必要なもの全てを持っていくのです。もちろん、これは中流階級にのみあてはまることです。貧しい少女の父親はあまり多くを準備することができません。昔は、花嫁が田舎の娘の場合には、美しく飾り立てられ、首の周りに一連の鈴をつけた白い馬に乗って嫁入りしていました。仲人がやはり馬に乗って花嫁に付き添い、別の陽気な一団がリンリンと鳴る馬の鈴の音に調子を合わせながら徒歩でついて行きました。町の花嫁は駕籠かごやパランキーン(注)に乗って新居に運ばれたものでした。同じように陽気な一団が同行していました。今日でも時々昔ながらの花嫁行列を見ることはありますが、馬は白馬とは限らず、昔ほどきらびやかな飾りもありません。わたしはまた華やかな衣装を身につけた仙台の花嫁が、陽気なお供に伴われて人力車に乗って結婚式に向かうのを見たことがあります。今ではもう駕籠は使われていません。

昔は、白い馬が通る時にもしも女の子が口を開けていたら、その人は結婚できなくなるだろうと若い女性たちは信じていましたし、今でもそのような迷信が残っている所があります。それで、未婚の女性は白い馬が来るのが見えたなら、結婚後は黒くする習慣になっている自分の歯がまだ白いことを、馬に見られないように口を隠すのです。未婚女性として残されることは恥だと考えられていたので、どの女性も結婚したいと望んでいました。少女たちは14歳か15歳で結婚していました。現在は法律によってそのような早い結婚を禁じていますが、農村部ではまだそのような結婚が行われることがあります。しかし今日の教養ある女性は20代で結婚します。

初めて結婚する若い女性は美しい黒縮緬ちりめんの着物を着て、裾から二重ねふたがきの白い絹の着物が見えるようにしているのが普通でした。花嫁の顔は雪のように白くお化粧され、唇は濃い赤色の紅がつけられます。頭には綿帽子と呼ばれる絹のかぶり物をかぶります。花嫁は部屋の片側に置かれた正方形の絹の座布団に座り、花嫁の隣には仲人の妻と花嫁の母親が座ります。向かい側には、堅い絹の着物を着た花婿が座り、その横に仲人と花嫁の父親が

注 インドの一人乗りのかつぎ籠

座ります。部屋のもう一方の端には、招待された数人の親戚らが座ります。結婚式で使われる装飾品といえば、梅の花、松それに竹です。鶴と亀が長寿の象徴として飾られることもあります。部屋の中央にはきれいな小さなテーブルがあり、その上に結婚を象徴する白と赤の和紙で飾られた3つの陶器の杯が置かれています。テーブルのそばには、同じように赤と白の和紙で飾られ、ティーポットのように見える陶器の酒器が置いてあります。結婚式は3つの杯からうやうやしくお酒を飲むことで成り立ちます。それは最初に花婿に手渡され、それから花嫁に渡されます。二人がそれぞれ3つの杯からお酒を飲んで、式が成立したとみなされます。花嫁の頭から綿帽子が取られ、花婿は新妻の赤面した顔を見つめます。昔は、綿帽子を取った時に初めて、生涯を共にすることになる自分の相手の顔の花婿が見たということがよくありました。でも、そのような結婚はとても不幸なことになりがちでした。今日の教養ある男性は、婚約する前に女性と知り合いたいと願っています。

結婚式が終わると次は披露宴です。その後でお祝いのお菓子がすべての友人たちに配られます。新妻は既婚女性の髪形に結いあげ、歯を黒くしなければなりません。以前には、すべての女性が結婚後にお齒黒はぐろにしましたが、今では町の大小を問わず、どこに住んでいる人でも、そんなことをする人はほとんどいません。

しかし、大橋氏と若い未亡人の宮本さんの結婚は、このような普通の結婚ではありませんでした。彼は養子ですので、結婚する花嫁の家に行かなければなりませんでしたが、同行する一行もありませんでした。さらに彼女は未亡人でしたので、式と言っても簡素なものでした。彼女は髪形を変える必要も、歯を黒くする必要もありませんでした。それらは前の結婚で全てすんでいたからです。



SHOP OF THE MIYAMOTOS.

宮本家の店

この新婚の二人は、すぐに現実の生活に入りました。しかし、若い大橋氏（今は宮本氏）が思っていたほどには、宮本家は裕福な家ではなかったばかりか、多くの負債と困難のほかには、彼に受け継ぐものが何もないことが分かりました。しかし彼は勇敢で気力に満ちた若者でしたから、雄々しく自分に課せられた重荷を背負うことにしました。しかしさらに険しい事態が彼の前途に待ち受けていました。というのも、1868年に大政奉還があり、多くの人々が天皇に、国家の統治者としての正当な権能を返還するために戦った一方で、その当時実際の統治者であった将軍のために戦って敗れた別の勢力もあり、仙台の人々もその中に含まれていました。当然ながらこの戦争は至る所で混乱を引き起こしました。以前裕福だったところに貧困がはびこり、領主と家臣たちはその権力や特権を放棄し、一般民衆と同じにならなければなりません。これは彼らにとって本当に大変なことで、何もかもやり直さなければなりません。

この当時の宮本一家も、ほかの人々と同様に大きな損害をこうむりました。一家は持っているものほとんど全てを失いました、そのために、戦争の5年後には宮本家は大変貧しくなっていました。しかし幸いなことに、商人にとって働くことは決して不名誉なことではありませんでした。若い宮本氏は、彼を頼っている大家族を養うべく、一生懸命に働きました。彼は絶望して投げ出してしまうような人ではありませんでした。どん底から這い上がるまで、死にもの狂いで働き続けました。

そうこうするうちに二人の男の子が生まれ、このことを両親はとても誇りに思いましたし、祖父母が同じように誇らしく思う気持ちは誰の目にも明らかでした。その当時、もし5月5日に宮本家の前を通ることがあったならば、豪華な色で描かれた2匹の大きな紙製の魚が竹竿の先で空を泳いでいるのをご覧になったことでしょうか。それは誇らしい気持ちの父親が、自分には二人の息子がいることを人々に知らせるために立てたものでした。

紙製の魚は鯉をイメージしています。日本人は鯉がすべての魚の中で一番強い魚であると言います。鯉は滝を泳いで上ることができると考えられていて、両親が息子たちに望んでいる強さの象徴なのです。



THE BOYS' FESTIVAL.

端午の節句

II

誕生と子ども時代

1872年4月4日の美しい日に、宮本家にかわいい女の子が生まれました。その誕生についてはあまり多くは語られず、人々から祝意も届けられませんでした。赤ん坊が女の子に過ぎなかったからです。しかし宮本家にはすでに二人の男の子があったので、両親はこのちっちゃな女の子の誕生をとて喜びました。当時の習慣だったように、そして今でも多くの地域で残っている習慣として、赤ちゃんは生後7日目に名前が付けられました。「むら」と名付けられ、それから大きな白い紙にこのように書かれました「宮本氏にむらという名の娘が生まれました。」そしてその紙は、この家にたまたまやって来た人でも見ることのできる客間に掲げられました。家族はむらと呼びますが、他の人たちはおむらさん（※むらの敬称）と呼ばなければなりません。女の子が生まれると、多くの家では「桐」と呼ばれる木を植えます。この木は娘がお嫁に行く時まで大きく育ち、嫁入りタンスを作る材料となるようにと願ってのことです。

この小さな赤ちゃんのおむらさんがお風呂に入る様子を見たくはありませんか？大きな洗い桶が部屋に運ばれ、そこにはとても熱いお湯が半分ほど入っています。赤ちゃんは裸にされて白い布にくるまれ、びっくりするほど熱いそのお湯の中にそっと浸されます。彼女はありったけの声をあげて泣き叫びます。しばらくすると彼女はお湯から上げられ、濡れた布をはずして、床に広げた乾いた布の上に寝かされます。彼女は念入りに体を拭いてもらってから明るい赤や黄色の綿入れの着物を着せられ、前についている2本のひもを結んで、小さな体に巻き付けた着物が固定されます。それから彼女は快適な、厚さ3インチ^(注)の敷き布団と、同じ厚さの掛け布団からなる寝具に寝かされます。大勢の客が母親を訪問し、お祝いの品を持ってきたりしている間、赤ん坊は床の上のこの布団で眠るのです。祝いの品は赤ちゃんのためなら着物、母親のためなら魚などでした。このような訪問客は赤ちゃんが生まれてまだ1日目からやって来はじめます。

赤ちゃんが生後21日経つと、母親は体力が回復し元気になると考えられています。それでその日には御馳走でお祝いします。親類や数人の友人らが招かれて家族と一緒にこれを祝います。お祝いには赤飯が用意され、ゴマと呼ばれる黒い種子と塩も用意されます。赤飯を美しいうるし塗りの重箱に入れて、ごま塩の入った小さな袋を添え、それをお盆にのせて、立派な絹か縮緬の風呂敷^{ししゅう}敷（たいてい刺繍が施されていますが）に包んで、赤ちゃんにお祝いをくれた友人らに配るのです。

おむらさんは生後33日目に、ほとんどの赤ちゃんにとって大切な日を迎えました。

注 7～8センチ

しかしながら、彼女の母親は他の普通の母親たちとは違うやり方でお参りをしていたので、小さなおむらさんは神社へは連れて行かれませんでした。他の母親たちは、豪華な赤い花模様の着物を赤ちゃんに着せて、神社に連れて行ったものです。その時、神々を喜ばせるために米の入った小さな袋を持って行き、神社に通じる小川にかかっている橋を渡る時、母親たちは米を水に投げ入れ、それによって神さまの厚意を得ようと願うのです。神社に着くと、下駄を脱ぎ本殿入口の階段を上ります。そこで、中で眠っていると考えられている神々を起すために、赤い布製のひもで小さな鈴を鳴らします。それから手を叩き、御神体の前でお辞儀をし、子どもを守ってもらえるように、そして長寿と繁栄が与えられるようお願いするのです。こうして彼らは神さまが自分たちの祈りをきっとかなえてくださるだろうと確信して家路につきます。以前子どもを失ったことがあり、別の赤ちゃんに恵まれた両親らは、赤ちゃんの長命を確信するため次のような方法をとりました。母親は100人の人たちから布地の切れ端をもらいます、そしてこれらの端切れで子どものための服を作るのです。この服は子どもの命を保証すると考えられていました。

さて、おむらさんは生後100日目を迎え、形だけの最初の食事^(注)が与えられます。祝宴が準備され、その家で一番の年長者、もしおばあさんが生きていればおばあさんが、赤ちゃんに食事をあげる役です。膝の上に赤ちゃんを抱え、食べ物を箸でつまんでそれを赤ちゃんの口に付け、それからそれをおばあさんが全部食べます。この儀式は子どもが健やかで長生きするように願ってするものです。

おむらさんの母親はあまり丈夫ではなく、自分で子どもを育てることができませんでした。その当時は、新鮮な牛乳やコンデンスミルクは日本にはありませんでした。ただ一つできることは乳母を見つけて育ててもらうことでした。この乳母は宮本家から少し離れた所に住んでいたため、母親はめったにわが子に会えませんでした。おむらさんが2歳ぐらいの時、乳母がいつものように子どもを見せに家に来なかったため、母親は心配になり、子どもに何かあったのではないかと乳母の家に様子を見に行きました。驚いたことに、乳母はすでにそこを立ち去っており、その所在もわからなくなっていたのです。宮本氏はその時家を離れており、戻ってくるまでには数日かかりました。人力車がその当時の汽車の代わりでしたし、今あるような電報も電話もなかったのです。父親が家に戻り、乳母の居場所も見つかる頃までには、おむらさんの片方の目が乳母からうつされた病気によって損なわれていることがわかりました。もし、目に炎症がおきたことがわかって、すぐに乳母が治療のために子どもを家に連れてきていれば視力を失わずにすんだかも知れません。しかし、怠慢と両親への恐れから身を隠してしまい、かわいそうにおむらさんは片目で母親の所に戻されました。両親は子どもが負うことになった大きな重荷のことを思って悲嘆にくれました。

注 お食い初め

おむらさんはもう、おかゆ、卵などのような食事ができるようになっていたのです、家で育てられることになりました。母親が仕事で忙しい間、おむらさんが小さな子守りの背中にくくりつけられている姿が見られました。そして彼女をおぶっている女の子が石けりや羽根つきをして遊ぶたびに、かわいそうにおむらさんの小さな頭は前後にゆさぶられるのです。どれほど暑さがひどくても、おむらさんの小さな頭はいつも太陽の直射日光にさらされていました。わたしは日本に多く見られる失明の大部分が、この慣習によって引き起こされていると考えています。しかし最近では母親たちは、赤ちゃんを帽子かパラソルで保護するようになってきています。



THE DOLL FESTIVAL.

ひな祭り

3月3日がやってきました。これは女の子たちにとっては大切な日で、ひな祭りの日です。このために特別に準備されたひな壇が客間に組まれ、これに美しい着物を着た人形が飾られ、最上段には天皇と皇后の小さな人形が座っています。この日子どもたちはすてきなごちそうにありつきます。ごちそうの中には、白酒と緑赤白の3色の餅菓子^(注)もあります。餅は炊いたお米をつぶして作るお祝いの料理です。女の子はだれでも大喜びでこの日を楽しみに待つのです。でも、かわいそうなおむらさんにはこの楽しみがありませんでした。彼女の母親は自分たちが財産をなくしてしまっていたので、おむらさんにはひな祭

注 ひし餅

りなしで我慢してもらわなければならないと思っていました。

まもなくおむらは8歳になり、両親は娘を学校に行かせました。ところが学校の初日は実に厳しいもので、しかもその厳しさは日を追って増していきました。なぜなら子どもたちが見えない目のことでおむらさんを無慈悲にからかったからです。彼らは彼女を「ていさんさま」^(注1)と呼びました。貞山さまとは仙台の初代藩主のことで、この人もおむらさんと同じように片目が見えませんでした。ところで貞山さまについて興味深いお話を一つしておきましょう。



仙台の初代藩主

彼は仙台近郊の美しい丘にある大きな廟^(注2)に葬られています。このお墓の両側には、彼が亡くなった時に霊の国でも彼に仕えるために自害した十人の家臣たちの墓石が並んでいます。貞山さまは自分自身の像を造り、彼が死ぬと自分の霊がこの像に入るのだと言いました。この像は松島のある有名な寺院の本堂にまつられています。^(注3)ろうそくが像の前で常に灯されていて、何百人もの人々がお参りに行きます。

かわいそうなおむらは「貞山さま」とか他のいやな名前と呼ばれるのが嫌いでした。そして両親は娘を学校に行かせるのがとてもむずかしいと感じました。学校では友だちのいじめに耐え、家では厳しい罰を受けて、彼女の心はかたくなになり、たいそう扱いにくい子どもになってしまいました。母親は何度か娘にやけどを負わせるほどの極端な罰

注(1) 伊達政宗 (1567-1636)

注(2) 瑞鳳殿

注(3) 現在は瑞巖寺の宝物館に展示してある。

を与えたことがありました。これは皮膚の上に、ある種の粉薬を少しのせ、それに赤く熱した鉄で火を付け、皮膚に深い傷を焼きつける^(注)というものでした。母親は娘の悪い行いを直すと同時に、悪い目を癒す効果もあるのではないかと思ってそうしていたのです。しかしその後何度も母親は涙を流しながらその傷跡を見て、こう言いました。「わたしはどうしてこんなに残酷なことができたのかしら？」おむらは学校でも家でも喜びを見いだせなかったで、何かを学ぼうが学ぶまいが一向に構いませんでした。ある朝母親は言いました。「今日はお寺に行かなければなりません。ご先祖様にお参りする日です。」支度をして、二人はお弁当を持って出かけました。まもなく寺に到着してみると、そこにはたくさんの人たちがおり、大勢の友だちや親せきの人たちも、先祖の聖堂にお参りに来ていました。

その頃押川師と吉田師が仙台で、すべての人々の救いのために自分の命をささげ、また従う人たちは残らず救って下さるといふ救い主の言葉を宣べ伝えていました。小さなおむらは、両親には内緒で彼らのバイブル・クラスに2、3度出席したことがありました。そして彼女が聞いたわずかなものが実を結び始めていました。友人たちや親せきたちが老いも若きもお酒を飲んで、先祖の聖堂の前で踊っていると、一人の僧が小さなおむらの所にやって来て、こう言いました「どうしてみんなのように踊らないのか？」そして踊らないなら彼女を罰するぞ、と脅しました。でも彼女は押川師の話からそんなことは間違っていることを知っていましたので、それを断りました。彼女は泣きながら母親の所に走っていき、踊りたくないと言いました。母親はそれを許しました。娘がこういうことで一度心に決めたら、それ以上無理強いするのは無駄であることがわかっていたからです。実際、これがおむらの信仰生活の始まりだったと言ってもいいかも知れません。

この先祖への公の参拝は1年に1度行われ、この時、男も女も子どもたちでさえ酔ったように興奮している姿が見られました。先祖崇拝はクリスチャンになりたいと



HACHIMAN SHRINE.

八幡神社

注 ^{きゅう} 灸

思う日本人にとって、やめるのが非常に難しい問題です。先祖代々の位牌がとても神聖なものとして大切に守られているので、人々がクリスチャンになる時にそれを手放すのは実にむずかしいのです。

仙台はまだ異教の慣習で満ちあふれています。市内の北西部の丘の上に、八幡神社^(注1)と呼ばれる有名な神社があります。神社自体はそれほど立派なものではなく、それどころかとても簡素な神社です。しかし人々の注意を引きつけるのは、この神社で人々が参拝するその仕方です。毎年1月14日^(注2)、一年で最も寒い時期に、この神社に、若い人も年老いた人もみんなが一緒に集まっている姿が見られます。彼らはみんなたくさんの酒（米で作ったアルコール）を持ってやって来て、神々の前にそれを奉納します。それから彼らは衣服を脱ぎ、頭から水をかぶり裸の体にかけるのです。これは一年の間に犯した罪を浄めるために行われます。それから彼らは神々の前に深々と頭を下げ、新しい一年が彼らにとって良いものになるようお願いするのです。その後で、一種の懺悔^{さんげ}の苦行として彼らは護符などを持って通りを行進しますが、寒さで歯がガタガタ鳴らないように折りたたんだ白い紙^(注3)をくわえています。神々が飲めない酒は自分たちで飲んでしまいます。最近ではこれらの参拝者は通りを裸で行進することは許されていませんが、現在でさえ彼らが身に着けているのは非常に薄い白い上着だけで、中には上着を水に浸けてから身につける者もいて、上着はすっかり凍り付いていたりします。今年の1月、この行列に出会った時、わたしは深い悲しみを覚えました。わたしは教養ある若い女性たちがこの参拝者たちの中にいたことを翌朝の新聞で知りました。八幡神社は、人々が罪の赦しのようなことを祈る所としては、わたしが日本で知っている唯一の神社です。ということは、人間を赦すことのできるただ一人のお方を、彼らも信じるようになるかも知れないということでしょうか。

仙台近郊の丘の上に、人々が病気を患っている、愛する人のために祈りに行く別の寺院^(注4)があります。病気の人を治してもらうように神に祈り、それから神聖な滝の下に行って立ちます。時には、数日数夜にわたって、飲まず食わずで滝に打たれます。



SACRED WATER FALLS.

神聖な滝

注(1) 大崎八幡宮

注(2) 松焚祭（どんと祭） 三百年の歴史を持つ正月送りの行事

注(3) 含み紙

注(4) 三居沢不動尊か

こうすることによって愛する者が健康を回復するために、十分に神々を喜ばせようと考えてのことです。

これらのことは見るのも聞くのも忍びないことです。でもわたしたちはこれらの参拝者をありがたく思うのです。なぜなら、こういう人々は最も神の国に導きやすい人たちだからです。何も信じない人々こそわかってもらうのがむずかしいものです。日本では特に若者の間に信仰心のない人が増えています。わたしたちの大事なおむらさんは日本の少女たちのために熱心に働きましたが、同時に彼女は青年たちのことも案じていたことが、間もなくおわかりになるでしょう。

III

回心そして役立つ者へ

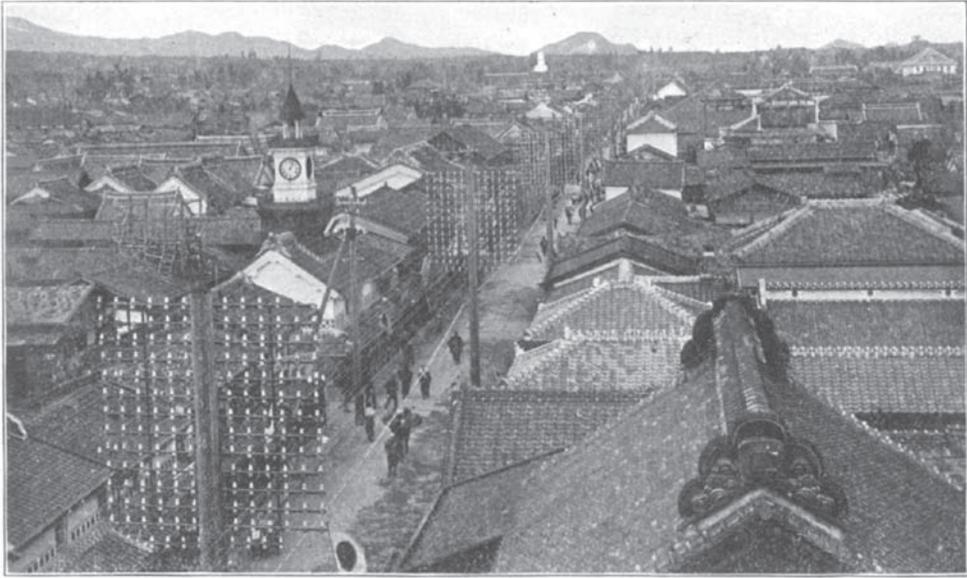
この頃、宮本家の隣りに小平という名前の家族が引っ越してきました。彼らは押川師と吉田師の集会に出席しており、キリスト教に大変関心を持ち、すぐにでも洗礼を受けるところまで来ていました。彼らは宮本夫妻から、むらという娘にほとんど手を焼いていることを聞いていました。小平夫人はある日おむらさんの両親に「娘さんをイエスの集会に連れて行こうと思うのですが…」と言いました。父親は「いいですよ。」と答えました。「どうぞお好きになさってください。」しかし彼は、それで娘がいい子になるなどとは全く思っていませんでした。宮本氏はとても誇り高い人で、皆が「^{やそ}耶蘇^{きょう}教」と呼んでいる新しい宗教を嫌っていました。仙台市の中心部のバナナ交差点^(注)と呼ばれる場所に4軒の有名な角屋が建っていて、そこにはこの新しい宗教を非難する張り紙がしてありました。そこにはこの宗教といくらかでも関わりのある人たちは皆苦難を受けると書いてありました。



FAMOUS CORNER HOUSE.

有名な角屋

注 芭蕉の辻



THE MAIN STREET, KOKUBUNCHO.

国分町通り

この4軒のうち3軒はこの15年の間に火事で焼失してしまいました。残った1軒だけが昔のことを今に伝え続けています。小さなおむらさんはこんなビラのことは気にしませんでした。そして他人がなんと言おうと気にもとめなかったのです。小平夫人と一緒に出かけた最初の日に、彼女は押川師が話したことが大變心に残り、教わったことを実行しようとした。その日の説教は十戒の第五の戒め^(注)についてのお話で、小さなおむらさんの心に強く印象づけられました。彼女はもっとよい娘になろうと決心しました。彼女は今では不平を言わずに学校へ行き、まじめに勉強しましたし、さらには両親に素直に、優しくなりました。これらすべてが両親に感銘を与え始めました。ある日、父親が「学校の友だちはお前のことをいじめなくなったのかい？」と聞きました。学校の子どもたちはおむらさんがイエスの集会に出席しているのを知っていたので、前よりももっと彼女をいじめていました。彼女は単にいじめられていただけでなく、迫害を受けていました。でも父親に対する彼女の静かな答えは「いいえ、彼らは今でもわたしのことをいじめています。でも身体を傷つけることができても魂までは傷つけることはできません。」というものでした。おむらさんの主イエスに対する愛が大きくなるにつれて、彼女の苦しみも大きくなりました。子どもたちは彼女につばを吐きかけたり、街角に集まって彼女を通さないように邪魔をしたり、叩いたりあれこれと悪態をついたりしました。彼女がお弁当を食べる前にお祈りするのを見ると、彼らはお弁当を取り上げて道に投げ捨て、泥の中に踏みつ

注 「あなたの^{ちちは}父母を^{うやま}敬え」

けたりしました。キリストのために、お昼抜きで過ごす日が何日もありました。しかしこれらすべての嫌がらせを通して、おむらさんの信仰はますます強くなって行ったのです。彼らはおむらさんをいっそうキリストに近づけたただけでした。

両親は娘の中に起こった変化を大変喜び、一体どうやってこのイエスの宗教がこのような効果をもたらすことができたのか不思議に思いました。ある日おむらさんの父親が大通りを散歩していた時、押川師が説教している家の前に人だかりができているのを見て立ち止まり、耳を傾けました。男も女も子どもたちも、自分たちの罪を思って泣いているのが聞こえました。押川師の説教が聞いている者すべての心を打ったのです。しかし、宮本氏は儒教を信じる誇り高い人でしたので、冷笑しながら向きを変えてそこを立ち去り、「この宗教は女性や子どもにはいいかも知れないが、男性には必要ない。」と言いました。宮本氏はこの頃視力を失い始めていて、あえて目を使って文字を読む気になりませんでした。ある日、何もすることがなく、医者から目はもう治る見込みがないと告げられてすっかり落胆していた彼は、むらに何か本を読んでくれと頼みました。彼女が聖書から読んでもいいかと尋ねると、「いいよ、なんでもいいから読んでおくれ。」と言いました。そこで

娘はヨハネによる福音書 14 章を読んで聞かせました。その時聞いた言葉が彼に考えるきっかけを与え、ついに彼は押川師と吉田師に話しをしに行くことを決心したのです。二人の話聞いて、彼は自分が罪人であり、救い主を求める必要がある人間なのだと思うようになりました。このことはおむらさんを変えました。彼女は神さまが自分の祈りを聞いて下さったのだと思いました。彼女は両親の回心を願って熱心に祈りました。キリスト者の諸集会における彼女の祈りは、多くの人々の涙をさそいました。彼女のお祈りは効果がありました。ある日父親は再び「わたしとほかの三人の求道者で押川師に会いに行くつもりだ。」と言いました。押川師



HOUSE WHERE MR. OSHIKAWA PREACHED.

押川師が説教をした家

の話は彼らに素晴らしい影響を与えました。宮本氏はついに自分の救い主を見出したように感じました。そのとき何か素晴らしいことが起こったのだと言っています。「わたしは死者として滅び、再び生き返って幸せでした。」彼はこの時聖霊を受けたのだと固く信じています。小さなおむらさんは、両親も彼女の救い主を受け入れるつもりだと言うのを聞いて喜びました。その週、おむらさんが婦人会に出席した時、みんなは「どんなにお喜びでしょうね。」と彼女に言いました。そしておむらさんが感謝の祈りをささげると、みんなも共に喜びの涙を流しました。両親と一緒に国分町



宮本一家：右端がおむらさん

にある小さな礼拝堂で洗礼を受けた時、おむらさんは13歳でした。

それから彼女の祈りは自分の兄弟たちや親せきの人たち、そして友人らに向けられました。神さまは今度もまたすぐに彼女の祈りに応えて下さいました。彼女の兄たちも親戚の人たちもそれに多くの友人たちも、まもなくクリスチャンになったのです。この子どもの喜びが想像できますか？次におむらさんは自分の国のために祈りました。そして死が彼女の愛らしい唇を閉じてしまうまで祈ることをやめませんでした。

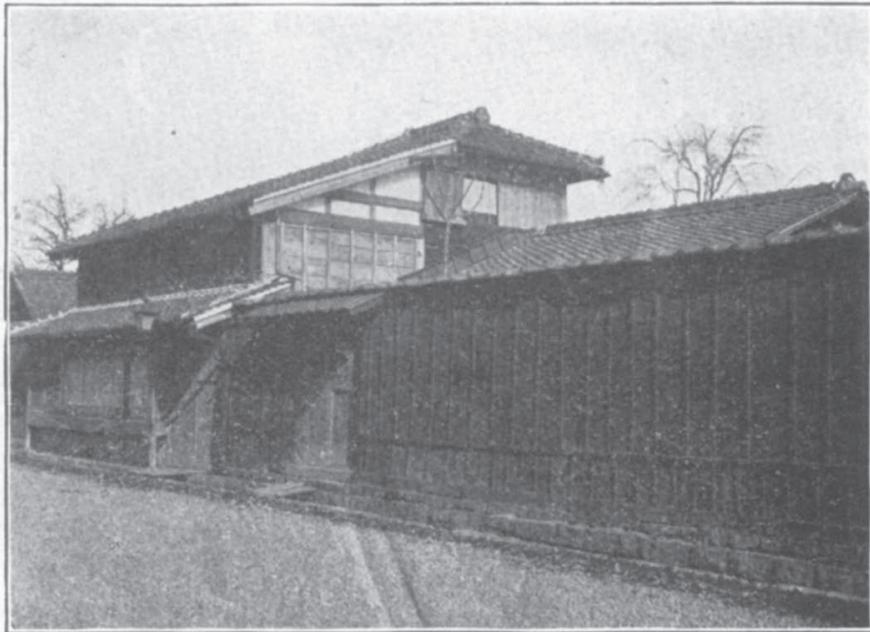
14歳の時、彼女は女子校を開校するために仙台にミス・プールボー（現在のコート夫人）^(注1)とミス・オールト（現在のホーイ夫人）^(注2)が来られるという、うれしいニュースを耳にしました。彼女は二人がやって来るのを本当に心待ちにしていました。当時は、横浜から仙台まで来るには数日かかりました。塩釜まで船で来て、そこから仙台までおおよそ15マイル^(注3)を、ガラガラと音のする古い乗り合い馬車で行かなければなりません。ある日おむらさんはその日の夜遅くに彼らが到着する予定だと知らされました。暗闇など彼女はまったく気になりませんでした。数人の人たちと一緒に二人を歓迎するために、はるか町はずれまで歩いて行きました。ホーイ夫人はある手紙の中でこのように言

注(1) 合衆国改革派教会から派遣された Elizabeth (Lizzy) R. Poorbaugh (1854-1927) 宮城学院初代校長

注(2) プールボーと一緒に来日した教師 Mary B. Ault (1863-1937) 1887年に同じく合衆国改革派教会派遣の宣教師 William E. Hoy (1858-1927) と結婚

注(3) 約24 km

っています。「わたしはいつもおむらさんを、自分のいとしい娘のように思って来ました。彼女は仙台にわたしを出迎えてくれた最初の人たちの中の一人でした」と。



THE FIRST HOME OF THE GIRLS' SCHOOL.

宮城女学校最初の校舎

二番丁と呼ばれる通りにある日本家屋を借りて、新しい学校が開校しました。そしておむらさんはその最初の生徒の一人でした。彼女は新しい勉強をするのがとてもうれしくて、器楽と声楽が大好きになりました。ミス・エマ・F・プールボー^(注)が到着して音楽の授業が始まると、おむらさんはエマの熱心で勤勉な生徒となりました。彼女の最大の楽しみはクリスマス・セレナーデでした。おむらさんと女学校の数人の生徒たちはクリスマスの朝、早起きし、ちょうちんを持ってクリスマス・キャロルを歌いながら宣教師の家を一軒一軒回ったものでした。学校の生徒たちはこの習慣を今でも続けています。クリスマスの早朝3時か4時頃に、神さまから人間への愛について歌う少女たちの愛らしい歌声を聴くことほど、宣教師の心を打つものはありません。歌が終わると、歌い手と聴く者の間で「メリー・クリスマス！」の挨拶が交わされます。

注 Emma F. Poorbaugh プールボー校長の妹

女学校の生徒である一方で、彼女は日曜学校の教師でもあり、悪童ぶりで知られる大勢の男の子がいるクラスを受け持っていました。この少年たちはいろいろとむずかしい質問をするようにと、教養のある大人たちにけしかけられていました。おむらさんは答えられる時もあり、答えられない時もありました。すべてに答えることのできない無力さで、彼女は多くの涙を流しましたがあきらめませんでした。彼女は助けと導きを求めて神を見上げました。そして後に、まさにこの悪童たちの何人かが神さまに心を向けるのを見た時の、彼女の喜びは非常に大きなものでした。



FIRST GRADUATES OF THE GIRLS' SCHOOL: OMURASAN ON THE RIGHT.

宮城女学校最初の卒業生 右端がおむらさん

おむらさんは上野にある国立の音楽学校^(注1)に入学しました。でも彼女はその学校が好きになれなかったので、たった1年でやめてしまいました。そこでミス・ハロウエルは、カナダメソジスト宣教団によって設立された女学校^(注2)におむらさんが入れるように手配しました。その学校にはとても素晴らしい音楽の教師がいたのです。レッスン代金をまかなうために、おむらさんは教師の仕事もすることになりました。

注(1) 現在の 東京芸術大学音楽学部

注(2) 現在の 東洋英和女学院

おむらさんは21歳で女学校を卒業しました。その後、彼女はミス・ハロウエルのヘルパーになりました。

2年間この仕事を続けた後で、彼女は東京に行って音楽の勉強をしたいという自分の希望をミス・ハロウエルに告げました。おむらさんはミス・ハロウエルを母のように尊敬し深く愛していました。ミス・ハロウエルもまたおむらさんを愛し、彼女に深い関心を寄せていました。片目が不自由なために、彼女にふさわしい男性との結婚はむずかしいだろうと思い、また彼女がピアノのレッスンを続けていけば自立して生計を立てることもできるだろうと思ったので、ミス・ハロウエルはおむらさんの願いを受け入れ、彼女が東京へ行く段取りをつけてやりました。



OYUKISAN AND OMURASAN WITH MISS HOLLOWELL.

左からおゆきさん、ミス・ハロウエル、おむらさん

た。彼女はこれを喜んで引き受け、この新しい仕事に満足していました。彼女は女生徒たちから大変愛されました。彼女は音楽を心から愛していて、両手を休めることがほとんどなかったため、両手に力が入らなくなったことが二度もありました。しばらくするとさらに深刻な問題が発生しました。彼女の良い方の目が痛み始めたのです。ミス・ハロウェルは有名な眼科医であるホイットニー博士に診てもらうように勧めました。するとホイットニー博士は、おむらさんに音楽の勉強をやめなければ、完全に失明してしまうだろうという恐ろしいことを告げたのです。おむらさんは大変失望しました。しかし彼女はお医者様に従うことが賢明であろうと考えました。それで音楽をあきらめて、学校の寄宿舎取締(注)になりました。おむらさんを愛していた一人の婦人が、自分の友人であり地位のある若者とおむらさんが結婚することを切望していました。お見合いがあり、まもなく彼らは婚約しました。ただし彼がクリスチャンにならなければ結婚しないという了解のもとでした。彼はまじめな求道者のように彼女には思われましたが、ある日彼が前の晩に芸者と時間を過ごしたことを聞いて、彼女の喜びはすべて悲しみに変えられてしまいました。彼女は直ちに彼に婚約破棄を願う手紙を送りました。彼は自分が間違っていたことを認め、二度と罪は犯さないと言いましたが、おむらさんは「いいえ、一度わたしに不誠実だったあなたを、二度と信じることはできません。」と言いました。それで婚約は取り消され、彼女はもう二度と、相手がクリスチャンになるであろうという願いのもとに、信仰のない人と婚約することはしないと断言しました。「もしわたしが結婚するなら、クリスチャンで信頼のおける人とでなければなりません。」

東京におよそ2年半いて、彼女は仙台に戻り、短い期間でしたがわたしのヘルパーをしてくれました。この間に彼女はわたしにとって非常に大切な人になりました。彼女は千金の価値があり、その後宣教師としてのわたしの人生および働きにとって大きな助けとなってくれました。

その頃、わたしたちの学校の女性宣教師たちは、日本人の聖書と音楽の教師を必要としていました。おむらさんはこの仕事を引き受けるよう依頼され、自分の目が再びすっかり見えるようになっていたので、その依頼を引き受けることにしました。彼女は喜び勇んでこの新しい仕事に取り組み、一生懸命に働きました。彼女は特にバイブル・クラスに関心を持っていました。しばしば彼女はわたしの所にやってきて、彼女の喜びと悲しみを語ってくれたものでした。彼女は準備と祈りなしには決して授業に向かうことはしませんでした。彼女は新入生たちに静かに話を聞かせるのにいつも苦労していました。彼らはおしゃべりはするし、おむらさんの話したことに笑ったりするので、彼女は深く傷つきました。ある日、彼女はわたしの所に来て、こう言いました。「今日聖書の新しいクラスを始めたのですが、生徒たちの態度はひどいものでした。教え始める前にわたしがいつもすること

注 東洋英和女学校 50 年史 (1934) 教職員名簿より

ですが、神さまの助けとお導きを願って祈りました。わたしはこう言いました『みなさん、わたしは一つあなた方に教えて差し上げたいことがあります。それはただ一人の真実なる神と、世界の唯一の救い主についてです。ただそれはわたしの力だけではできません。それで、わたしが皆さんに、神さまを感じ、神さまを知ることが教えてあげられるように、神さまの助けと導きをお願いしようと思います。ですからどうかしばらくの間静かにして下さい。』しかし彼女が熱心に祈っている間も彼女たちは大騒ぎをし、授業を始めても全然聞いていないようなふりをしていました。しかし彼女たちは少しは聞いていたのです。というのも、それから数週間後に彼女はとてもうれしそうな顔でわたしの所にやってきて、こう言いました。「わたしの生徒たちは、とても興味を持ってきています。」そして生徒たちがおむらさんに尋ねる真剣な問いのいくつかをわたしに話してくれました。しかしおむらさんにはこれに対処する力がありました。聖書を教えることに熱心になるあまり、学校の授業で教えるだけでなく、土曜日にも生徒たちを家に招いて特別授業を行ったりしました。彼女は生徒たちがクリスチャンとして育っていくことに深い関心を持っていました。彼女たちが一人また一人と教会につながっていくのを見るのは、言葉では言い表せないほどの喜びを彼女にもたらしめました。彼女は聖書の優れた教師であり、生徒たちにも大変愛されていて、多くの生徒から「お母さん」と呼ばれていました。

IV

結婚と家庭生活

1900年にNorth Japan College (注)の神学部を卒業した学生の中に、吉村末吉という若者がいました。彼は特に熱心な生徒で、卒業後すぐに仙台教会の副牧師になりました。この教会はちょうど新しい教会堂を建築中でしたが、当時はまだ古いお寺を借りて礼拝を守っていました。

彼は副牧師の仕事を始めると、妻の必要性を感じました。そういう場合の日本の習慣にならって、教会員の中の何人かの老婦人に自分の願いを伝えました。彼は、自分が貧しい少年で、労働会で働きながら学校を卒業した人間なので、牧師の妻としてふさ



REV. S. YOSHIMURA.

吉村牧師

注 現在の東北学院大学

わしい女性が自分との結婚を承諾してくれるのはむしろ嬉しいのではないかと心配していると言いました。教養のある女性というのは、人に嫌われるイエスの説教者の妻であるよりは、もっと高いものを望むものです。しかしある日、宮本むらさんが彼の妻となることを承諾したという知らせを聞いて、彼の心は喜びでいっぱいになりました。彼女は以前から彼を知っていて、彼が教育を受けるためにどんなに一生懸命働き、苦勞してきたかも知っており、彼の真面目さに感心していました。しかし、とりわけ彼女は彼の美しいクリスチャンとしての人柄を評価したのです。彼女は彼との結婚話がもたらされた時、わたしの所に来て、自分は牧師の妻に値する人間かどうかとわたしに尋ねました。「わたしは牧師の報酬が少なく、生活が楽ではないことを知っています。でももし先生が、わたしが妻になるのに値する人間であると思われ、吉村氏もそう思われるのであれば、わたしは喜んで彼の妻となり、人生で襲って来る試練に彼が耐えられるようにお助けしたいと思います。」わたしは「もしあなたがふさわしくないとしたら、ふさわしい人など誰もいませんよ。あなたは彼にとって大きな助けになれるし、彼が引き受けた、生涯をかけた仕事においても大きな喜びを与えられると思います。」と答えました。それからお互いが会って話をする場が設けられ、婚約の日取りも決められました。婚約は着物か帯（飾り帯）が男性から仲人を通して女性に贈られるまで整ったとはみなされません。これは5月8日に行なわれました。吉村氏は妻となる人に洋服を贈りました。彼は自分が選んだ人が愛を受け入れてくれたことを大変喜びました。婚約してすぐに彼は彼女に会いに行きました。彼女の住まいはその頃宮城女学校内にありました。その客間で二人はしばらく静かに話をしました。帰り際に、彼は彼女にピアノを弾いてくれるように頼みました。彼女の選んだ曲は「嵐」^(注)でした。これはおむらさんがわたしのためによく弾いてくれた曲で、わたしはこの曲が大好きでした。「ご存知のようにあなたとわたしはこれからたくさんの嵐をくぐり抜けて行かなければならないと思いますが、嵐の後には平穏と静けさがやって来ますわ。」と言いました。

ある日、彼女は彼に常緑樹の若枝を1本と、数本のスマイレをプレゼントしました。スマイレは彼女の好きな花で、常緑樹は彼への彼女の愛が不変であることを意味していました。時折彼女が彼に示したこういう愛のしるしは、ある日の日記にこう書き記すほどに彼を感動させました。「愛の力は何と強いことか。真実の愛は人の力で破られるものではない。」彼宛てのおむらさんのラブレターはすべて英語で書かれており、そのすべてが彼を勇気づける言葉に満ちていました。一度誰かが彼のことを批判したに違いありません。というのは手紙の一通に彼女はこんなことを書いています。「わたしは人が何と言おうと気にしません。人々があなたに反対を唱えれば唱えるほど、わたしのあなたへの愛は深まるばかりです。」

注 フリートリッヒ・ブルグミュラー、18の練習曲13番「嵐」

そうして日が過ぎるにつれて、二人の愛はますます強まり、ついに9月15日に彼らは結婚しました。シュネーダー博士が式を執り行うという栄誉を、そしてわたしは結婚祝の食事を準備するという栄誉を与えられました。これが古い仏教寺院で挙げられた最後の結婚式でした。間もなくその古い寺院は取り壊され、その材木の一番良いものが、メリーランド州フレデリック市のハウク姉妹の協力で建てられた牧師館のために使われました。



FIRST CHURCH BUILDING, SENDAI, PURCHASED FROM BUDDHISTS IN 1887. EXTERIOR.

仙台の最初の教会堂外観、1887年に仏教寺院から購入

おむらは新しい会堂の建設に非常に興味を示していましたが、ただ一つ、その完成が結婚式に間に合わなかったことだけを残念がっていました。彼女は新しい教会での最初の結婚式を挙げたかったのです。

吉村氏の給料はわずか月 22 円、あるいは米ドルで 11 ドルだったので、自分と花嫁のために家を借りる余裕などありませんでした、そこで 6 × 3 フィート^(注1)の小さな台所付の 12 × 9 フィート^(注2)の小さな部屋を借りました。そこには、冷たい冬の風から二人を守るものは障子しかなく、夜閉めきるために普通はついている雨戸もありませんでした。この小さな部屋がおむらの趣味の良い、繊細な手で整えられ、とても快適で居心地良く見えたので、誰もが部屋の狭さを忘れ、皆を迎え入れてくれた二人の幸せそうな顔だけ

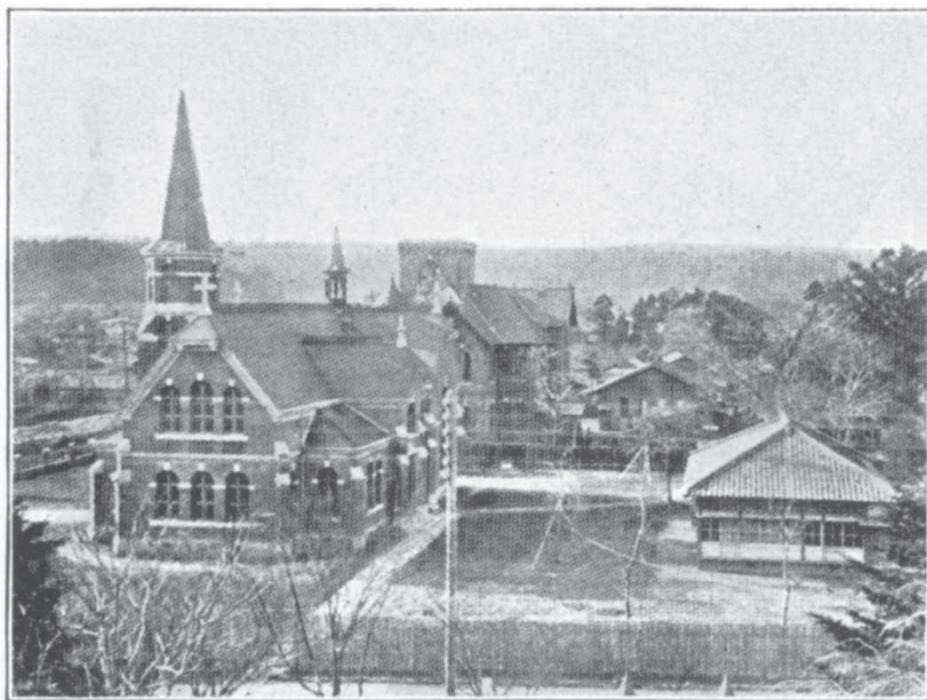
注(1) 約 1.8 m × 0.9 m

注(2) 約 3.6 m × 2.7 m

しか覚えていないのでした。宮殿ですら、この小さな部屋で二人が見出した喜びに勝る喜びは与えてくれなかったことでしょうか。おむらさんは女学校での教師の仕事を辞めませんでした。できる限り夫を助けていかなければならないと思っていたからです。それで毎朝彼女は早起きし、朝食とその日の夕食の支度をして、そして学校へ行く前にやるべきこと全てに気を配るのでした。二人は学校から7ブロック離れた所に住んでおり、8時には勤務についていなければならなかったので、出勤前に家事をすべて片付けるのは大変なことでした。妻にやさしくしたかった吉村氏は水を汲み、炭を運び、その他のこまごまとしたことを手伝いました。この親切がうわさ話になりました。夫が妻の手伝いをするのは、普通の家庭ではみられない光景だったのです。それで周囲の詮索好きな主婦たちは、宮本氏夫妻はあまりにも親愛の情が深過ぎると批判し始めました。彼らはそのことをおむらさんにも父親にも話しました。それである日彼女はわたしの所に来て、「どうしたらいいのでしょうか。わたしは人のうわさになるのは耐えられません。でも夫は人々が何を言おうと気にしないと申します。自分の妻に優しくしてあげたいと思うことは他人には関係のないこと、そしてそれはわたしたちがクリスチャンファミリーとしての生き方を皆に示すことになるのだよ、と申します。」と言いました。わたしは「あなたのご主人が正しいのよ」と答えました。うわさ話しをする人たちはやがて、こんなうわさ話などで新婚の二人の家庭生活を変えることはできないことがわかりました。そして今度は称賛と羨望の眼で二人を見るようになりました。

1901年の春、4月中頃に新しい牧師館が完成し、若い牧師とその妻はそこへ引っ越しをしました。二人にはそれは大きな変化でした。おむらさんは新しい家が気に入り、いつもきちんと整えていました。彼女はすぐれた主婦であり思慮深い管理者でした。彼女は小さなもので大きなことを達成できる人で、また「何もないところから、魔法で素晴らしいものを生み出せる人だ」とわたしたちはよく言っていたものです。彼女は優れた常識だけでなく良い趣味を持ち合わせていて、彼女に匹敵するような人はアメリカの女性でもあまりいないと思います。妻として彼女は夫が望めるものの全てでした。彼女は常に愛情豊かで親切であり、夫の健康と心の平穏に気を配っていました。落胆させられるようなことや問題が起きた時でも、彼女はいつも思いやりのある励ましの言葉を用意していました。時々あまりに具合が悪かったり、疲れ過ぎていて顔を上げることさえ困難な時でも、彼女はいつも会堂の会衆席にいました。彼女の顔を見ると彼は元気づけられ、勇気づけられました。なぜなら彼女は彼の説教の最も熱心な聞き手だったからです。彼女は彼に対する厳しい批評家でもありました。彼はいつも彼女の批評を非常に楽しみに待っていましたので、説教を終えて家に帰るのが待ちきれないほどでした。説教が良かったときは大いに称賛され、良くなかったときは厳しく批評されましたが、それはいつも相手を傷つけない言い方でなされました。「ある時」と吉村氏は言います。「教会員の中にわたしに反感を抱くようになる人が出るかも知れないと妻が心配するような説教をしたことがあります。後で妻の

話しを聞いて、わたしは彼女の考えが正しいことを悟りました。それからわたしたちはともに涙を流しながら、わたしがそのことで危害を加えられないように、わたしが説教で語ったことを無効にして下さるように神に祈りました。わたしは、ある教会員たちの欠点をあまりにも率直に語り過ぎたのです。そしてわたしの未熟さゆえに、妻は問題が生じることを心配したのです。」



NIBANCHO CHURCH AND PARSONAGE.

二番丁教会と牧師館

おむらさんは夫を誇りにしており、彼が人々に愛されることを望んでいました。また、彼女は夫にきちんとした身なりであることを望みました。彼らは貧乏でした。大きな教会の牧師でしたが、教会員が牧師に与えることのできる給与は少ないものでした。しかしそうではあっても彼はいつも立派な服を着ており、このことは信徒たちを大変喜ばせました。とは言っても、このことのために妻が大きな犠牲を払っていたことなど、ほとんど誰も知りませんでした。

1901年6月24日、この家に男の子が生まれました。彼らはその子を「信一」と名付けました。それは「信仰が一番」という意味で、「しんちゃん」と呼ばれていました。「ち

ちゃん」は、子どもの名前につける愛称です。彼はチャーミングなかわいい赤ちゃんでした。数々の暗い時も彼の存在によって慰められました。しかし母親は今までよりもさらに忙しくなりました。

この新しい家族のお世話に加えて、彼女は家事をこなし、学校での仕事も持っていました。家計のやりくりが大変だったので、さらにいくつかの夜間の個人クラスも引き受けていました。しかし彼女の肩にかかるすべての重労働と責任にも、彼女は決して疲れた顔を見せず、そればかりかしばしば、「イエスさまがわたしを愛して下さるのがうれしい」^(注)という、あの美しい讃美歌を彼女が歌う声が聞かれました。彼女はどんな借金をすることにも絶対に反対でした。もし養うのが自分たちだけだったならそれほど困難ではなかったでしょう。しかし、吉村氏の両親と、彼の姪も彼らを頼っていましたし、また援助を求めて時折嘆願の手紙をよこす吉村氏の病気の兄弟を助けてあげなければなりません。それで彼らはどのよう



吉村氏、おむらさん、あかちゃん

うにやりくりすればよいのか時々わからなくなりました。しかし彼らはいつも何とか解決の方法を見出しました。そしてあらゆる心配事にもかかわらず、彼女は優れた母親であり続けることができました。彼女は息子を放って置いたりせず、また家族礼拝を忘れたりはしませんでした。毎朝毎晩、家族の祭壇の前に行き、交代で礼拝を導きました。彼女はわが子のために、必ず神に祈りを捧げて寝かしつけました。彼女は息子に愛と優しさだけしか目に入らないようにしました。一度、彼女は厳しい試練を与えられ、怒りが彼女の中に噴き出しましたが何も言いませんでした。後にある友人が「どうやってあなたは平静を保てたの？」と聞きました。「あら、わたしは子どもの前では決して怒らないようにしているのよ」と彼女は答えました。彼女が赤ちゃんに教えた最初の言葉は「イエスさま」で、2番目は「パパ」でした。彼女はいつも自分の小さな坊やをこざっぱりと清潔に見えるようにしていましたが、彼のために何か新しいものを作りながら多くの貴重な時間を過ごしました。彼女は普通の日本の着物を彼に着せませんでした。日本の着物がたいそう手足の動きを不自由にし、子どもがすすくと成長するのを妨げると感じていました。そこで彼女は新しい型の洋服を考案しました。その服を着たしんちゃんは、実に可愛らしく見えました。

注 作詞作曲 Philip P. Bliss(1838-1876) , 初行 “I am so glad that our Father” ~

おむらさんは彼に最初のクリスマスを経験させることをとても楽しみにしていました。小さなクリスマスツリーが飾られ、わたしと子どもたちと数人の求道者らが招待されクリスマス喜びを分かち合いました。彼女は美しいかぎ針の編み物ができて、わたしに立派な白いショールを編んでくれていました。彼女ともう一人のわたしの女友だちと一緒に毛糸を買い、親愛なるおむらさんが、わたしへの愛と感謝を表すために真夜中過ぎまで時間を使って編んでくれたのです。



OMURASAN SERVING CAKES AND TEA TO A CALLER.

来客をお茶とお菓子でもてなすおむらさん

1901年の秋に新しい教会堂が完成し、10月20日に献堂されました。まもなく吉村氏がこの教会の正牧師となり、彼の負うべき責任が増えました。おむらさんもやる事がさらに増えました。彼女は求道して来る人すべてに大きな関心を持っていました。彼らの家はいつも開かれており、誰でも歓迎されて来訪者はみな笑顔で迎えられました。わたしは教会員たちが「もしおむらさんが来訪者を見かけたら、門まで走って行って歓迎することでしょう」と話しているのを聞いたことがあります。仙台市内に家がない女学校の生徒たちは、おむらさんの家に住んでいました。彼女たちはそこにいることも、しんちゃんと遊ぶことも楽しんでいました。しんちゃんは皆のアイドルでした。そして彼が受けた甘やかしは、普通の子もだったらきっとその子をだめにしていたことでしょう。けれどもしんちゃんには影響がありませんでした。彼は変わらず気だてのよさを持ち続けました。

North Japan Collegeの学生たちもまた、吉村家に家庭を見出していました。おむらさんは若者たち、特に仙台で孤独な青年たちに関心を持っていました。彼女は悪から守るために少年には母親が必要だと言って、家にやって来る一人一人の少年の母になること

を引き受けました。少年たちは土曜日や自分たちが休みの日にやって来て、一日を過ごしていました。おむらさんはよく彼らに食事を出しましたが、それでも彼らは帰らずに、夜遅くまで話し込んでいったものです。吉村氏はこう言っていました。「彼らはわたしに会いに来るようなふりをしていましたが、実際は妻との話しに引かれて来ていたのです。わたしが時間が足りなくなると不平をもらすと、彼女は、『彼らをかawaiiそうに思っあけて。彼らには他に行く所がないのよ。わたしたちは彼らを救い、クリスチャンホームとはどうあるべきかを示してあげられるお手本になれるかも知れないですよ。もしわたしたちが彼らを追い出せば、彼らは道をそれて、毎日この町で破滅に向かっている何百人もの人たちと同じように、道を見失ってしまうかも知れません。』と言ったものです。」仙台の町は教育の中心地です。何千人もの学生たちが日本中からここにやって来ます。学生たちは娯楽を求めて歩き回ったり、しばしば身も心も破滅させてしまうような場所へ近づいて行くままにされています。それと同じような生活を送っている何千人もの兵士たちもいるのです。おむらさんとわたしは時折この問題について話し合い、このような若者たちのために、健全なレクリエーションの場が設けられることをいつも願っていました。良い読み物が備えられ、また素晴らしいクリスチャンの人たちと出会うこともできるような場所です。しかしわたしたちにはまだそのような場所がないのです。

1902年の夏におむらさんとわたしは、次の冬にやるべきたくさんの仕事の計画を立てていました。彼女はキリスト教をまだ知らない女性のためにわたしたちが始めるつもりだったバイブル・クラスに特に大きな関心を持っていました。彼女とその仕事について話しをした後はいつも、自分が宣教師の運命にあることを、それまで以上に感謝しながら帰宅しました。

しかしわたしたちがこの地上での働きを計画している間に、天の父なる神さまは彼女のために別の計画をたてていらっしやったのです。

V

最後の日々

9月29日にもう一人の男の赤ちゃんが誕生しました。もし母親が生まれてきた赤ちゃんと同じくらい健康であったなら、みんなが幸せだったことでしょう。しかし、彼女の命はとても危機に瀕しているように思われました。産後4日目にかなり高い熱が出始めました。わたしたちは直ちにキリスト教信者の内科医である山本先生を呼びました。彼は患者を診ると、わたしたちの不安が間違いなことを告げました。お



BABY KIYOSHI.

次男 清

むらさんの症状はかなり深刻なものに思われ、わたしたちはさらに別の二人の著名な内科医も呼んで診てもらいましたが、二人とも首を横に振りました。5日目に彼女は少し回復したように見えました。それで吉村氏は赤ちゃんに名前を付けました。彼はマタイによる福音書5章8節^(注)からとった「清」(純粋な)という名前を選びました。母親は夫が選んだ名前をととても気に入りました。彼女がととても機嫌良く見えたので、わたしたちの希望は再びふくらみ、彼女が回復できるものと信じ始めました。しかし、日曜日の朝彼女は再び悪くなり、月曜日の朝に使いの者が、吉村夫人がすぐにわたしに会いたがっていることを伝えに来ました。わたしは彼女が何を望んでいるのかと大急ぎで駆けつけました。彼女の前に行くと、彼女はわたしを見て微笑み「ミセス・シュネーダー、あなたはわたしにととても親切でしたね。わたしのためにして下さったこと全てに感謝したいのです。わたしはもうすぐ死にます。だからどうぞわたしの話すことを聞いて下さい。」と言いました。「おむらさん、わたしたちはあなたを必要としているのよ、あなたはわたしにとってとても大きな存在なの、わたしはあなたを必要としているのよ。それにあなたの愛するご主人と子どもたちもあなたを必要としているわ、ここでキリストのためにできることがまだたくさんあるのよ。」「そうね、そのとおりです。でも神さまがわたしを呼んでおられるのを感じるのです。ですから今、わたしがあなたに伝えたいことを聞いていただきたいのです。というも、やがてわたしはあなたと話すこともできなくなるでしょうから。」と彼女は言いました。それで彼女は埋葬される時に着たい服はどこにあるかとか、葬儀に関するいろいろなことをわたしに話しました。その間彼女の夫は、妻の命を救って下さるようにと、涙ながらに神に祈っていました。わたしがまだおむらさんと話している間に彼女の盲目の父親が部屋に入ってきました。わたしは彼を枕元まで連れていきました。彼は娘の顔を見ることができませんでしたが、彼女がお別れを言っている間、彼女の両手を握りしめ、聖書の数節を暗唱してあげていました。彼は文字を読むことはできませんでしたが、新約聖書の多くの箇所をそらんじていました。それから年をとって耳が不自由になっていた母親が別れを告げるために部屋に入ってきました。彼らが手を握りしめると、おむらさんは自分の最後の言葉を母親に伝えて欲しいとわたしに頼みました。わたしは母親の耳元に口を近づけて、その言葉を伝えました。その後で、彼女の兄弟、義理の姉、そして数人の親戚に別れを告げました。「さあ、ミセス・シュネーダー、みなさんに部屋を出ていただき下さい。そしてわたしの子どもたちを連れてきて下さい。」と彼女は言いました。わたしたちは、彼女がそんなにも死の扉の近くにいるとは思えなかったので、最初この申し出を断りました。しかし、彼女がしきりに懇願するので、ついに彼女の希望に従いました。子どもたちが部屋に連れてこられると、彼女は愛をこめて彼らを見つめてこう言いました。「わたしのいとしい息子たち、わたしはあなた方には牧師になってキリストのために魂を

注 「心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。」

救って欲しいのよ。」それから夫に向かって「パパ、子どもたちのお世話をよろしく願いますね。」それからわたしの方を向いて「ミセス・シュネーダー、どうぞわたしの子どもの面倒をみてやって下さい。」それから子どもたちにお別れのキスをすると、彼女は初めてくずおれて激しく泣きました。「かわいそうな子どもたち！」と彼女は言いました。小さな子どもたちが部屋から出され、彼女が夫と二人になっている間、わたしたちは別の部屋で祈っていました。その後彼女はとても幸福そうで穏やかに見えました。わたしたちは彼女が少し持ち直したと思い、再びわずかな希望を持ち始めました。呼吸困難で激しい痛みが続いていた時も、彼女は自分の周りでまだ救われていない魂について考えていました。そして彼女に付き添っていた医師と看護婦を回心させようとしてしました。彼らがベッドのそばに来る度に、彼女は懇願しました。彼女は誰かが自分の代わりにイエスさまのために働かなければならないのだと言い、医師にそうしてくれないだろうか頼みました。医師と看護婦が二人とも教会に行き、キリストのことを学んでみますと約束してくれるとやっと彼女は満足したのでした。

わたしたちのいとしい受難者は、日に日に弱くなり、彼女の言おうとしていることが時々わからなくなりました。9日目に彼女は聞くことも見ることもはやできなくなっていました。そして10日目の朝、彼女は地上よりも天国の方に近いことがわかりました。

彼女は何も言いませんでしたが、誰かが彼女を見るときはいつでも、まるで聖徒たちと語り合っているように彼女は微笑んでいました。11日目の朝11時頃、言葉と視力が戻り、彼女はとてもしっかりして見えました。彼女はもう一度自分の愛する者たちを皆呼び寄せ、これから天国に行くところだと言いました。「わたしはもうすでに生命の水を飲んでおります。」と彼女は言いました。それから詩編の23篇と51篇を読んでもくれるよう頼みました。それが終わると皆を見回して別れを告げ、耳が聞こえない母親には天を指さしました。全ての苦痛から彼女は解き放たれていました。彼女の呼吸は自然で、手はまだ天の方を指さしたまま、ただ目を閉じて静かに眠りにつきました。彼女が息を引き取った時そばに立っていたクリスチャンの医師は、「何と素晴らしいキリストの証人であったことか」と言いました。

わたしたちは皆、彼女を失ったことを嘆き悲しみ一つの部屋に集まりました。間もなく彼女の父親が「神さまはわたしたちによくして下さいましたね、お母さん」と言うのを聞きました。「おむらさんがわたしたちをイエスさまに導いてくれまし



HUSBAND AND CHILDREN.

夫と子どもたち

た。そして今度は、わたしたちを 天国の門で迎えるために、彼女を先に御もとに召されたのですね。」そして二人は、イエスさまのお招きがあればいつでも天国に行く用意がある、と言いました。それから、この年老いた夫婦は神さまの恵みに感謝しました。

おむらさんは自分が選んだドレスを着て、手には白いバラを一本握り、綺麗な棺に安置されました。彼女を母のように慕っていた数人の学生たちによって、棺は新しい教会へと運ばれました。この新しい教会で、最初の結婚式ではなく最初のお葬式が、これから行なわれようとしていました。会堂はクリスチャンもそうでない人も含めていっぱいでした。およそ 600 人あまりの参列者がありました。その中にはそれまで一度も教会に足を踏み入れたことのない人たちも大勢いました。市内の著名な女性たちの多くが、おむらさんを愛し、尊敬するようになっていました。そしてその中の何人かは、彼女が冬の間には教会に連れて来たいと願っていた人たちでした。シュネーダー博士による説教の後、彼女が選んでおいた讃美歌「わがたましいを愛するイエスよ」(注1) が歌われました。彼女はこれ至今までに書かれた中で一番美しい讃美歌だと思っていて、ときおり家事をしながら、その讃美歌を歌っていました。



GRAVE OF OMURASAN.

おむらさんのお墓

2 マイルほど歩いて、わたしたちはクリスチャンの墓地として割り当てられていた場所(注2)に着きました。そこは小高い丘の上にある美しい所で、仙台の町全体とその向こうの海まで続く平野を見渡すことができました。アレン・K・ファウスト夫人(注3)のお墓の近くに、おむらさんの遺骸が埋葬されました。お葬式の翌日、わたしは吉村氏と子どもたちに会いに行きました。大きな損失と、母親のいない子どもたちを思って悲しみに打ちひしがれている父親の姿を見ても、驚きはありませんでした。彼は自分の孤独さを悲しげに語りましたが、それでもあのような妻を、たとえ短期間だったとはいえ持てたことを神に感謝していました。わたしは、幼くして母を失くした子どもたちを慰めるために、できるだけのことをしました。そしてそれ以来何度も彼らを訪ねました。兄のしんちゃんが、母親の写真を指差して「ママ」と言ったり、キリストの写真を指差して「イエスさま」と言

注(1) 讃美歌 273 番

注(2) 輪王寺の北側にある北山キリスト教墓地

注(3) 宮城学院 6 代校長アレン・K・ファウスト夫人のクリスティンは、夫とともに 1900 年に来日し、翌年 24 歳で逝去。

ったりする姿がよく見られました。

一週間ほどして、慰めの言葉をかけようと、わたしはおむらさんの両親を訪ねました。自分たちが天国に行く日もそう遠くないという思いから、彼らが幸せそうなことがわかりました。「天国に行けば」と父親は言いました。「娘はわたしたちに出会い、わたしも彼女に会うことができるのです。」「そうそう」と彼は続けました。「わたしが視力を失いかけていた時にもしクリスチャンになっていなかったならば、きっとわたしは自殺していたでしょうね。わたしはそれに耐えられなかったと思います。しかし主イエス・キリストへの信仰によって、今わたしは幸せですし、わたしの目が見えないのもほんのしばらくのことだと思いと慰められるのです。」

おむらさんの死の直前に、父親は主として呉服屋の店員たちからなる大きなバイブル・クラスを教えていました。店員たちは一日中とても忙しかつたので、彼は夜の9時か10時を過ぎてから教えていました。これを終えると、彼はいつも幸せな気持ちでいっぱいになるので、なかなか眠れませんでした。しかしついに彼は身体が弱くなり、その仕事を断念せざるを得なくなりました。彼を通して彼の甥の一人が回心しました。この人はその後、福島の市長になり、現在も福島の教会の大変熱心な働き手の一人です。おむらさんの母親は、すべての婦人会の会合において、わたしたちの頼りになる女性の一人です。

わたしの親愛なるクリスチャンの友人の皆様、わたしたちがこの愛すべき老夫妻、そしておむらさんの聖徒にふさわしい生涯のことを思う時、日本の救いのために働くのは、本当に価値あることとお思いになりませんか？



“GOD HAS BEEN GOOD TO US, MOTHER.”

おむらさんの両親

読后感想

「ともに生きる」—おむらさんを読んで、私と宮城学院のあゆみ—

同窓会理事（国短 10 回） 小川 愛子

宮城学院を卒業して五十数年、同窓会に関わって十数年にして、母校の史実についてじっくり読書する機会を与えられました。原稿を書くことは本当に恐れ多いことなのですが、宮城に育てられた歩みを思い起こして書くことにしました。

宮城学院創立当時の記録を読んでいくうちに、キリスト教教育を仙台に創設させるために関わった先人の宣教への熱き思いがふつふつと伝わってくるのを感じました。信仰による使命と一言で云うのは簡単ですが、云いつくせない苦難の道のりは想像以上のものであると感じるのは私だけではないと思います。

私が宮城学院に学ぶきっかけは、両親が「良い子でやさしい子」に育ててほしいとの願いからだと言われました。そして、末っ子は早く親と別れる運命にあるから兄姉に可愛がられる子になって欲しいと願い、宮城学院に入学させたと何度も聞かされて育ったのです。当時の私は、当たり前と皆と一緒に公立校へ進むものと思っていたのが、ミッションスクールの中学校を受験すると云われ驚いたことが思い出されます。ミッションスクールとは、、、。礼拝とは、、、。何のことも皆目理解できず、なんと無知だったことかと恥ずかしい限りです。それでも今思うことは、両親と母校に「感謝」と云う言葉のみなのです。当初からキリスト教教育の中に入り、疑問もなく極々当たり前と聖書を読み、讃美歌を歌い、主の道を歩みだし、何時の間にかすっかり染め上げられた人間になっていました。

宮城女学校第一回卒業 4 名、その中の一人である宮本むらさん、通称「おむらさん」の生涯を記した資料・記録等を読んでいくうちに感じたことは、「心の教育」が「知的教育」に欠かせないものであるという事でした。教育は平等に与えられるものと考えられている社会で、どんなに優れた知識、才能を得ても、心の教育がなされなければ無に等しいものになってしまう。だから内なる教育は、小さい時より育てられなければならないのです。

おむらさんは、幼少の頃より多くの苦難を背負いつつ成長し、キリスト教に救われ、御言葉に生かされて、強い心に育てられ、折れそうな自分を祈りで励ましながら生きた「信仰のおむらさん」になっていった事は心に残ります。私自身を振り返ってみると、中学校時代はすべてが珍しかったものでした。東三番丁の校門を入ると赤レンガの建物が目に入り、左側に大講堂、右側にバルコニーのあるヘルスセンター。その奥には音楽科の校舎、目の前には噴水が勢いよく水を噴き上げる。一枚の絵になる風景の学校でした。毎日の通学が楽しく、休みたいと思ったことがありませんでした。中学校時代「つぼみ会」に入り聖書の教えを学び、奉仕することの大切さを教えられ、信仰に生きた人々の証を集いの中

で学ぶ事が多くありました。

つぼみ会の修養会では、猪苗代湖畔の翁島対岸にある高松宮別邸での夏の思い出、キャンプファイヤーを囲んでの楽しいゲームの時間は忘れられないものです。私は教師になり、林間学校、臨海学校で軽井沢、山中湖、富浦海岸などへ行きました。私は野外学習で植物・昆虫採集、マラソン、水泳と子どもたちと一緒に汗を流したものでした。キャンプファイヤーの点火式から始まって、楽しいプログラムを作るのが、宮城学院で学んだことと連なるものでした。さらに夜、キャビン毎に楽しむ時間になると、私の頭のコンピューターは全開するのです。次々と生徒と共に大笑い、歌い、驚きのゲームに挑む生徒の姿は昔の自分のように思えました。又つぼみ会では、川端安子先生が、制服を着ていてもおしゃれが出来るといふ「おしゃれ談話」をして下さいました。廊下を歩くと ホーイ先生、ニコデマス先生、若いシップル先生が英語で挨拶してくださるのに、初めは恥かしくて下を向いて、小さな声でモソモソと挨拶するのみでした。この時期、お父様が大河原教会の牧師をなさっている千葉紀子さんと親しくなり、教会に出席するようになりました。私の信仰生活の始まりは、この時の出会いからでした。

高校に入るとつぼみ会はYWCAになり、中学時代より活発に活動する自分になっていました。ランディス先生のジープに乗り、福島県の浪江教会や小高伝道所の日曜学校のお手伝いとして指人形劇や、ペープサート紙芝居をしたり、讃美歌と一緒に歌い、ゲームで遊んだり、自分が楽しんでいたような気がします。奉仕活動を通して多くの先生方が信仰を持って、私たちに「奉仕とは、、、、」と身近に示して下さいました。

短大に進んでもYWCAでの活動に参加し、大勢の先輩との交わりの機会が与えられました。大学でYWCA全国大会があり、静岡県御殿場にある東山荘の修養会に参加しました。そこでは、全国から集まった学生の熱気に圧倒されたものでした。その修養会で、敬和学園校長の太田敏雄先生の講演を聴くことが出来ました。先生は「共に福音にあづかる」(コリント人への手紙1 9章23節)と題して 信仰 証 共に歩み 共に生きるについて、メッセージを下さいました。夜遅くまでグループディスカッションしたことが、昨日のように思い出されます。得難い貴重な体験が、現在の私の生活基盤になっています。

おむらさんが、クリスチャンとして生きた時代は、封建的な風潮が残っていただろうに、自分の親をキリスト教に導き、出会った人達を教会に誘い、家族と共に主の道を歩まれた人生は、茨の道であったはずなのに、本当にどんな思いで日々の生活としていたのかと考えさせられるのです。聖書教師として生徒の前に立ち、授業する姿を思い浮かべると、おむらさんは真の「証し人」であるようにも思います。

おむらさんの生き方を考える時、私の人生においても素晴らしい人に出会えたことが一番の財産になっていることを思われます。就職でカトリックミッションスクール東京星美学園の面接で出会った人は、黒のベールを身に着けた修道女スオル モニカ学校長でした。最初の言葉が「カトリックもプロテスタントも信仰は同じですから、しっかり指導し

てください」と云う言葉でした。そして、「どんなに若くても、経験が浅くても、先生として人の前に立った時、心を広く、どんな人にも分け隔てなく接し、思いやりのある行動を心掛け人につかえること忘れないよう務めて欲しい。」と話されたのです。その時は、言葉の奥深さを推し量るにはあまりにも私は若かったのです。しかし年を重ねていくうちに、この言葉の重さを理解できるようになりました。今は、この言葉が一番大切な心の宝物となっています。その後、小田信人先生に導かれプロテスタントのミッションスクール女子聖学院小学校部の教師として働き、いつも生徒のそばにいて、読書する時、一緒にその思いを語り、主張しようとする時も一緒に口論し納得のいくまで語り合い、学ぶ時も本気になって輪の中にとびこみ、プールでは競い合って泳ぎ、全身で生徒になりきっていた教師でした。

若い日に出会った生徒、共に教育に携わった同僚、仙台に住んでいてもどこかで巡り合える教え子、外国を旅しても出会える教え子は、私にとってすべてが大切な財産なのです。宮城学院で学んだ一つ一つが私の人生を豊かにしてくれました。主に連なる者としてこれからも共に歩みを強めていきたいと思っています。

そして宮城学院の史実に記され三十歳の若さで天に召された「おむらさん」の实り多い働きとその生涯をもっと多くの同窓生に知って欲しいと心から思いました。こうした出会いや思い出を心に秘めて、これからも生きていくことを決しております。ひとりの同窓生を通して、私は宮城学院で学んだ教育（心を養われた豊かな精神と知性）が今後も、卒業生一人ひとりを豊かにさせるものであって欲しいと願っております。



彙報

2015（平成27）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2015年4月1日～2016年2月29日）

以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

0403	ルクス・ムンディ（Lux Mundi）東北学院同窓会報 2015.3 Vol.18～. Vol.19	東北学院庶務部校友課
0406	日本大学大学史編纂課だより 第8号	日本大学広報部大学史編纂課
0420	大学史資料室ニュース 第19号	大阪市立大学大学史資料室
0424	名古屋大学大学文書資料室ニュース 第32号	名古屋大学大学文書資料室
0427	大分県公文書館だより 第22号	大分県公文書館
0428	キリスト教史学会会報 162号～16号	キリスト教史学会
04～	キリスト教学学校教育 682号～685号	キリスト教学学校教育同盟
04～	東北学院時報 第726号～第729号	学校法人東北学院
04～	白金通信 no.479～no.482	明治学院大学白金通信編集部
04～	青淵 第794号5月号～第803号2月号	渋沢栄一記念財団
04～	ARCHIVES 沖縄県公文書館だより 第48号～第49号	沖縄県文化振興会公文書管理課
0518	慶応義塾福澤研究センター通信 第22号～第23号	慶應義塾福澤研究センター
0526	九州大学 大学文書館ニュース 第38号	九州大学大学文書館
05～	鴨東通信 No.97 春～No.100 冬	思文閣出版
0601	京都大学大学文書館だより 第28号～第29号	京都大学大学文書館
0604	国立公文書館ニュース No.2 2015年6月-8月	国立公文書館
06～	大学時報 No.362～No.365	日本私立大学連盟
0707	大東文化歴史資料館だより 第18号～第19号	大東文化歴史資料館
0724	國學院大学研究開発推進機構機構ニュース Vol.9 No.1～Vol. No.	國學院大學研究開発推進機構

0728	わだつみのこえ記念館 記念館だより No. 9	わだつみのこえ記念館
0803	成瀬記念館 2015 No. 30	日本女子大学成瀬記念館
0818	大谷大学真宗総合研究所研究所報 No. 66	大谷大学真宗総合研究所
1008	東北大学史料館だより No. 23	東北大学学術資源研究公開センター史料館
1013	市史 せんだい Vol. 25 / 2015. 9	仙台市
1106	淑徳大学 アーカイブズ・ニュース 第11号	淑徳大学 アーカイブズ
1124	明治大学史 No. 12	明治大学史資料センター
0119	富山県公文書館年報 第28号 (平成26年度)	富山県公文書館
0119	富山県公文書館だより 第56号～57号	富山県公文書館

(2) 書籍関係 (紀要・年報・目録・図録含む)

0402	RCA伝道局報告書に見るフェリス フェリス女学院150年史資料集 第3集	学校法人 フェリス女学院
0403	東京大学史紀要 第33号～第3号	東京大学史史料室
0406	北海道大学大学文書館年報 第10号	北海道大学大学文書館
0406	沖縄県公文書館研究紀要 第17号	沖縄県文化振興会
0406	覺誌 大学史論輯 第10号	日本大学広報部大学史編纂課
0409	北海道立文書館調査研究事業報告書 第3号	北海道立文書館
0413	学院史料 Vol. 28～Vol. 2	神戸女学院史料室
0420	大阪市立大学恒藤記念室所蔵資料目録 (増補改訂版) 恒藤記念室叢書5	大阪市立大学大学史資料室
0420	自由民権 町田市立自由民権資料館紀要 第28号	町田市教育委員会
0420	風刺漫画に見る明治 民権ボックス28	町田市教育委員会
0420	関西大学年史紀要 第24号	関西大学学術情報事務局博物館事務室 (年史編纂室)
0421	専修大学史紀要 第7号	専修大学大学史資料課
0423	武蔵学園史年報 第19号	学校法人根津育英会武蔵学園
0424	名古屋大学大学文書資料室紀要 第23号	名古屋大学大学文書資料室
0427	渋沢史料館年報 2012年度	渋沢史料館
0427	渋沢史料館報 2009年度～2011年度	渋沢史料館

0427	渋沢栄一再発見！-渋沢史料館のあゆみと名品- 展示記録・講演集	渋沢史料館
0427	渋沢史料館収蔵品展 『徳川慶喜公伝』と渋沢栄 一 展示記録・講演録	渋沢史料館
0428	同文書院記念報 VOL. 23 愛知大学東亜同文書院 大学記念センター紀要	愛知大学東亜同文書院大学 記念センター
0507	GCAS Report 学習院大学大学院人文科学研究科 アーカイブズ学専攻研究年報 Vol. 4	学習院大学大学院人文科学 研究科アーカイブズ学専攻
0508	元興寺文化財研究所研究報告 2014	公益財団法人元興寺文化財 研究所
0518	柳川古文書館年報 平成26年度	九州歴史資料館分館柳川古 文書館
0518	淡輪家史料目録 柳川古文書館史料目録 第25集	九州歴史資料館分館柳川古 文書館
0526	九州大学大学史料叢書 第21輯 九州大学新聞記 事索引3	九州大学大学文書館
0601	玉川大学教育博物館紀要 第12号	玉川大学教育博物館
0608	絵本に関する実証的研究 -『新・講談社の絵本』 を中心として- 野間教育研究所紀要 第55集	公益財団法人野間教育研究所
0618	八王子市史研究 第5号	八王子市
0619	西南学院史紀要 2015.5 Vol. 10	学校法人西南学院
0622	新八王子市史 資料編4 近世2	八王子市
0622	八王子市西南部地域 浅川の民俗 新八王子市史 民俗調査報告書 第3集	八王子市総合政策部市史編 さん室
0622	ふるさとの歴史と記憶をつなぐ 東日本大震災 1400日・史料保全の「いま」と「これから」 被 災地フォーラム宮城報告書	神戸大学大学院人文学研究科
0707	あゆみ 第68号 フェリス女学院資料室紀要	学校法人フェリス女学院
0728	キリスト教史学 第69号	キリスト教史学会
0803	八王子市北部地域 加住の民俗 新八王子市史民 俗調査報告書 第4集	八王子市市史編さん室
0819	真宗総合研究所研究紀要 32	大谷大学真宗総合研究所
0821	学校沿革史の研究 高等学校編2	公益財団法人野間教育研究所
0829	数字が語る 八王子の現代	八王子市市史編さん室
0924	MUSEUM REPORT 玉川大学教育博物館 館報第13号	玉川大学

1007	「幕末・明治を生きた女性たち」別冊歴史REAL	洋泉社MOOK
1008	私ヲ去り、公ニ就ク ―渋沢栄一と銀行業―	渋沢史料館
1124	大阪市立大学史紀要 第8号	大阪市立大学大学史資料室
1124	大学史資料センター報告 36集 大学史活動	明治大学資料センター
1124	大学史紀要第20号 明治大学アジア留学生研究Ⅱ	明治大学資料センター
1125	わだつみのこえ記念館紀要 2015.11月 Vol.1	わだつみのこえ記念館
0104	重要文化財 神戸女学院 <創立140周年記念版>	学校法人 神戸女学院
0104	渋沢研究 第28号 2016年1月	渋沢史料館
0104	渋沢栄一 記念財団の挑戦	公益財団法人 渋沢栄一記念財団
0104	全国史料ネット研究交流集会 報告書 2/14.15	歴史資料ネットワーク設立20周年記念
0119	広岡浅古関連資料目録	日本女子大学成瀬記念館
0119	富山県公文書館文書目録 歴史文書三十	富山県公文書館
0129	慶応義塾と戦争Ⅲ 慶應義塾の昭和二十年	慶応義塾大学アート・センター、福沢研究センター

(3) 受贈資料

0529	昭和のアルバム「仙台・名取」	株式会社電波実験社 昭和のアルバム編集室
0702	2014年度大学卒業アルバム	東陽写場 後藤浩策
0119	日本基督教団矢吹教会創立者 関根要八	福島県キリスト教史研究家 庄司一幸
0127	近代仙台研究会 第1回発表会報告書	斎藤広通

崇めざらんや 天啓の教をなして崇めざらんや。

「橄欖」第八号 一九二九（昭和四）年刊行

偶吟（新渡戸博士の講演を聞ける後）

土井晚翠

一、昭和三年菊薫る月は十一 二十五の

此日何等の恩寵か

道を傳ふる高き聲

ひびけり仙臺五城樓 廣瀬の岸に 青葉の郷に

二、道高くしてまた近き ことわりを説く尊しや

あゝ光明は われを射る

謝せよ 尊く 高き聲

萬古の眞 不朽の理 親しく聞きて 親しく眺む

三、「左傾左傾の彼と此 等しく非なり改めよ」

「中道そこに眞あり」

「天を敬へ人をめでよ」

あゝ澄みわたる秋空を 吹きゆく風か 神宣る音か

四、「四海次第に近けば 世界はやがて ひとつ國

輿論の聲に耳開け

我慾を捨て、神に聞け」

四、二千の年月歴史は長く
使命は新の日本のほまれ
八千餘萬の兄弟姉妹
力を合わせて高きに進め
世界の平和は究竟（クキョウ）の理想。

「橄欖」第七号 一九二六（大正十五）年十二月十日 刊行（創立40周年記念号）

日本青年の歌

晚 翠

一、劍と鏡と珠との教

三種の神器は不朽に光る

心の姿を鏡に照せ

柔らかな珠なり、武勇はつるぎ

日本の國民つとめて奮へ。

二、日本の兄弟互に睦み

互に扶けよ日本の姉妹

内なる心の私慾の敵に

勝つとき運命なんちに強し

無道は亡びん天理の定め。

三、東西ふたつの文化の光

合はせて美妙の姿をこらせ

文武の二の翼に翔けて

堅めよ金剛、心と身とを

旭日は向上無窮のしるし。

嗚呼かれサフランくれなゐの東に生きるる曙光の影か、
嗚呼かれ曙光に照されにほふさゆりの瓣のへ微笑む露か、
嗚呼かれ玉なす露凝る時に九臯清らに鳴く鶴なりや。

清らの人生、やさしの青春
脂粉に馴れざる學びの窓に

たつこと易き春また秋、

桓山四鳥の飛び立つ如く

(さもあれ望を抱きて胸に)

太平洋の秋の波隔てゝ星の國の空に、

或は遠きアルビオンのテムスの水も冷やかか

日輪(さしも帝領に沈むこと無き影暗き)をちに行きしも今あらん。

あゝ若うしてあでやかに、しかも耀き、しかもなほ
けだけき思ひ胸に充てる中のいくたり今逝けり。

(長編詩「青春の天才」の一節)

「橄欖」第六号 一九二六（大正十五）年刊行

おもひで

土井晚翠

「イン、メモリアム」今わが前。

青春の友親しきの逝けるを悼む哀悼歌、

無邊の愁ひ、心海に沈めば雲の湧く如く、

綿々として絶ゆるなき情緒織りなす綾錦、

黄なる泉の底に眠るあとを慕へる無限の涙、

或は天上くまなき光、浴びつゝあらん跡思ふ、

憧憬はてなき至誠の悼「イン、メモリアム」今わが前。

尊し一代詩人の冠冕、

末世の暗は尊き名蔽へど玉は曇り得ず、

とるに足らねど女王朝、人爵得しに先だちて

皇天はやくも恩寵を垂れし昔のあけぼのの

かどでの友を悼めりし『イン、メモリアム』千古に朽ちじ。

『萩や本荒、露重み風を待つ如君をこそ待て』の宮城野遠からず、西のそうびの香も高く
信と望と愛により聖十字架の塔の下、

未來の賢母養ふ枝に二とせにわたり魯鈍の材ながら説きし其の「イン、メモリアム」

紅頬しづかに眉垂れて學びし姿今おもふ、

「橄欖」第五号 一九二五（大正十四）年刊行

「金華山より太平洋を望みて」より

土井晚翠

日出づる邦の東奥のここ今金華靈山の
天は正しく秋なれば、松の緑も満山の
紅葉の榮も一齊に皆白帝の威を語る。

青螺幾百一灣の波しづかなる千松島
向ふ牡鹿の半島の山遮りて見え分かず
こなた近くの群島の蔭人は日ふ月が浦
一葉むかし南歐の都をさし、門出の地、
孤雲幾片悠々の空に泛ぶを眺めしや
其地其波其雲はむかしながらの秋の色。

嗚呼襟正す肅清の秋の山又秋の海、
長く嘯ふき天梯を攀つるが如く恍として
大自然のふところに休らふものは我か人か。
客観主観混じ融けて一切言句の領をさり
塵骸しばし太清の秋の光にひたさるゝ。

グライス、ローマ、アッシリヤ、カルセージ彼何物ぞ？

彼等の自由なりし時、爾の波は権力を、

來し、其のち専制の多くの君主もたらしぬ、

彼等の岸は外人に奴隸に又は蠻族に、

従ひ、彼等衰へて領土は沙漠と干からびぬ、

爾さならず、激浪の戯の外變りなし、

爾の緑の額上に皺を時却は書きつけず、

天地創造のあけぼのゝ見しまゝ爾波を捲く。

爾 光榮のおほ鏡、あらしの中に、

全能の姿おのれを見るところ、あらゆる時に、

なぎに暴びに、微風、暴風、施風に、

或は極洋氷らしめ、或は燃ゆる熱帯に、

暗澹として高まりて、はてしなく、終なく、崇巖に、

「永遠」の肖像、「無象」の王座！

爾の泥の中よりも深淵の怪うまれいづ、

諸帯おのおの爾に従ふ、

爾は進む、恐ろしく、底なく、獨り、悠々と。

墳塋あらず、棺あらず、哀鐘ならず、人知らず。

人の歩みは爾の途の上にあらず、

爾の領は彼の手に入る獲物ならず、

爾はたちておのれより彼をふりすて、賤しくも、

その陸上の破壊にと振ふ力を侮りて、

爾の胸より空に蹴り、

戯れ狂ふ泡沫に震ひて叫ぶ彼を投ぐ、

その運命の神の手に、

小さき希望、傍の港の上にあるところ、

かくして陸にうちつくる——彼を其の場に伏せしめよ。

巖築きしおほいなる都會の壁を雷霆の、

怒るが如く攻めうちて其國の民おのゝかせ、

其帝王をいかめしき首府の最中に震はしむる、

艦隊——樫の大鯨——其巨大なる肋骨は、

之を造れる塵の子に爾の君と戦いの、

判者と高く稱號の空しきものを取らしむる——

これらは爾のもてあそび——爾の波の泡沫の、

中にめいらむ雪に似て、波はひとしく碎き去る、

大「アルマダ」の誇らひとトラファルガーの獲物とを。

爾の岸は世々の帝國、爾をよそに皆遷る、

「橄欖」第四号 一九二四（大正十三）年刊行

バイロン作　チャイルド・ハロウドの巡禮より

土井晚翠

あゝ路なき森に娯楽あり、
淋しき岸への歡喜あり、

誰しも侵し來らざる世界は深き海のそばに、
又は妙楽は波浪の中に、

わが人間の愛少なからず、自然の愛の優るのみ、

その親しみに融けさりて、
すぎこし、又來む境地をすてつ、

口にはたえて述べ得ねど、

包めぬ情を湛ふべく宇宙の中に混じ入らむ。

波まけ、深き濃藍のおほわだつうみ、波をあげよ！

萬艘ならぶ水軍も爾なんぢの上に痕とめず、

波滅のしるし人類の附るはひとり波の上、
其權能のはたらきは岸もるともに止りて、

大海原の面上、破壊はひとり爾の業！

こゝに人間のあらび露もあらず、ひとり己に加ふるのみ、
其時さながら降り來る雨の滴を見る如く、

忽然として泡立て、うめきて塵骸沈みさる、

(七)

「橄欖」第三号 一九二三（大正十二）年刊行

牡丹

土井晚翠

咲きにほふ牡丹の誇、緋のときプリマドンナは此夜うたへり
地に散りし一片拾ひそと口に牡丹に泣きて春惜む人

「妖艶」の權化を此世いづくにか牡丹をよその花に求めむ

妖をきはめ艶をつくして春を魅する牡丹はさきの世何の性

アレマンとガルリアの子と並びあひ牡丹めでつゝ仇忘れずや

永遠の美は永遠の眞とや花には牡丹ホーマアは詩に

いづくにか今は求めん
紅の筆のあやより
流るべきかほりいづこぞ、
清らかの胸の絃より
ひびくべき調いづちに。

(4) 小夜中の星のまたたき

幽玄のはてなき深み

千萬の世界を示す

おほひなるよるのよさしに

魂のひれふす時ぞ

逝けるもの猶もかたへに

叫かむ宇宙の神秘。

「橄欖」第二号 一九二二（大正十二）年刊行

成田榮嬢を追悼みて

土井晚翠

(1) 廣瀬川岸のせせらぎ

夕ぐれに咽ぶ郷より

四十餘里さらに北して

北上の大水淀む

杜の岡空は淋しや

玲瓏の玉は碎けて

おくつきの露のみまろし。

(2) 聖十字高くいだたく

學舎まなびやの窓のあけくれ

琢きたる靈の光も

貯へし知識のかても

いかにせん脆き人の身

たそがれの空にたなびく

白雲の影たゞ長し。

(3) 「榮えよ」と人の祝ひし

すぐれたる才を貌かたちを

★旧かな、旧漢字は晚翠の表記を尊重した。

「橄欖」創刊号一九二二（大正十）年刊行

「橄欖」に題して

土井晚翠

〔一〕 天地に荒びし大水引きて

しのゝめ明け行く空の方舟

窓より飛びしやさしの鳩の

脚みて歸りしみどりの橄欖。

〔二〕 世界に狂ひし戦やめど

希望の光はまだ見ぬわが世

誰ぞ今やさしの腕を舉げて

培ひそだてむみどりの橄欖。

〔三〕 聖なる聖なる君のみあしを

とどめし聖なる丘の夕ぐれ

謳ひし聲ねは胸にひびきて

とこしへ愛でなむみどりの橄欖。

大正十年六月二十七日夜半



ば短絡的であり、危うさを孕んでいる。しかし、これは、明治初年に生を受け、漢詩漢文の素養の上に西欧の文学を貪欲に吸収した晩翠の偽らざる理想でもある。

詩風の一貫性と共に、その後の活動の予兆が見られるのも興味深い。第三号（一九二三年・大正十二）の連作短歌「牡丹」は、「永遠の美は永遠の真とや花には牡丹ホーマアは詩に」で締め括られている。ホメロスへの関心知識自体は、北村透谷の「一夕観」（一八九三・明治二十六年）にも「漠々たる大空は思想の広ろき歴史の紙に似たり。」として「ホーマー」が言及されており、明治の青年が共有するところであつただろう。晩翠は、それにとどまらず、ギリシャ語原典からの翻訳に勢力を傾注し、一九四〇（昭和十五年）年に『イーリアス』、一九四三（昭和十八）年に『オデュッセア』を完成させ刊行している。「永遠の美」「永遠の真」という理念は、ホメロスへの遡及として形象化されたと言つてよい。

『橄欖』掲載の巻頭詩は、文学を通して己が生に向き合い続けた晩翠の真率な姿を彷彿とさせる。晩翠はどこにいても晩翠だったと思わせてくれるのだ。



資料紹介

晩翠、『橄欖』の巻頭詩

宮城学院女子大学 日本文学科 学科長 九里 順子

『橄欖』は、宮城女学校文学会の機関誌として一九二二（大正十）年に創刊され、一九四四（昭和十九）年に廃刊されるまで刊行を続けた。この「文学会」とは、一八九〇（明治二十三）年九月に発足した生徒の自主組織であり、会則第三条の「本会ハ宮城女学校生徒ヨリ成ル」というシンプルな文章が、何とも清々しい。

晩翠は、『橄欖』の第一号から八号（一九二九・昭和四年）まで、毎号巻頭詩を載せている。創刊号の「橄欖」に題して「では、『創世記』のノアの方舟の故事を引きつつ、『みどりの橄欖』、即ちオリーブに世界平和の醸成という理念を託している。第二号（一九二二年・大正十一）の「成田榮嬢を追悼みて」では、「広瀬川岸のせせらぎ」「北上の大水」という風土を織り込みつつ、この世の無常を超えた「宇宙の神秘」を仰望する。生まれ育った風土への愛着が壮大な思念に展開していくのが、晩翠の特徴である。第五号（一九二五年・大正十四）の「金華山より太平洋を望みて」も、漢詩的修辞で陸奥の中秋の美を讃え、支倉常長を偲びつつ、「大自然」と一体化して魂が飛翔する恍惚境に到る。

風土に立脚しつつ超越的な想念に到る展開は、優美な藤村に比する雄渾な晩翠、所謂「藤晩の時代」として、晩翠の名を一躍高からしめた第一詩集『天地有情』（二八九九・明治三十二年）以来、晩翠詩の骨格を成していることが窺える。晩翠は、第二高等学校教授であったが、宮城女学校でも、一九一五（大正四）年四月から一九二四（大正十三）年十二月まで、専攻科で週四時間、英語の教鞭を執っていた。詩風の堅持からは、宮城女学校の生徒たちの志と意識の高さに呼応し、その持続を支えるような、詩人・教育者としての晩翠の姿勢が伝わってくる。晩翠は、優位的な位置に自分を置いて高を括ったりなどしていない。掲載の最終となった第八号の「偶吟（新渡戸稲造博士の講演を聞ける後）」でも、一人の聴衆として「万古の真 不朽の理 親しく聞きて 親しく眺む」と感動を率直に表出している。

第七号（一九二六・大正十五年）は「創立40周年記念号」であり、晩翠も「日本青年の歌」で未来を担う若人を寿いでいる。「三種の神器」を「東西ふたつの文化の光」に直結させ、「世界の平和は究竟の理想」へと昇華させる展開は、今日から見れ

資料室運営委員会

委員長	嶋田 順好	(宮城学院学院長)
委員	深谷 松男	(宮城学院名誉理事)
	田中 弘志	(宮城学院理事)
	J・F・モリス	(宮城学院女子大学教授)
	丸山 仁	(宮城学院中学校・高等学校教諭)
	長井 祥子	(宮城学院同窓会副会長)
	大河内 真	(宮城学院内部監査室長)
陪席	本田 辰雄	(宮城学院事務局長)
資料室	西川 淑	(宮城学院事務嘱託職員)
	富田 しのぶ	(宮城学院事務嘱託職員)
	高橋 芳人	(宮城学院資料室シニアスタッフ)

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2015年度 第21号

2016(平成28)年3月31日発行

編集 宮城学院資料室運営委員会/宮城学院資料室

発行 学校法人宮城学院

〒981-8557

宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

電話 022-279-1311(代表)

022-279-7765(資料室直通)

FAX 022-279-4707

E-mail shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印刷 株式会社 東誠社

〒983-0004 仙台市宮城野区岡田西町1-55

電話 022-287-3351

